

uCosminexus DocumentBroker Rendering Option Version 3

解説書

3020-3-U77-10

対象製品

R-1595E-13 uCosminexus DocumentBroker Rendering Option Version 3 03-68(適用 OS: Windows Server 2003, Windows Server 2003 R2, Windows Server 2003 R2 (x64), Windows Server 2008 x86, Windows Server 2008 R2, Windows XP)

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

Acrobat は、Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の商標です。

Adobe LiveCycle は、Adobe System Incorporated(アドビシステムズ社)の米国ならびに他の国における商標または登録商標です。

CORBA は、Object Management Group が提唱する分散処理環境アーキテクチャの名称です。

GIF は、米国 CompuServe Inc. が開発したフォーマットの名称です。

iGrafx は、カナダ Corel Corporation の登録商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Excel は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Office は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Office および Excel は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Office Word は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。Microsoft Word は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft および PowerPoint は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

OLE は、米国 Microsoft Corp. が開発したソフトウェア名称です。

PostScript は、米国での Adobe Systems, Inc. の商標です。

PowerPoint は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

TIFF は、米国 Aldus Corp. が開発したフォーマットの名称です。

Microsoft および Visio は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Visual Basic は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Visual C++ は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Win32 は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

一太郎は、(株)ジャストシステムの登録商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

製品名称	略称
Microsoft(R) Excel	Excel
Microsoft(R) Office Excel	
Microsoft(R) Office	Office
Microsoft(R) Office PowerPoint(R)	PowerPoint
Microsoft(R) PowerPoint(R)	

製品名称	略称
Microsoft(R) Office Word	Word
Microsoft(R) Word	
Microsoft(R) Visio(R)	Visio
Microsoft(R) Visual Basic(R) Version 5.0 (Service Pack 3 以降)	Visual Basic 5.0
Microsoft(R) Visual Basic(R) Version 6.0	Visual Basic 6.0
Microsoft(R) Visual C++(R) Version 5.0 (Service Pack 3 以降)	Visual C++ 5.0
Microsoft(R) Visual C++(R) Version 6.0	Visual C++ 6.0
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition	Windows Server 2003
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition	
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise Edition	Windows Server 2003 R2
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard Edition	
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise x64 Edition 日本語版	Windows Server 2003 R2 または Windows Server 2003 R2 (x64)
Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard x64 Edition 日本語版	
Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise 32-bit 日本語版	Windows Server 2008 または Windows Server 2008 x86
Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard 32-bit 日本語版	
Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise 日本語版	Windows Server 2008 R2
Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard 日本語版	
Microsoft(R) Windows(R) XP Professional Operating System	Windows XP
The 2007 Microsoft(R) Office system	Microsoft Office
Microsoft(R) Office 2010 system	

Windows Server 2003 , Windows Server 2003 R2 , Windows Server 2003 R2 (x64) , Windows Server 2008 x86 , Windows XP , および Windows Server 2008 R2 を総称して Windows と表記します。それぞれの製品について個別に説明する場合は、製品名称を使用します。

発行

2013 年 1 月 3020-3-U77-10

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2007, Hitachi, Ltd.

All Rights Reserved. Copyright (C) 2007, 2013, Hitachi Solutions, Ltd.

変更内容

変更内容 (3020-3-U77-10) DocumentBroker Rendering Option Version 3 03-68

追加・変更内容	変更箇所
レンディション変換対象の文書として、Office 2010 形式の文書を扱えるようになりました。	1.1
Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 をサポートしました。	1.2 , 3.2 , 6.1.3
前提 OS に Windows Server 2008 R2 をサポートしました。	-

はじめに

このマニュアルは、プログラムプロダクト R-1595E-13 uCosminexus DocumentBroker Rendering Option Version 3 のレンディション変換機能とその使い方について説明したものです。

以降、このマニュアルでは、uCosminexus DocumentBroker Rendering Option Version 3 のことをレンダリングオプションと表記します。

なお、このマニュアルでは、PDFstaff および Microsoft Office と連携したレンディション変換機能について説明します。

対象読者

このマニュアルは、レンダリングオプションを使ってレンディション変換要求を行うシステム管理者の方を対象としています。なお、次の内容を理解されていることを前提としています。

- uCosminexus DocumentBroker のオブジェクトモデルに関する知識
- Windows に関する知識
- 分散オブジェクト技術に関する知識

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章と付録から構成されています。

第 1 章 レンダリングオプションの概要

レンダリングオプションの概要について説明しています。

第 2 章 実行環境の設定

レンダリングオプションを使用するために必要な環境設定について説明しています。

第 3 章 運用例

運用モデルを例にして、レンダリングオプションの実行環境の設定からレンディション変換要求までの作業内容と手順を説明しています。

第 4 章 運用方法

レンダリングオプションの起動方法や停止方法、レンディション変換をするために必要な操作など、レンダリングオプションの運用方法について説明しています。

第 5 章 コマンドリファレンス

レンダリングオプションで使用するコマンドについて説明しています。

第 6 章 レンディション変換で使用するファイル

レンディション変換で使用するファイルの詳細について説明しています。

第 7 章 障害対策

レンダリングオプションで発生した障害の原因を調査する方法や対処方法について説明しています。

第 8 章 メッセージ

レンダリングオプションが出力するメッセージについて説明しています。

付録 A レンディション変換前後の変換フラグおよび状態フラグの遷移

レンディション変換の処理前後の変換先レンディションの変換フラグおよび状態フラグの値の遷移について説明しています。

付録 B JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化するための環境設定

JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化するための環境設定について説明しています。

はじめに

- 付録 C 複数の文書空間が存在するシステムでのレンディション変換
複数の文書空間が存在するシステムでのレンディション変換方法について説明しています。
- 付録 D ユーザ定義プラグインの設計と作成方法
ユーザ定義プラグインの設計と作成方法について説明しています。
- 付録 E UOC の設計と作成方法
UOC の設計と作成方法について説明しています。
- 付録 F 用語解説
レンダリングオプションで使用する用語について説明しています。

関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。なお、本文に記載のマニュアル名称は、「uCosminexus DocumentBroker」を「DocumentBroker」と表記しています。

- uCosminexus DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド (3020-3-U71)
DocumentBroker を使用する環境を定義、管理および運用する場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説 (3000-3-F13)
クラスライブラリの機能と、クラスライブラリを使用するために必要なオブジェクトモデルについて知りたい場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ リファレンス 基本機能編 (3000-3-F14)
クラスライブラリのクラスの詳細とメソッドの文法について知りたい場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール (3000-3-F15)
クラスライブラリの API をコマンド形式で実行できるオブジェクト操作ツールについて知りたい場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 メッセージ (3000-3-F12)
DocumentBroker が出力するメッセージについて知りたい場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説 (3000-3-F16)
Java クラスライブラリの機能および環境設定の方法について知りたい場合に参照してください。
- uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java リファレンス (3000-3-F17)
Java クラスライブラリの詳細、インターフェースの詳細、メソッドの文法およびメッセージの詳細について知りたい場合に参照してください。
- JP1 Version 6 JP1/Automatic Job Management System 2 運用・操作編 (3020-3-980)
JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化する場合に、JP1/AJS2 の環境設定の詳細について知りたいときに参照してください。

読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択してお読みいただけます。次に示す表を参考にして、お読みになる章を選択してください。

マニュアルを読む目的	記述個所
レンダリングオプションの機能の概要を知りたい	1章
レンダリングオプションの実行環境の設定方法を知りたい	2章
レンダリングオプションの運用例を知りたい	3章

マニュアルを読む目的	記述 箇所
レンダリングオプションの運用方法を知りたい	4 章
レンダリングオプションで使用するコマンドについて知りたい	5 章
レンディション変換で使用するファイルの詳細について知りたい	6 章
レンダリングオプションでの障害対策について知りたい	7 章
レンダリングオプションの出力するメッセージについて知りたい	8 章
レンディション変換前後の文書の変換フラグおよび状態フラグの遷移について知りたい	付録 A
JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化するための環境設定について知りたい	付録 B
複数の文書空間が存在するシステムでのレンディション変換方法を知りたい	付録 C
ユーザ定義プラグインの設計と作成方法を知りたい	付録 D
UOC の設計と作成方法を知りたい	付録 E
マニュアル内で使用されている用語について調べたい	付録 F

このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名称を次に示す略称で表記しています。

製品名称	略称
Adobe Acrobat 4.0, Adobe Acrobat 4.05, Adobe Acrobat 5.0, Adobe Acrobat 6.0 および Adobe Acrobat 7.0	Acrobat
Adobe LiveCycle PDF Generator for PostScript 7.0	Adobe LiveCycle PDF Generator
Adobe LiveCycle PDF Generator for PostScript 7.2	
Adobe LiveCycle PDF Generator ES2	
uCosminexus DocumentBroker Development Kit Version	DocumentBroker
uCosminexus DocumentBroker Runtime Version 3	
uCosminexus DocumentBroker Server Version 3	
uCosminexus DocumentBroker Development Kit Version 3	DocumentBroker クライアント
uCosminexus DocumentBroker Runtime Version 3	
uCosminexus DocumentBroker Development Kit Version 3	DocumentBroker Development Kit
uCosminexus DocumentBroker Runtime Version 3	DocumentBroker Runtime
uCosminexus DocumentBroker Server Version 3	DocumentBroker サーバ
uCosminexus DocumentBroker Server Version 3	DocumentBroker Server
uCosminexus DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール	オブジェクト操作ツール
JP1/Automatic Job Management System 2	JP1/AJS2
TPBroker Developer for C++	TPBroker
TPBroker for C++	
Win32(R)	Win32
活文 PDFstaff	PDFstaff
活文 PDFstaff Server Runtime	PDFstaff Runtime
活文 PDFstaff SDK	PDFstaff SDK
活文 PDFstaff Server	PDFstaff Server

製品名称	略称
活文 PDFstaff Web	PDFstaff Web

このほか、このマニュアルでは PDFstaff Runtime および PDFstaff SDK を合わせて PDFstaff と表記します。それぞれの製品について個別に説明する場合は、製品名称を使用します。

uCosminexus DocumentBroker のマニュアルで使用する略語

uCosminexus DocumentBroker のマニュアルで使用する英略語を次に示します。

英略語	英字での表記
ACE	<u>A</u> ccess <u>C</u> ontrol <u>E</u> lement
ACFlag	<u>A</u> ccess <u>C</u> ontrol <u>F</u> lag
ACL	<u>A</u> ccess <u>C</u> ontrol <u>L</u> ist
AIIM	<u>A</u> ssociation for <u>I</u> nformation and <u>I</u> mage <u>M</u> anagement <u>I</u> nternational
API	<u>A</u> pplication <u>P</u> rogramming <u>I</u> nterface
ASCII	<u>A</u> merican <u>S</u> tandard <u>C</u> ode for <u>I</u> nformation <u>I</u> nterchange
BES	<u>B</u> ack <u>E</u> nd <u>S</u> erver
BLOB	<u>B</u> inary <u>L</u> arge <u>O</u> bject
BMP	<u>B</u> it <u>M</u> ap
BNF	<u>B</u> ackus <u>N</u> ormal <u>F</u> orm
BOA	<u>B</u> asic <u>O</u> bject <u>A</u> dapter
CD-ROM	<u>C</u> ompact <u>D</u> isc <u>R</u> ead <u>O</u> nly <u>M</u> emory
CGI	<u>C</u> ommon <u>G</u> ateway <u>I</u> nterface
CORBA	<u>C</u> ommon <u>O</u> bject <u>R</u> equest <u>B</u> roker <u>A</u> rchitecture
CPU	<u>C</u> entral <u>P</u> rocessing <u>U</u> nit
CR	<u>C</u> arriage <u>R</u> eturn
CSV	<u>C</u> omma <u>S</u> eparated <u>V</u> alue
DAP	<u>D</u> irectory <u>A</u> ccess <u>P</u> rotocol
DAT	<u>D</u> igital <u>A</u> udio <u>T</u> ape
DB	<u>D</u> ata <u>b</u> ase
DBMS	<u>D</u> ata <u>b</u> ase <u>M</u> anagement <u>S</u> ystem
DCD	<u>D</u> ocument <u>C</u> ontent <u>D</u> escription
DIT	<u>D</u> irectory <u>I</u> nformation <u>T</u> ree
DLL	<u>D</u> ynamic <u>L</u> inking <u>L</u> ibrary
DMA	<u>D</u> ocument <u>M</u> anagement <u>A</u> lliance
DN	<u>D</u> istinguished <u>N</u> ame
dpi	<u>D</u> ot <u>P</u> er <u>I</u> nch
EOF	<u>E</u> nd of <u>F</u> ile
EPS	<u>E</u> ncapsulated <u>P</u> ost <u>S</u> cript
ESIS-B	<u>E</u> lement <u>S</u> tructure <u>I</u> nformation <u>S</u> et- <u>B</u> inary <u>F</u> ormat

英略語	英字での表記
GIF	<u>G</u> raphics <u>I</u> nterchange <u>F</u> ormat
GUI	<u>G</u> raphical <u>U</u> ser <u>I</u> nterface
GUID	<u>G</u> lobally <u>U</u> nique <u>I</u> dentifier
HTML	<u>H</u> ypertext <u>M</u> arkup <u>L</u> anguage
HTTP	<u>H</u> ypertext <u>T</u> ransfer <u>P</u> rotocol
IANA	<u>I</u> nternet <u>A</u> ssigned <u>N</u> umbers <u>A</u> uthority
ID	<u>I</u> dentifier
ISO	<u>I</u> nternational <u>O</u> rganization for Standardization
JIS	<u>J</u> apanese <u>I</u> ndustrial <u>S</u> tandards
JPEG	<u>J</u> oint <u>P</u> hotographic <u>E</u> xpert <u>G</u> roup
LAN	<u>L</u> ocal <u>A</u> rea <u>N</u> etwork
LDAP	<u>L</u> ightweight <u>D</u> irectory <u>A</u> ccess <u>P</u> rotocol
LF	<u>L</u> ine <u>F</u> eed
MFC	<u>M</u> icrosoft <u>F</u> oundation <u>C</u> lass
MIME	<u>M</u> ultipurpose <u>I</u> nternet <u>M</u> ail <u>E</u> xtensions
OCR	<u>O</u> ptical <u>C</u> haracter <u>R</u> eaders
OIID	<u>O</u> bject <u>I</u> nstance <u>I</u> dentifier
OLE	<u>O</u> bject <u>L</u> inking and <u>E</u> mbedding
OMG	<u>O</u> bject <u>M</u> anagement <u>G</u> roup
ORB	<u>O</u> bject <u>R</u> equest <u>B</u> roker
ORDB	<u>O</u> bject <u>R</u> elational <u>D</u> atabase
OS	<u>O</u> perating <u>S</u> ystem
OTS	<u>O</u> bject <u>T</u> ransaction <u>S</u> ervice
PC	<u>P</u> ersonal <u>C</u> omputer
PDF	<u>P</u> ortable <u>D</u> ocument <u>F</u> ormat
PS	<u>P</u> ostScript
RDB	<u>R</u> elational <u>D</u> atabase
RDN	<u>R</u> elative <u>D</u> istinguished <u>N</u> ame
RFC	<u>R</u> equest for <u>C</u> omment
RTF	<u>R</u> ich <u>T</u> ext <u>F</u> ormat
SMTP	<u>S</u> imple <u>M</u> ail <u>T</u> ransfer <u>P</u> rotocol
TCP/IP	<u>T</u> ransmission <u>C</u> ontrol <u>P</u> rotocol/ <u>I</u> nternet <u>P</u> rotocol
TIFF	<u>T</u> ag <u>I</u> mage <u>F</u> ile <u>F</u> ormat
UCS-2	<u>U</u> niversal <u>C</u> haracter <u>S</u> et coded in <u>2</u> octets
UCS-4	<u>U</u> niversal <u>C</u> haracter <u>S</u> et coded in <u>4</u> octets
UOC	<u>U</u> ser <u>O</u> wn <u>C</u> oding
URL	<u>U</u> niform <u>R</u> esource <u>L</u> ocator
UTC	<u>U</u> niversal <u>T</u> ime <u>C</u> oordinated

英略語	英字での表記
UTF-8	8-bit <u>U</u> CS <u>T</u> ransformation <u>F</u> ormat
W3C	World <u>W</u> ide Web <u>C</u> onsortium
WWW	World <u>W</u> ide Web
XML	Extensible <u>M</u> arkup <u>L</u> anguage

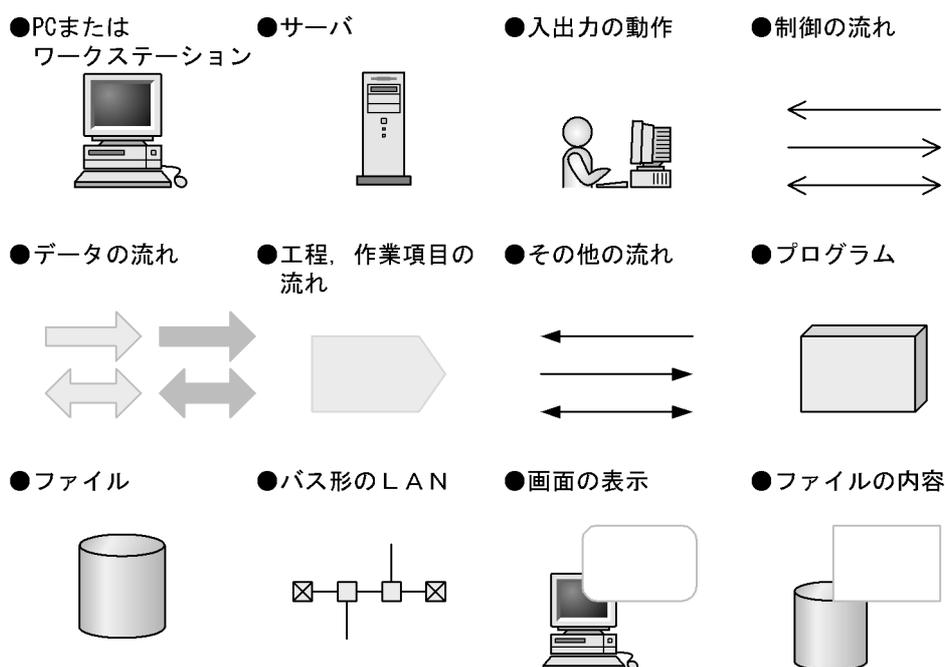
このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから一つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの一つを選択します。 (例) { A B C } A, B または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを意味します。複数の項目が横に並べて記述されている場合には、すべてを省略するか、記号 {} と同じくどれか一つを選択します。 (例 1) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 (例 2) [B C] 「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示します。
: : =	この記号の左にあるものを右にあるもので定義することを示します。 (例) A : : = B 「A とは B である」と定義することを示します。
...	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC... ABC の後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。

このマニュアルの図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を、次のように定義します。



常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは、常用漢字を使用することを基本としていますが、次に示す用語については、常用漢字以外の漢字を使用しています。

個所（かしよ）、必須（ひっす）、閉塞（へいそく）

KB（キロバイト）などの単位表記について

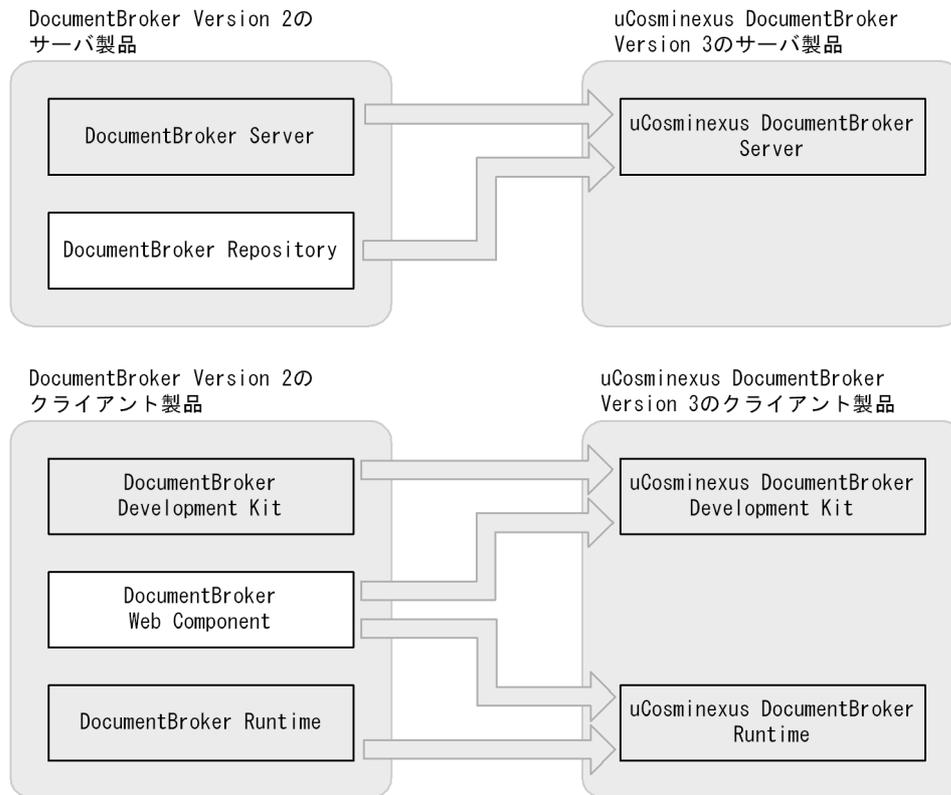
1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ $1,024$ バイト、 $1,024^2$ バイト、 $1,024^3$ バイト、 $1,024^4$ バイトです。

DocumentBroker Version 2 と uCosminexus DocumentBroker Version 3 の製品体系の違い

uCosminexus DocumentBroker Version 3 では次のように製品の統合を行いました。

- DocumentBroker Repository を uCosminexus DocumentBroker Server に統合しました。
- DocumentBroker Web Component を uCosminexus DocumentBroker Development Kit および uCosminexus DocumentBroker Runtime に統合しました。

DocumentBroker Version 2 と uCosminexus DocumentBroker Version 3 の製品体系の違いを次に示します。



DocumentBroker Version 2 と uCosminexus DocumentBroker Version 3 のマニュアルの対応

バージョンアップおよび製品体系の変更に伴い、uCosminexus DocumentBroker Version 3 では次に示すようにマニュアル名称を変更しました。

Version 2 のマニュアル名称	Version 3 のマニュアル名称
DocumentBroker Version 2 システム導入・運用ガイド	uCosminexus DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド
DocumentBroker Version 2 クラスライブラリ 解説	uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説
DocumentBroker Version 2 クラスライブラリ リファレンス 基本機能編	uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ リファレンス 基本機能編
DocumentBroker Version 2 クラスライブラリ リファレンス 概念 SGML 文書管理機能編	廃版
DocumentBroker Version 2 オブジェクト操作ツール	uCosminexus DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール
DocumentBroker Version 2 統計解析ツール	uCosminexus DocumentBroker Version 3 統計解析ツール
DocumentBroker Version 2 メッセージ	uCosminexus DocumentBroker Version 3 メッセージ
DocumentBroker Web Component Version 2 解説	uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説
DocumentBroker Web Component Version 2 リファレンス	uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java リファレンス

Version 2 のマニュアル名称	Version 3 のマニュアル名称
DocumentBroker Web Component Version 2 サンプル Web アプリケーション	uCosminexus DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java サンプル Web アプリケーション
DocumentBroker Text Search Index Loader Version 2	uCosminexus DocumentBroker Text Search Index Loader Version 3
DocumentBroker Rendering Option システム導入・運用ガイド	uCosminexus DocumentBroker Rendering Option Version 3
DocumentBroker Object Loader Version 2	uCosminexus DocumentBroker Object Loader Version 3

目次

1	レンダリングオプションの概要	1
1.1	レンダリングオプションとは	2
1.2	システム構成	7
1.3	レンダリングオプションの処理概要	10
1.3.1	レンディションの変換要求	10
1.3.2	レンディション変換の実行	13
1.4	レンダリングオプションで使用できる文字コード種別	18
2	実行環境の設定	19
2.1	実行環境設定の流れ	20
2.2	インストールとアンインストール	21
2.2.1	インストール	21
2.2.2	リモートインストールの場合のインストール先	22
2.2.3	ディレクトリ構成の確認	22
2.2.4	アンインストール	26
2.3	レンディション変換用 PC の前提プログラムの設定	28
2.4	環境変数の設定	29
2.5	ユーザ情報の作成	31
2.6	ユーザ定義プラグインの作成	32
2.7	UOC の作成	33
2.8	環境設定ファイルの設定	34
3	運用例	35
3.1	運用モデル	36
3.2	運用モデルでのレンダリングオプションの導入から使用開始まで	38
4	運用方法	43
4.1	起動方法と停止方法	44
4.1.1	起動方法	44
4.1.2	停止方法	44
4.2	DocumentBroker クライアントでのレンディション変換の準備	45
4.2.1	新規にレンディション変換をする場合	45
4.2.2	マスタレンディションを更新して再びレンディション変換する場合	46
4.2.3	レンディション変換でエラーになった文書を再びレンディション変換する場合	48

5	コマンドリファレンス	51
5.1	実行コマンド一覧	52
5.2	コマンドの形式	53
5.3	コマンドの文法	55
6	レンディション変換で使用するファイル	59
6.1	環境設定ファイル	60
6.1.1	環境設定ファイルの記述形式	60
6.1.2	レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)	60
6.1.3	レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini)	64
6.2	変換元レンディションタイプ一覧ファイル	73
6.3	変換対象文書クラス一覧ファイル	74
6.4	変換オプションファイル	75
6.5	レンディションタイプの指定方法	76
7	障害対策	79
7.1	ログ情報の採取方法とその見方	80
7.1.1	イベントログの採取方法とその見方	80
7.1.2	変換要求受け付けログの採取方法とその見方	81
7.1.3	変換結果ログの採取方法とその見方	82
7.1.4	変換処理ログの採取方法とその見方	82
7.1.5	エラーログの採取方法とその見方	83
7.2	トレース情報の採取方法	84
7.2.1	レンダリングオプションのトレースファイルの採取方法	84
7.2.2	DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイルの採取方法	84
7.3	変換エラーになったファイルの採取方法	86
7.4	ログの出力形式	87
7.4.1	基本的な出力形式	87
7.4.2	変換要求受け付けログの出力形式	87
7.4.3	変換結果ログの出力形式	88
7.4.4	変換処理ログの出力形式	89
7.4.5	エラーログの出力形式	90
8	メッセージ	91
8.1	メッセージの出力先	92
8.2	メッセージの形式	93
8.2.1	メッセージの出力形式	93
8.2.2	メッセージの記述形式	93

付録

付録 A	レンディション変換前後の変換フラグおよび状態フラグの遷移	113
付録 B	JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化するための環境設定	114
付録 B.1	OS ユーザの登録	115
付録 B.2	「JP1/AJS2 サービス」のアカウントの設定	116
付録 B.3	JP1/AJS2 の環境設定	116
付録 B.4	ジョブネットの定義	118
付録 C	複数の文書空間が存在するシステムでのレンディション変換	120
付録 D	ユーザ定義プラグインの設計と作成方法	122
付録 D.1	ユーザ定義プラグインの処理概要	122
付録 D.2	ユーザ定義プラグインの作成に使用できる言語	122
付録 D.3	ユーザ定義プラグインのインターフェースの詳細	123
付録 D.4	ユーザ定義プラグインの設計時の注意事項	125
付録 E	UOC の設計と作成方法	126
付録 E.1	UOC の処理概要	126
付録 E.2	UOC の作成に使用できる言語	127
付録 E.3	UOC のインターフェースの詳細	128
付録 E.4	UOC の設計時の注意事項	130
付録 E.5	UOC の環境設定	130
付録 F	用語解説	132

索引

1

レンダリングオプションの概要

この章では、レンダリングオプションの概要について説明します。

-
- 1.1 レンダリングオプションとは
 - 1.2 システム構成
 - 1.3 レンダリングオプションの処理概要
 - 1.4 レンダリングオプションで利用できる文字コード種別
-

1.1 レンダリングオプションとは

レンダリングオプションは、DocumentBroker でマルチレンディション機能を利用して文書を管理する場合に、バッチ処理でレンディション変換を実行する製品です。この節では、まず DocumentBroker のマルチレンディション機能の概要について説明し、次にレンダリングオプションのレンディション変換機能の概要について説明します。

(1) DocumentBroker のマルチレンディション機能

DocumentBroker では、一つの文書に同一内容の複数の異なる形式のコンテンツを登録して管理できます。この機能をマルチレンディション機能といいます。マルチレンディション機能を利用すると、一つの文書に対して最大 10 個の形式のコンテンツを登録して管理できます。DocumentBroker では、文書のコンテンツの形式（レンディションタイプ）およびそのコンテンツ（文書ファイル）を併せてレンディションと呼びます。また、最初に登録したレンディションをマスタレンディション、追加したレンディションをサブレンディションと呼んで区別します。追加したサブレンディションは、削除できます。ただし、マスタレンディションは削除できません。また、サブレンディションをマスタレンディションに変更することもできます。この場合、それまでマスタレンディションだったレンディションはサブレンディションに変更されます。

通常、文書を作成する業務では、Word や一太郎などのアプリケーションプログラムで文書ファイルを編集します。これらの文書編集用のアプリケーションプログラムで作成した文書ファイルを公開するとき、次のような問題が発生することがあります。

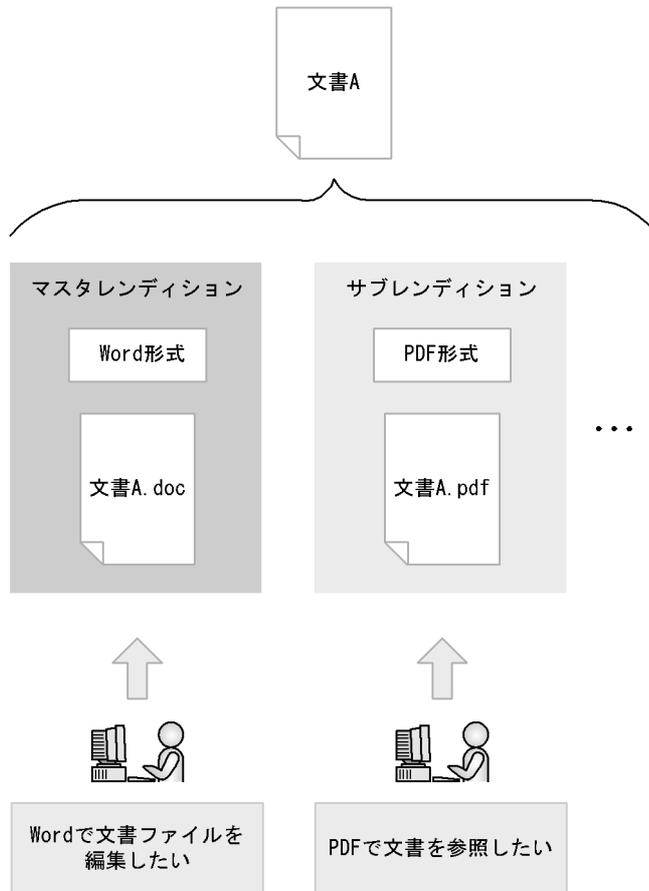
- 文書ファイルを編集したアプリケーションプログラムがインストールされている環境でなければ参照できない
- 文書ファイルを編集したアプリケーションプログラムがインストールされている環境であっても、アプリケーションプログラムのバージョンが異なると参照できない
- 編集に使用したアプリケーションプログラムで参照すると、文書ファイルの内容を誤って編集してしまうおそれがある

これらの問題を解消するためには、編集に適したレンディションタイプの文書ファイルと、参照に適したレンディションタイプの文書ファイルを用意し、区別して管理することが必要になります。

DocumentBroker のマルチレンディション機能を利用すると、編集に使用する Word や一太郎などの文書ファイルをマスタレンディションに、参照に使用する PDF などの文書ファイルをサブレンディションに登録して、一つの文書としてまとめて管理できます。

マルチレンディション機能を利用した場合の文書管理の例を次の図に示します。

図 1-1 マルチレンディション機能を利用した場合の文書管理の例



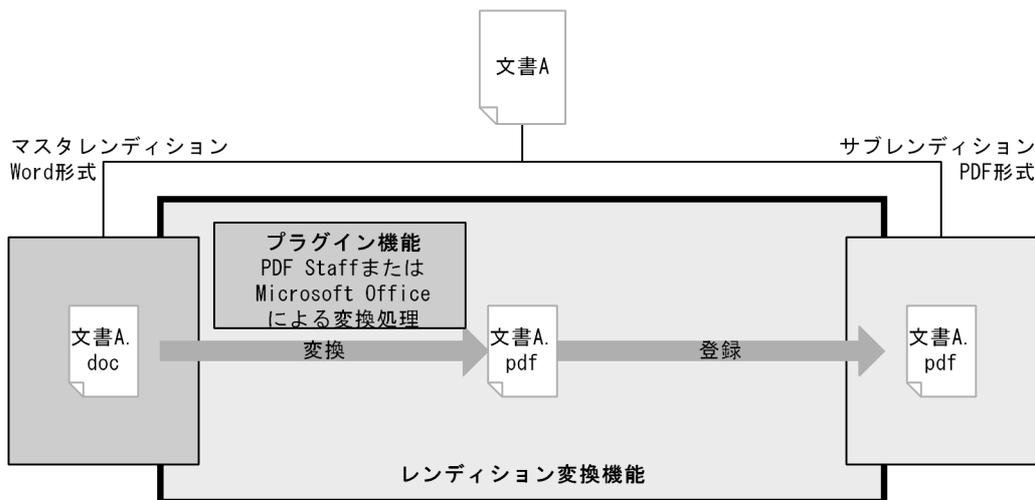
(2) レンダリングオプションのレンディション変換機能

レンダリングオプションは、DocumentBroker に登録された文書のマスタレンディションの文書ファイルを、サブレンディションで指定されているレンディションタイプの文書ファイルに変換し、サブレンディションのコンテンツとして登録する機能を持ちます。この機能をレンディション変換機能といいます。文書ファイルの変換処理は、PDFstaff や Microsoft Office など、ほかのアプリケーションプログラムで行います。レンダリングオプションは、変換処理を行うアプリケーションプログラムへのプラグイン機能を持ちます。なお、PDFstaff はレンディション変換用のマシンの OS が Windows Server 2003 R2 (x64)、Windows Server 2008、Windows XP、および Windows 2008 R2 の場合は使用できません。

例えば、Word 形式の文書を PDF 形式の文書に変換・登録するときは、次の図に示すよう処理されます。

1. レンダリングオプションの概要

図 1-2 レンディション変換機能の処理



レンダリングオプションのレンディション変換機能を利用すると、サブレンディションの文書ファイルをバッチ処理で一括して作成し、サブレンディションのコンテンツとして登録できます。マルチレンディションの文書を登録するときに、ユーザがサブレンディションの文書ファイルを準備する手間が省けるため、各文書の登録時間を短縮できます。

レンダリングオプションでは、レンディション変換対象の文書のマスタレンディションのことを変換元レンディション、変換後のサブレンディションのことを変換先レンディションと呼びます。また、変換元レンディションの文書ファイルを変換元ファイル、変換先レンディションの文書ファイルを変換先ファイルと呼びます。

レンダリングオプションが標準提供するプラグイン機能での変換元レンディションタイプと変換先レンディションタイプを次の表に示します。

表 1-1 標準提供のプラグイン機能での変換元レンディションタイプ

レンディションタイプ	拡張子	変換元のアプリケーションプログラム	PDFstaff	Microsoft Office
Word 形式	application/msword	.doc	Word 2000	
		Word 2002		
		Word 2003		
		Word 2007		
		Word 2010		
	application/vnd.ms-word.document.macroEnabled.12	.docm	Word 2007	
		Word 2010		
Excel 形式	application/vnd.ms-excel	.xls	Word 2007	
			Word 2010	
			Excel 2000	
			Excel 2002	
			Excel 2003	
			Excel 2007	

レンディションタイプ	拡張子	変換元のアプリケーションプログラム	PDFst aff	Micros oft Office		
	application/ vnd.ms-excel.sheet.binary.macroEnabled.12	.xlsb	Excel 2010			
			Excel 2007			
	application/ vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12	.xlsm	Excel 2010			
			Excel 2007			
	application/ vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheet	.xlsx	Excel 2010			
			Excel 2007			
	PowerPoint 形式	application/vnd.ms-powerpoint	.ppt	PowerPoint 2000		
				PowerPoint 2002		
				PowerPoint 2003		
PowerPoint 2007						
PowerPoint 2010						
application/ vnd.ms-powerpoint.presentation.macroEnabled.12		.pptm	PowerPoint 2007			
			PowerPoint 2010			
application/ vnd.openxmlformats-officedocument.presentationml.presentation		.pptx	PowerPoint 2007			
			PowerPoint 2010			
Visio 形式	application/vnd.visio	.vsd	Visio 2003		x	
			Visio 2007			
			Visio 2010			
一太郎形式	application/jxw または application/x-js-taro	.jtd .jfw .jbw .jaw .jsw	一太郎 2004 ~ 2006 一太郎 10 ~ 13		x	
プレーンテキスト形式	text/plain	.txt	-			
TIFF 形式	image/tiff	.tif .tiff	-		x	
JPEG 形式	image/jpeg	.jpg .jpeg	-		x	
GIF 形式	image/gif	.gif	-		x	

1. レンダリングオプションの概要

レンディションタイプ		拡張子	変換元のアプリケーションプログラム	PDFstaff	Microsoft Office
BMP 形式	image/bmp	.bmp	-		×
PNG 形式	image/png	.png	-		×
EPS 形式または ポストスクリプト形式	application/postscript	.eps .ps	-		×
Web アーカイブ ファイル形式	message/rfc822	.mht	-		×
リッチテキスト 形式	application/rtf	.rtf	-		
iGrafx ファイル 形式	application/vnd.micrografx.igx	.igx	iGrafx		×

(凡例)

: 変換できます。 × : 変換できません。

注

一太郎 10 より前のバージョンで作成した文書も、レンディション変換できる場合があります。一太郎 10 より前のバージョンで作成した文書の変換可否については、PDFstaff の仕様を確認してください。

表 1-2 標準提供のプラグイン機能での変換先レンディションタイプ

レンディションタイプ	拡張子	備考
PDF 形式 (application/pdf)	.pdf	-

このマニュアルでは、標準提供のプラグイン機能によるレンディション変換のことを標準のレンディション変換と呼びます。

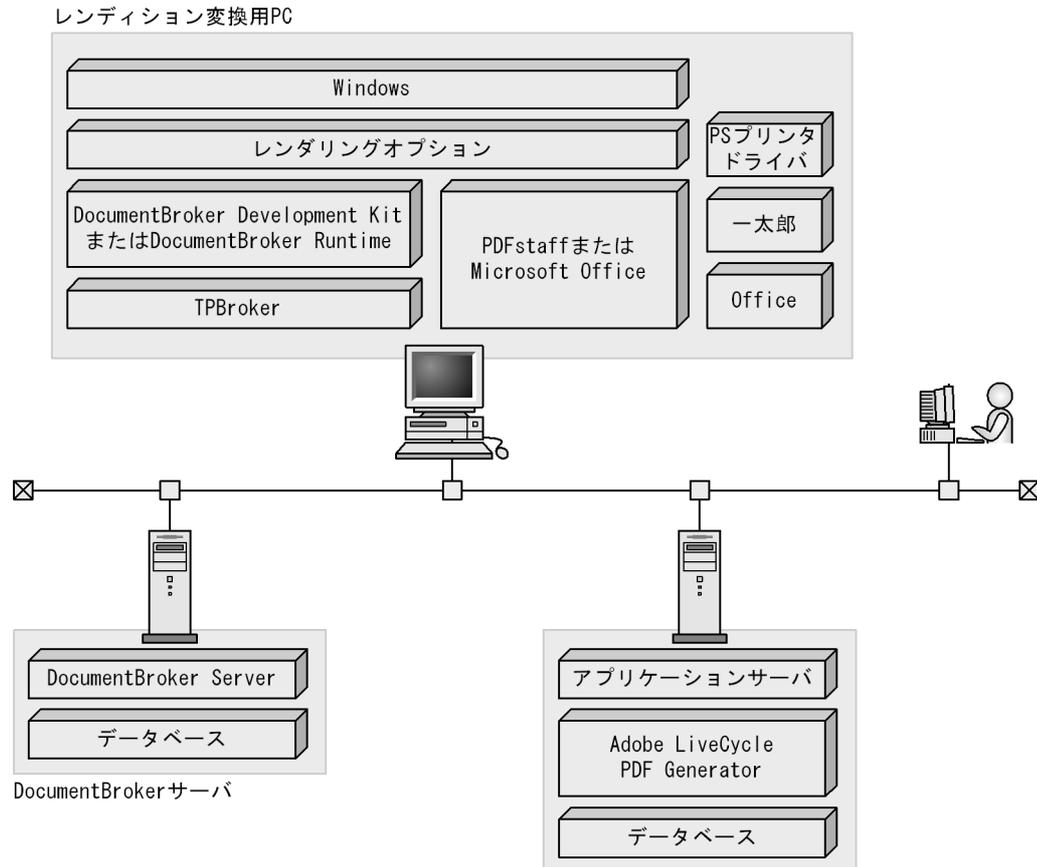
レンダリングオプションでは、標準のレンディション変換以外にも、ユーザが作成・定義したプラグイン機能を利用したレンディション変換も実現できます。例えば、変換元レンディションを Excel 形式、変換先レンディションを CSV 形式にするレンディション変換や、変換元レンディションを Word 形式、変換先レンディションを HTML 形式にするレンディション変換などは、ユーザが変換処理部分のプラグインのプログラムを作成して定義することで実現します。レンダリングオプションでは、ユーザによるプラグインのプログラムの作成を支援するために、サンプルプログラムを提供しています。

1.2 システム構成

この節では、レンダリングオプションが動作するためのシステム構成について説明します。

レンダリングオプションが動作するためのシステム構成例を次の図に示します。

図 1-3 レンダリングオプションのシステム構成例



このマニュアルでは、レンダリングオプションをインストールしてレンディション変換を実行する DocumentBroker クライアントのことをレンディション変換用 PC と呼びます。

(1) レンディション変換用 PC の前提プログラムの構成

ここでは、標準のレンディション変換を実現する場合のレンディション変換用 PC の前提プログラムの構成について説明します。DocumentBroker クライアントの構成については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」またはマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」を参照してください。DocumentBroker サーバの構成については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime

DocumentBroker Server にアクセスするために必要なプログラムです。

レンダリングオプションは DocumentBroker Runtime があれば動作しますが、レンディション変換用 PC が DocumentBroker クライアントの開発環境を兼ねる場合は DocumentBroker Development Kit が必要です。

なお、図 1-3 のように、レンディション変換用 PC を DocumentBroker サーバとは別のマシンに構築

1. レンダリングオプションの概要

する場合は、ファイル転送機能を使用します。ファイル転送機能の使用については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

TPBroker

DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime が使用する ORB です。

PDFstaff

PDFstaff を使用して、レンディション変換対象の文書を PDF 形式のファイルに変換する場合に必要なプログラムです。使用する PDFstaff の対応 OS については、PDFstaff のマニュアルを参照してください。なお、Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 を使用する場合は、PDF staff 02-06 以降を使用してください。

Office

PDFstaff を使用して、レンディション変換対象の文書を PDF 形式のファイルに変換する場合で、Office のアプリケーションプログラム（Word、Excel または PowerPoint）で作成した文書ファイルを変換元にしてレンディション変換するときが必要です。

一太郎

PDFstaff を使用して、レンディション変換対象の文書を PDF 形式のファイルに変換する場合で、一太郎で作成した文書ファイルを変換元にしてレンディション変換するときが必要です。

Microsoft Office

Microsoft Office を使用して、レンディション変換対象の文書を PDF 形式のファイルに変換する場合に必要なプログラムです。

(2) レンダリングオプションの構成

ここでは、レンダリングオプションの構成について説明します。

レンダリングオプションは、次の図に示す構成になっています。

図 1-4 レンダリングオプションの構成



各構成要素について説明します。

レンディション変換要求コマンド

変換対象の文書クラスや変換先レンディションなどを指定して、レンダリングオプションにレンディション変換を要求します。Windows のコマンドプロンプトから入力するコマンドです。

レンディション変換プラグイン

変換元ファイルから変換先ファイルへの変換処理を行うアプリケーションプログラムにプラグイン（接続）します。

レンダリングオプションでは、PDF 変換プラグイン（PDFstaff または Microsoft Office を使用するレンディション変換プラグイン）を標準提供しています。

また、ユーザが作成・定義したレンディション変換プラグインを使用することもできます。さらに、レンディション変換に PDFstaff を使用する場合は、UOC を作成して、レンディション変換プラグインの機能の一部を変更することもできます。

以降、このマニュアルでは、標準提供される PDF 変換プラグインを標準提供プラグイン、ユーザが作成・定義したレンディション変換プラグインをユーザ定義プラグインと表記します。

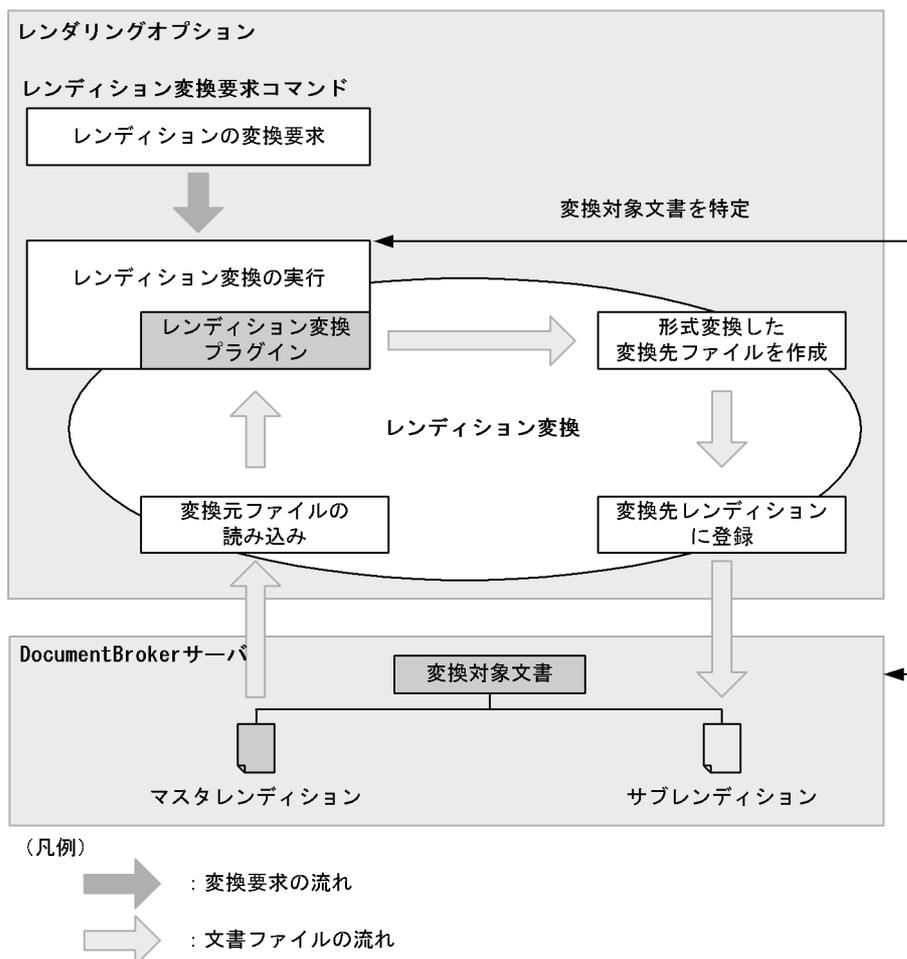
1.3 レンダリングオプションの処理概要

この節では、レンダリングオプションの処理の概要を説明します。

レンダリングオプションの処理は、レンディション変換要求コマンドの入力を契機として開始されます。レンディション変換要求コマンドが入力されると、レンダリングオプションは受け取ったレンディション変換要求の変換対象文書を DocumentBroker サーバで検索して特定します。その後、レンダリングオプションは、該当するレンディション変換プラグインを呼び出して変換処理を実行させ、変換処理で作成された文書ファイルを指定された変換先レンディションに登録します。

レンダリングオプションの処理概要を次の図に示します。

図 1-5 レンダリングオプションの処理概要



1.3.1 レンディションの変換要求

ここでは、レンディションの変換要求の処理について説明します。

レンディションの変換要求をする場合、レンディション変換要求コマンドを使用します。レンディション変換要求コマンドは、レンディション変換用 PC の Windows のコマンドプロンプトで入力します。レンディション変換要求コマンドを入力すると、レンダリングオプションにレンディション変換要求が引き渡されます。

レンディション変換要求コマンドでは、次の内容を必ず指定します。

変換先レンディションタイプ

変換先レンディションのレンディションタイプをレンディション変換要求コマンドの引数に指定します。

! 注意事項

なお、ここで指定するレンディションタイプの変換先レンディションが、対象文書にあらかじめ追加されている必要があります。新規にレンディション変換要求をする場合は、DocumentBroker クライアントで、指定するレンディションタイプの変換先レンディションを追加しておいてください。レンディションの追加については、「4.2.1 新規にレンディション変換をする場合」を参照してください。

変換対象の文書クラス

レンディション変換の対象にする文書クラスを記述した変換対象文書クラス一覧ファイルを作成し、レンディション変換要求コマンドの引数にファイルパスを指定します。

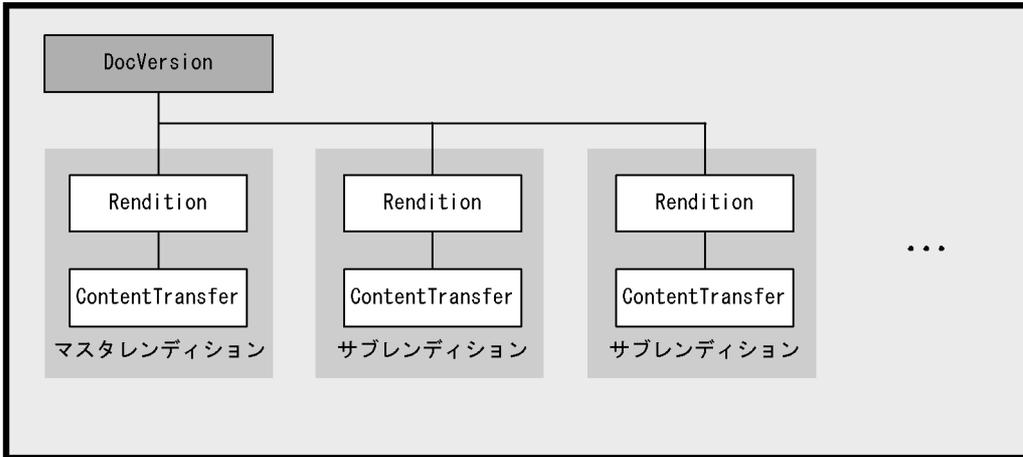
レンダリングオプションでレンディション変換の対象にできる文書クラスは、バージョンなし文書クラス (CdbDocument クラス) およびバージョン付き文書クラス (CdbVersionableDocument クラス) です。変換対象文書クラス一覧ファイルには、DMA クラスの文書クラス名 (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラスの名称) を指定します。したがって、バージョン付き文書クラスの場合は、DMA クラスの個々のバージョンの文書クラス名を指定します。

次の図に、バージョンなし文書およびバージョン付き文書と、変換対象文書クラス一覧ファイルに指定する DMA クラスのオブジェクトの関係を示します。

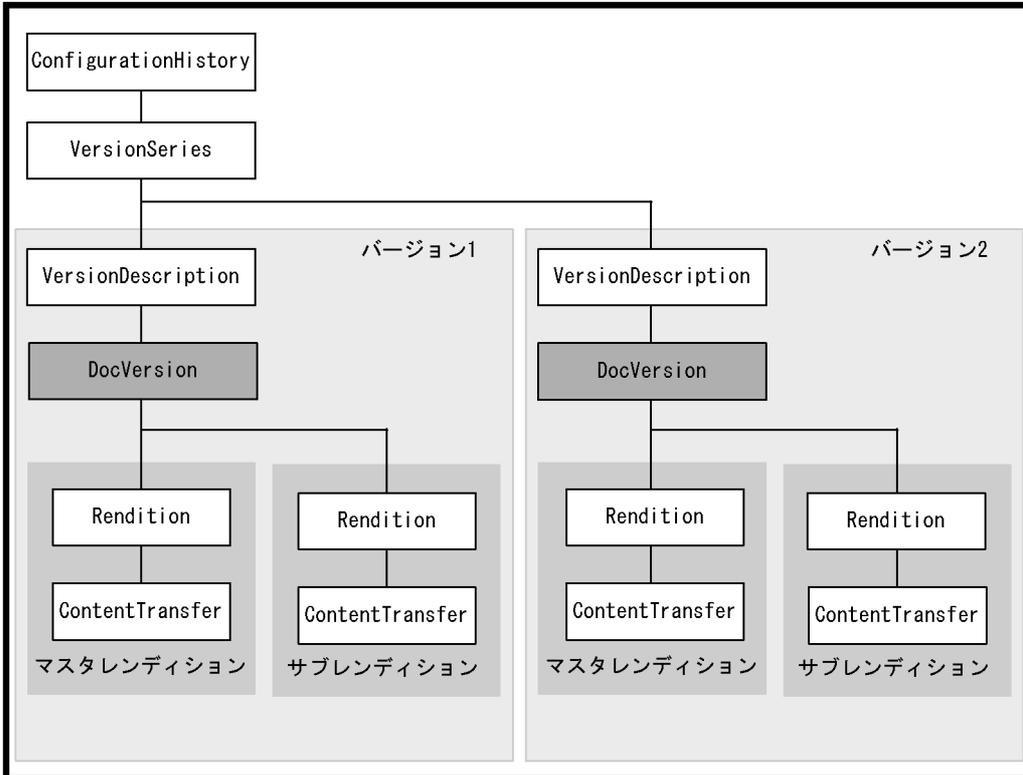
1. レンダリングオプションの概要

図 1-6 変換対象文書クラス一覧ファイルに指定する DMA クラスのオブジェクトの関係

バージョンなし文書 (CdbDocumentクラスのオブジェクト)



バージョン付き文書 (CdbVersionableDocumentクラスのオブジェクト)



(凡例)

- : 文書オブジェクト
- : 変換対象文書クラス一覧ファイルで指定するクラスのオブジェクト
- : DMAオブジェクト

レンダリングオプションは、指定された DMA クラスの文書クラスに対して検索処理を実行し、変換対象文書を特定します。

なお、バージョン付き文書の場合、チェックアウト中であっても変換対象と特定されればレンディション変換されます。

変換対象文書クラス一覧ファイルについては、「6.3 変換対象文書クラス一覧ファイル」を参照してください。変換対象文書が特定される条件については、「1.3.2 (2) 変換対象文書の特定」を参照し

てください。

さらに、変換元レンディションタイプを指定することもできます。

変換元レンディションタイプ

指定した変換対象文書クラスに登録されている文書のうち、特定のレンディションタイプのマスタレンディションを持つ文書だけに対象を絞り込みたい場合に指定します。対象にする変換元レンディションタイプを記述した変換元レンディションタイプ一覧ファイルを作成し、レンディション変換要求コマンドの引数にファイルパスを指定します。

変換元レンディションタイプ一覧ファイルについては、「6.2 変換元レンディションタイプ一覧ファイル」を参照してください。

このほかに指定できる内容については、「5.3 コマンドの文法」を参照してください。

1.3.2 レンディション変換の実行

ここでは、レンダリングオプションでの処理について説明します。まず、レンダリングオプションの一連の処理の流れを説明して、次にレンダリングオプションが変換対象文書を特定する条件について説明します。

(1) レンダリングオプションの処理の流れ

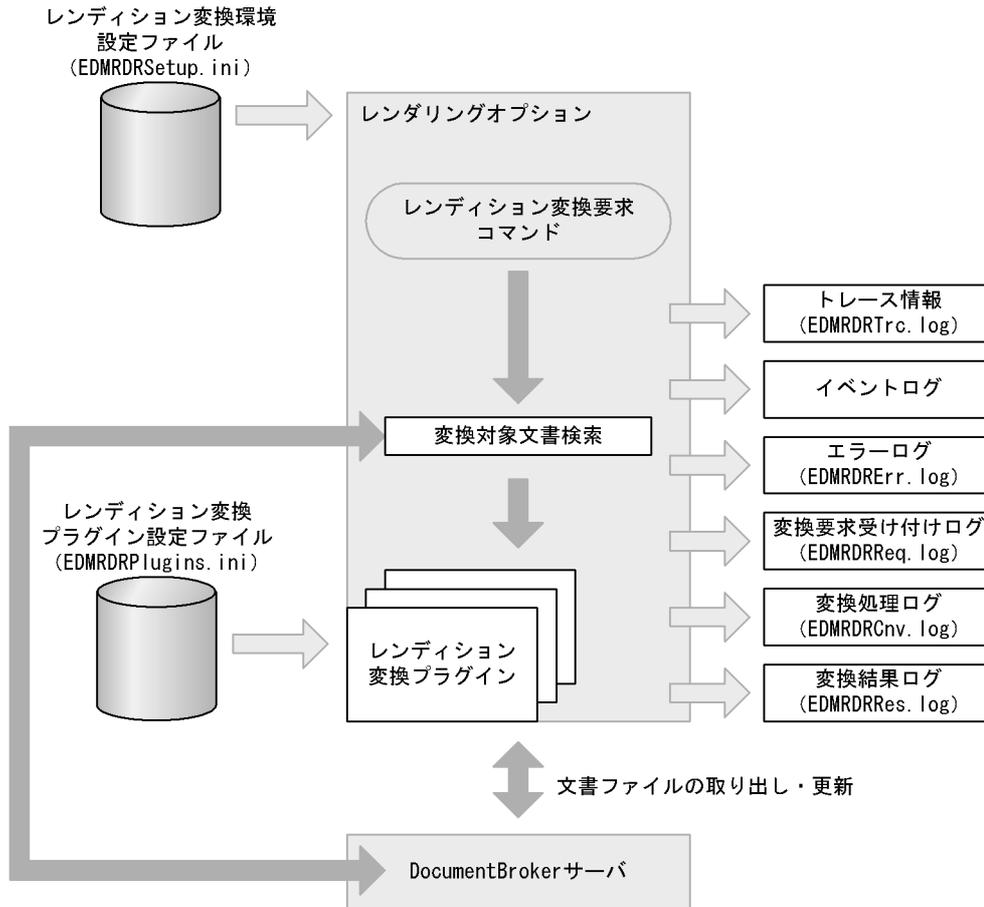
レンダリングオプションの処理の流れは、次のとおりです。

1. レンディション変換要求コマンドからレンディション変換要求を一つ受け付けます。
レンダリングオプションは、レンディション変換要求を一つ受け付けて処理を始めると、処理が完了するまで、次のレンディション変換要求の処理を行いません。
なお、該当するレンディション変換プラグインが存在しない場合は、受け付けを拒否します。
レンダリングオプションがレンディション変換要求を受け付けたかどうかは、変換要求受け付けログで確認できます。
2. 受け付けたレンディション変換要求に従い、変換対象文書を DocumentBroker サーバで検索して特定します。
この際、レンダリングオプションは、レンディション変換環境設定ファイルの定義に従って DocumentBroker サーバにアクセスします。
変換対象文書の特定については、「(2) 変換対象文書の特定」を参照してください。
3. 該当するレンディション変換プラグインを起動して、2. で特定した変換対象文書の変換処理を実行させます。
4. 変換処理で作成された変換先ファイルを、指定された変換先レンディションに登録します。
変換結果については、変換結果ログで確認できます。
5. レンディション変換処理がすべて完了したら、次のレンディション変換要求の処理を開始します。また、次のレンディション変換要求がないときは、レンダリングオプションを停止します。
なお、変換処理中にレンダリングオプションを停止した場合は、未変換の文書は次のレンディション変換要求で別途処理されます。

レンダリングオプションの処理の流れを次の図に示します。

1. レンダリングオプションの概要

図 1-7 レンダリングオプションの処理の流れ



(凡例)

-  : レンディション変換としての処理の流れ
-  : レンダリングオプションの処理の流れ

図中の各項目について説明します。

レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)

レンダリングオプションが稼働するための環境情報を定義する環境設定ファイルです。

レンディション変換プラグイン

文書ファイルの変換処理を行うアプリケーションプログラムへのプラグインです。変換先レンディションタイプに応じて複数存在します。レンディション変換プラグインの情報については、環境設定ファイルのレンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) に定義します。

トレース情報 (EDMRDRTrc.log)

レンダリングオプションの起動から終了までの履歴が記録されます。

イベントログ

Windows のイベントログです。レンダリングオプションで発生したエラーのうち、特に重要度の高いものが出力されます。

エラーログ (EDMRDRErr.log)

レンダリングオプションで発生したエラー情報が記録されます。

変換要求受け付けログ (EDMRDRReq.log)

レンディション変換要求コマンドからの変換要求の受け付け履歴が記録されます。

変換処理ログ (EDMRDRCnv.log)

変換対象の各文書に対するレンディション変換の結果が記録されます。

変換結果ログ (EDMRDRRes.log)

レンディション変換要求コマンド単位の実行結果が記録されます。

(2) 変換対象文書の特定

レンダリングオプションが変換対象文書を特定する条件について説明します。レンダリングオプションが変換対象文書を特定する条件は次のとおりです。

- レンディション変換要求コマンドで指定された「変換対象の文書クラス」に登録されている文書であること
- レンディション変換要求コマンドの「変換先レンディションタイプ」に指定されたレンディションタイプのサブレンディションを持つ文書であること
- レンディション変換要求コマンドで「変換元レンディションタイプ」が指定されている場合、マスタレンディションのレンディションタイプが、指定された変換元レンディションタイプと一致する文書であること
- 変換先レンディションの `dbrProp_RenditionStatus` プロパティが「変換要」を示す値を持つ文書であること

「変換要」を示す `dbrProp_RenditionStatus` プロパティの値について説明します。

「変換要」を示す `dbrProp_RenditionStatus` プロパティの値

「変換要」を示す `dbrProp_RenditionStatus` プロパティの値を次の表に示します。なお、`dbrProp_RenditionStatus` プロパティの上位 2 バイトを変換フラグ、下位 2 バイトを状態フラグといいます。以降、このマニュアルでは、`dbrProp_RenditionStatus` プロパティの変換フラグを単に変換フラグ、`dbrProp_RenditionStatus` プロパティの状態フラグを単に状態フラグと表記します。

表 1-3 「変換要」を示す `dbrProp_RenditionStatus` プロパティの値

値 (変換フラグ 状態フラグ)	意味
0x00010001 (CONVERT_REQUIRED NO_SUBREND) ¹	変換先レンディションの文書ファイルが登録されていないため、レンディション変換を実行して文書ファイルを作成・登録の必要があることを示します。 (変換要 サブ空) 変換フラグおよび状態フラグの値は、文書ファイルを登録しない空のレンディションを追加するときの、メソッドのパラメタ指定によって設定します。空のレンディションの追加方法については、「4.2.1 新規にレンディション変換をする場合」を参照してください。
0x00010004 (CONVERT_REQUIRED MASTERREND_UPDATE) ²	変換先レンディションの文書ファイルの登録後に、マスタレンディションの文書ファイルが更新されたため、レンディション変換を再実行して変換先レンディションの文書ファイルを更新する必要があることを示します。 (変換要 マスタ / サブ不一致) 状態フラグの値は、マスタレンディションの文書ファイルを更新したときに DocumentBroker によって設定されます。変換フラグの値は、ユーザが設定します。変換フラグの値の設定方法については、「4.2.2 マスタレンディションを更新して再びレンディション変換する場合」を参照してください。

1. レンダリングオプションの概要

注 1

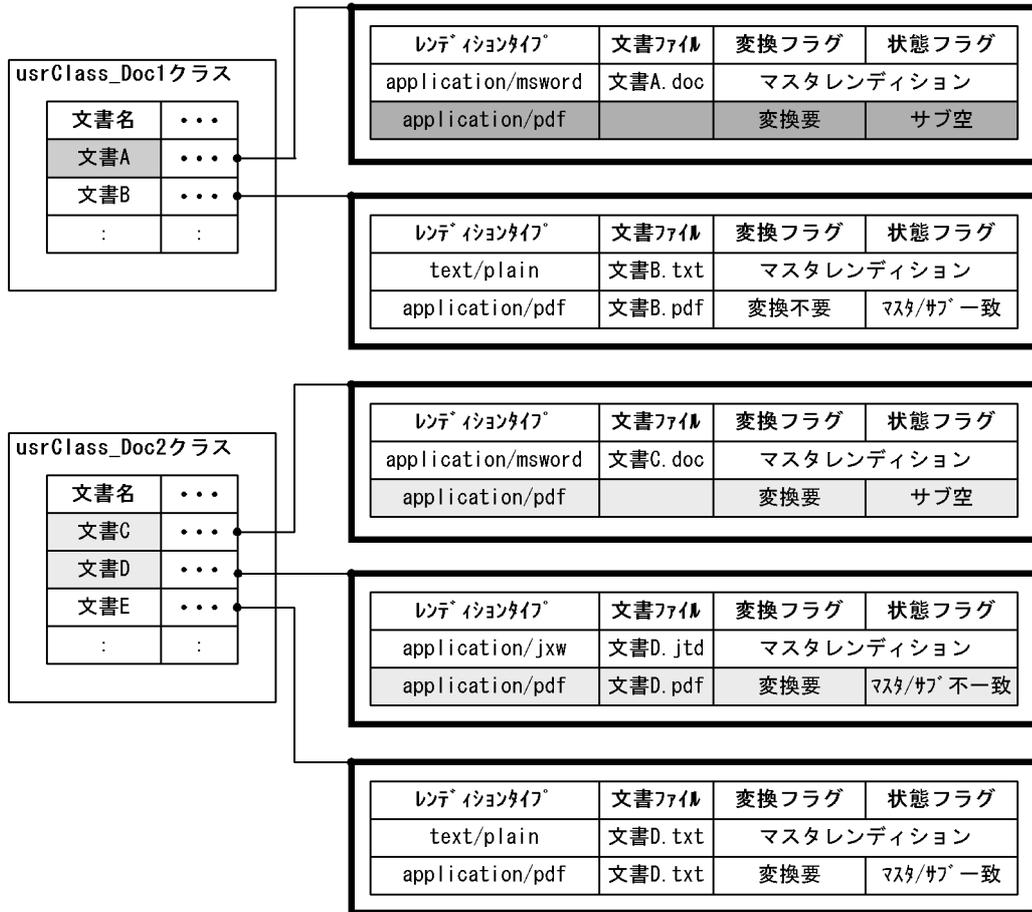
C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションの場合は
DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED|DBR_RENDSTATUS_NO_SUBREND , Java クラスライブラリ
で開発したクライアントアプリケーションの場合は
DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED|DbjDef.RENDSTATUS_NO_SUBREND です。

注 2

C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションの場合は
DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED|DBR_RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE , Java クラス
ライブラリで開発したクライアントアプリケーションの場合は
DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED|DbjDef.RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE です。

変換対象文書の特定の例を次の図に示します。

図 1-8 変換対象文書の特定の例



変換対象文書クラス :
usrClass_Doc1
変換先レンダリングタイプ :
application/pdf
変換元レンダリングタイプ :
application/msword



Aさん

文書AにPDF形式のレンダリングを追加したので、新規にレンダリング変換したい。

変換対象文書クラス :
usrClass_Doc2
変換先レンダリングタイプ :
application/pdf
変換元レンダリングタイプ :
指定なし



Bさん

usrClass_Doc2の文書クラスでPDF形式へのレンダリング変換を一括で実行したい。

(凡例)

- : 各文書のマスタレンディションとサブレンディション
- : Aさんの変換対象文書と変換先レンダリング
- : Bさんの変換対象文書と変換先レンダリング

変換フラグおよび状態フラグの詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」またはマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」を参照してください。

1.4 レンダリングオプションで使用できる文字コード種別

ここでは、レンダリングオプションで使用できる文字コード種別について説明します。

レンダリングオプションで使用する文字コード種別は、DocumentBroker サーバの文書空間で使用する文字コード種別に従います。そのため、レンダリングオプションで文字コード種別を設定する必要はありませんが、DocumentBroker サーバの設定を記述したクラス情報定義ファイルを、レンダリングオプションのインストールディレクトリの下位に任意のフォルダを作成して格納する必要があります。詳細については、「2.4 環境変数の設定」を参照してください。

DocumentBroker サーバの文書空間で使用できる文字コード種別は次のどちらかです。

- Shift-JIS
- UTF-8 (使用できる文字コードの範囲は UCS-2 または UCS-4 です)

DocumentBroker サーバの文書空間で使用する文字コード種別の設定および運用方法については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

(1) 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定した場合の注意事項

DocumentBroker サーバの文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定した場合の注意事項を次に示します。

- UOC を使用したレンディション変換はできません。
- レンディション変換するファイルのファイルパスに使用できる文字は、PDFstaff または Microsoft Office で使用できる文字の範囲に従います。
- レンダリングオプションが出力するログファイルの文字コード種別は、UTF-8 および Shift-JIS コード、または Shift-JIS コードだけのどちらかになります。そのため、レンダリングオプションが出力したログファイルを参照する場合は、Shift-JIS および UTF-8 の両方に対応したエディタを使用してください。ログファイルの参照方法については、「7.1 ログ情報の採取方法とその見方」を参照してください。

2

実行環境の設定

この章では、レンダリングオプションを使用するために必要な環境設定について説明します。

2.1 実行環境設定の流れ

2.2 インストールとアンインストール

2.3 レン디션変換用 PC の前提プログラムの設定

2.4 環境変数の設定

2.5 ユーザ情報の作成

2.6 ユーザ定義プラグインの作成

2.7 UOC の作成

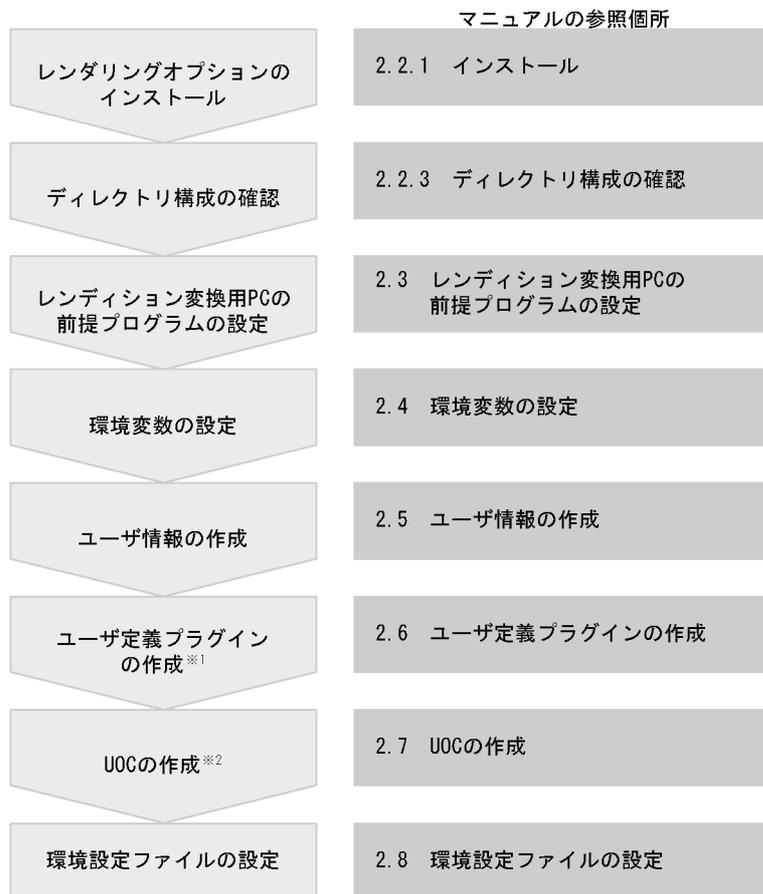
2.8 環境設定ファイルの設定

2.1 実行環境設定の流れ

この節では、レンダリングオプションの実行環境設定の流れについて説明します。

レンダリングオプションの実行環境設定の流れを、次の図に示します。

図 2-1 実行環境設定の流れ



注※1 PDF変換プラグイン（標準の変換元レンディションタイプからのPDF形式への変換が可能）を利用する場合、この手順は不要です。

注※2 レンディション変換プラグインの機能を変更しないで変換する場合、この手順は不要です。

2.2 インストールとアンインストール

この節では、レンダリングオプションのインストール、リモートインストールの場合のインストール先およびアンインストールについて説明します。

2.2.1 インストール

ここでは、レンダリングオプションのインストール方法について説明します。

インストールの操作手順は、次のとおりです。

<操作>

1. Windows を起動し、システム管理者のユーザアカウントでログインします。
2. CD-ROM を任意のドライブにセットし、ナビゲーションプログラムの指示に従って起動します。
インストール説明のダイアログが表示されます。
3. 「次へ」ボタンをクリックします。
ユーザ情報として「名前」と「会社名」を入力するダイアログが表示されます。
上書きインストールの場合には、上書き確認のダイアログが表示され「はい」ボタンをクリックすると「8. プログラムフォルダを指定します。」から実行します。
4. 「名前」および「会社名」を入力します。
5. 「次へ」ボタンをクリックします。
インストール先を指定するダイアログが表示されます。
6. インストール先のディレクトリを指定します。
指定したディレクトリの下にインストールされます。デフォルトのインストール先は、
C:\Program Files\Hitachi\DocBroker\RenderingOption です。なお、C: は OS がインストールされているドライブ名です。
文字コード種別が UTF-8 の場合、インストール先には、ディレクトリのパスが印刷可能な ASCII コードだけで構成されるディレクトリを指定してください。
7. 「次へ」ボタンをクリックします。
プログラムフォルダを指定するダイアログが表示されます。
8. プログラムフォルダを指定します。
指定したプログラムフォルダにプログラムアイコンが追加されます。デフォルトのプログラムフォルダは、DocumentBroker Rendering Option です。
9. 「次へ」ボタンをクリックします。
現在の設定（ユーザの情報、インストール先のディレクトリ、プログラムフォルダ）確認のダイアログが表示されます。
10. 設定を確認して「次へ」ボタンをクリックします。
ファイルのコピーが開始されます。
ファイルのコピーが終了すると、インストールが終了したことを通知するダイアログが表示されます。
11. 「OK」ボタンをクリックします。
インストールプログラムが終了します。

注意事項

DocumentBroker Rendering Option は、次の製品と同じマシン上にインストールできません。

- ラビニティ ECM Render

すでに該当する製品がインストールされている場合、次のどれかの方法でインストールしてください。

- 該当する製品をアンインストールしてからインストールする
- 別のマシンにインストールする

2.2.2 リモートインストールの場合のインストール先

ここでは、レンダリングオプションをリモートインストールした場合、どのディレクトリにインストールされるのかについて説明します。

更新インストールの場合と新規インストールの場合とでインストール先が異なります。

(1) 更新インストールの場合

インストール済みのレンダリングオプションと同じディレクトリにインストールされます。

(2) 新規インストールの場合

インストール先の指定方法によって、インストール先が異なります。

ドライブおよびパスともにデフォルト値を使用したとき

C:\Program Files\Hitachi\DocBroker\RenderingOption ディレクトリが作成されて、レンダリングオプションがインストールされます。なお、C: は OS がインストールされているドライブ名です。

ドライブだけ指定したとき

<指定したドライブ名> \Program Files\Hitachi\DocBroker\RenderingOption ディレクトリが作成されて、レンダリングオプションがインストールされます。

パスだけ指定したとき

指定したパスにレンダリングオプションがインストールされます。なお、インストール先には、パスが印刷可能な ASCII コードだけで構成されるディレクトリを指定してください。

2.2.3 ディレクトリ構成の確認

ここでは、インストール後のディレクトリ構成の確認について説明します。

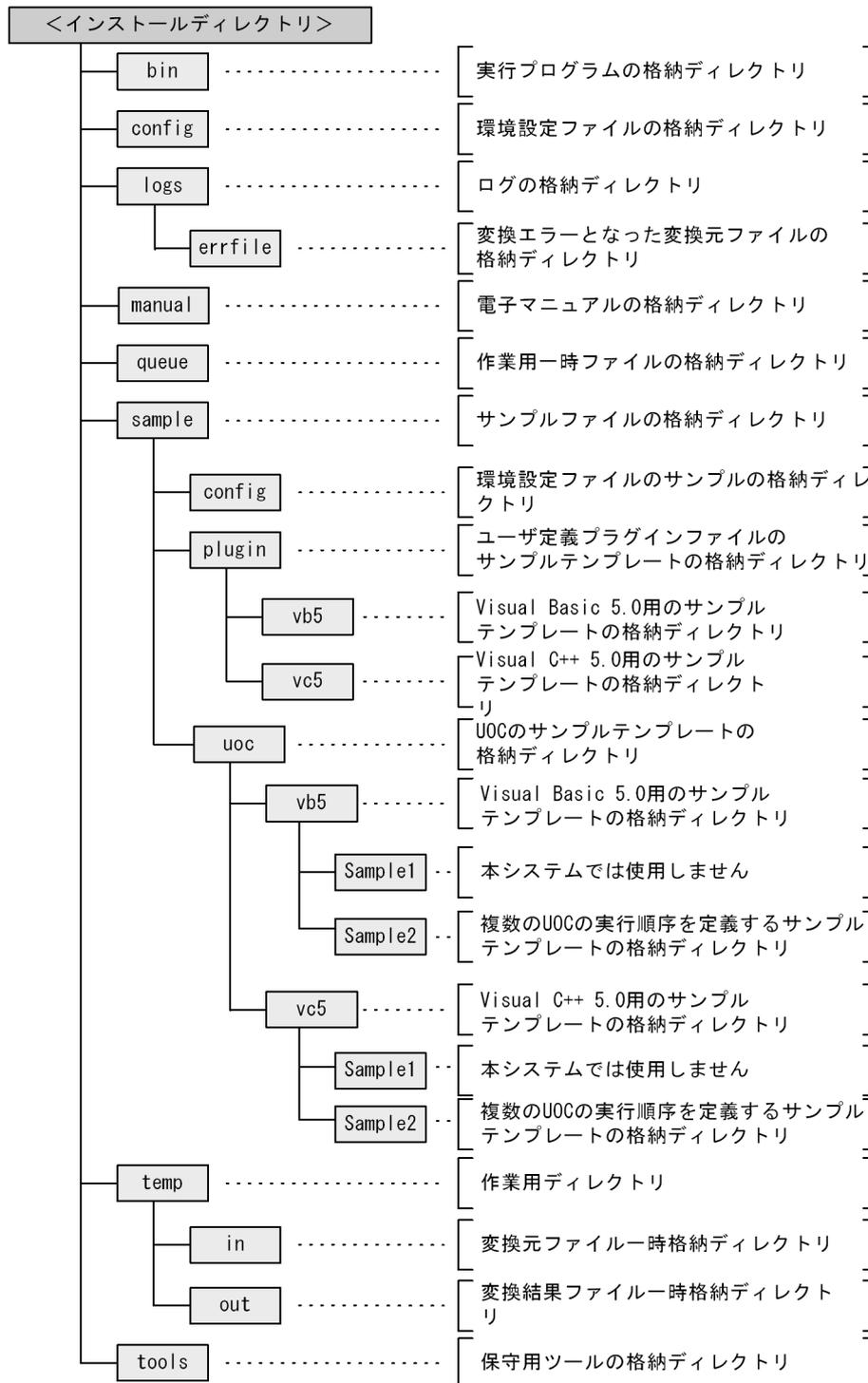
レンダリングオプションのインストールが終了したら、ディレクトリおよびファイルが正しく作成されているか確認してください。レンダリングオプションのインストールディレクトリ以下のディレクトリ構成を次の図に示します。なお、デフォルトのインストールディレクトリは、次のとおりです。

<インストールディレクトリ>

C:\Program Files\Hitachi\DocBroker\RenderingOption

なお、C: は OS がインストールされているドライブ名です。

図 2-2 レンダリングオプションのディレクトリ構成



ここでは、インストール時の各ディレクトリの構成要素のうち、PDFstaffまたはMicrosoft Officeと連携する場合にレンダリングオプションの導入時および運用時に必要になる要素について説明します。

<インストールディレクトリ>直下のファイル

readme.txt

レンダリングオプションのReadmeファイルです。

2. 実行環境の設定

<インストールディレクトリ> ¥bin¥ 直下のファイル

このディレクトリには、各種実行ファイルおよび DLL ファイルが格納されます。

EDMRDRREQ.EXE

レンディション変換要求コマンドの実行ファイルです。

EDMRDRSTOP.EXE

レンディション変換強制停止コマンドの実行ファイルです。

EDMRDRPFGPDF.DLL

PDFstaff を使用する場合の PDF 変換プラグインの DLL ファイルです。

EDMRDRPLWD12.DLL

Microsoft Office を使用する場合で、変換元レンディションタイプが Word のときの PDF 変換プラグインの DLL ファイルです。

EDMRDRPLXL12.DLL

Microsoft Office を使用する場合で、変換元レンディションタイプが Excel のときの PDF 変換プラグインの DLL ファイルです。

EDMRDRPLPP12.DLL

Microsoft Office を使用する場合で、変換元レンディションタイプが PowerPoint のときの PDF 変換プラグインの DLL ファイルです。

EDMRDRPCTUSR.DLL

ユーザ定義プラグインを制御する DLL ファイルです。

<インストールディレクトリ> ¥config¥ 直下のファイル

このディレクトリには、環境設定ファイルが格納されます。

EDMRDRSetup.ini

レンディション変換環境設定ファイルです。

EDMRDRPlugins.ini

レンディション変換プラグイン設定ファイルです。デフォルトでは、PDFstaff を使用する場合の内容が格納されています。Microsoft Office を使用する場合、<インストールディレクトリ> ¥sample¥config¥ に格納されている Microsoft Office を使用する場合のレンディション変換プラグイン設定ファイルのサンプルをコピーして使用してください。

<インストールディレクトリ> ¥logs¥

このディレクトリは、インストール時には空の状態です。レンダリングオプションの処理が実行されると、このディレクトリにログファイルやトレースファイルが作成されます。

<インストールディレクトリ> ¥logs¥errfile¥

このディレクトリは、インストール時には空の状態です。レンディション変換で変換エラーが発生した場合に、変換エラーとなった変換元ファイルがこのディレクトリに格納されます。

<インストールディレクトリ> ¥manual¥ の構成要素

このディレクトリには、次のディレクトリが作成されて、レンダリングオプションの電子マニュアルが格納されます。なお、作成されるディレクトリの <VRRR> の部分は、レンダリングオプションのバージョン番号になります。例えば、バージョン番号が 03-00 の場合は、"0300" になります。

<VRRR>¥htmlhelp¥

次のファイルが格納されています。

- dbrs.chm

HTML ヘルプ形式の電子マニュアルです。

- hhupd.exe
HTML ヘルプのランタイムコンポーネントです。

<VRR>¥htmlmanual¥dbrs¥

次のファイルおよびディレクトリが格納されています。

- *.htm
HTML 形式の電子マニュアルです。index.htm から参照します。
- figure
HTML 形式の電子マニュアルの画像ファイルが格納されているディレクトリです。

<インストールディレクトリ> ¥queue¥

このディレクトリには、レンダリングオプションを起動したときに作業用ファイルが一時的に格納されます。

<インストールディレクトリ> ¥sample¥plugin¥vb5¥ 直下のファイル

このディレクトリには、Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 でユーザ定義プラグインを作成するためのプロジェクトファイルおよびソースファイルのサンプルが格納されます。

UserPlugin.vbp

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるプロジェクトファイルのサンプルです。

UserPlugin.bas

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるソースファイルのサンプルです。

<インストールディレクトリ> ¥sample¥plugin¥vc5¥ 直下のファイル

このディレクトリには、Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 でユーザ定義プラグインを作成するためのプロジェクトファイル、ソースファイルのサンプルなどが格納されます。

UserPlugin.dsw

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるプロジェクトワークスペースファイルです。

UserPlugin.dsp

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるプロジェクトファイルのサンプルです。

UserPlugin.c

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるソースファイルのサンプルです。

UserPlugin.h

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 でユーザ定義プラグインを作成する場合に使用できるヘッダファイルです。

<インストールディレクトリ> ¥sample¥uoc¥vb5¥Sample2¥ 直下のファイル

このディレクトリには、Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 で複数の UOC を実行するためのプロジェクトファイル、ソースファイルのサンプルなどが格納されます。

Sample2.vbp

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるプロジェクトファイルのサンプルです。

Sample2.bas

2. 実行環境の設定

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるソースファイルのサンプルです。

Uoc.ini

複数の UOC の実行順序を定義するファイルのサンプルです。

< インストールディレクトリ > %sample%uc5%Sample2% 直下のファイル

このディレクトリには、Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 で複数の UOC を実行するためのプロジェクトファイル、ソースファイルのサンプルなどが格納されます。

Sample2.dsw

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるプロジェクトワークスペースファイルです。

Sample2.dsp

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるプロジェクトファイルのサンプルです。

Sample2.c

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるソースファイルのサンプルです。

Sample2.h

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0 で UOC を作成する場合に使用できるヘッダファイルです。

Uoc.ini

複数の UOC の実行順序を定義するファイルのサンプルです。

< インストールディレクトリ > %sample%config% 直下のファイル

このディレクトリには、レンディション変換プラグイン設定ファイルのサンプルが格納されます。

EDMRDRPlugins.ini.pdfs

PDFstaff を使用する場合のレンディション変換プラグイン設定ファイルのサンプルです。

EDMRDRPlugins.ini.msof

Microsoft Office を使用する場合のレンディション変換プラグイン設定ファイルのサンプルです。

< インストールディレクトリ > %temp%

このディレクトリには、レンディション変換実行中に作業ファイルが一時的に格納されます。

< インストールディレクトリ > %temp%in%

このディレクトリは、インストール時には空の状態です。このディレクトリには、レンディション変換実行中に変換元ファイルが一時的に格納されます。

< インストールディレクトリ > %temp%out%

このディレクトリは、インストール時には空の状態です。このディレクトリには、レンディション変換実行後に変換結果ファイルが一時的に格納されます。

< インストールディレクトリ > %tools%

このディレクトリには、保守用ツールが格納されています。

2.2.4 アンインストール

ここでは、レンダリングオプションのアンインストール方法について説明します。

レンダリングオプションのアンインストールは、「スタート」 - 「プログラム」 - 「DocumentBroker

Rendering Option」メニューに登録されている「DocumentBroker Rendering Option のアンインストール」を使用します。アンインストールの操作手順を次に示します。

< 操作 >

1. システム管理者のユーザアカウントでログインします。
2. レンダリングオプションが処理中の場合、レンダリングオプションを停止します。
3. 「スタート」メニューから「プログラム」 - 「DocumentBroker Rendering Option」 - 「DocumentBroker Rendering Option のアンインストール」を選択します。

なお、アンインストールの操作では、< インストールディレクトリ > %config% 下のファイルおよびインストール後に作成されたファイル（< インストールディレクトリ > %logs% 下のログファイル、< インストールディレクトリ > %queue% 下の作業用ファイルなど）は削除されません。削除されないファイルを含むディレクトリも削除されません。不要なファイルやディレクトリは個別に削除してください。

2.3 レンディション変換用 PC の前提プログラムの設定

この節では、レンダリングオプションをインストールするレンディション変換用 PC の前提プログラムの設定について説明します。

レンダリングオプションを使用する前に、レンディション変換用 PC の前提プログラムを設定する必要があります。レンディション変換用 PC の前提プログラムのインストールや環境設定の詳細については、各プログラムのマニュアルを参照してください。この節では、レンディション変換用 PC の前提プログラムの設定のうち、レンダリングオプションに関連する設定について説明します。

(1) DocumentBroker クライアントの設定

レンダリングオプションをインストールした PC に DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime をインストールし、ファイル転送機能を静的モードで設定します。ファイル転送機能の設定およびファイル転送サービスの開始方法については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

(2) PDFstaff の設定

レンディション変換に、PDFstaff を使用する場合、レンダリングオプションをインストールした PC に PDFstaff Runtime または PDFstaff SDK をインストールします。

また、Adobe LiveCycle PDF Generator、PDF 変換に使用するプリンタドライバ、およびアプリケーションも設定しておく必要があります。設定方法の詳細については、PDFstaff のマニュアルを参照してください。

(3) Microsoft Office の設定

レンディション変換に Microsoft Office を使用する場合、レンダリングオプションをインストールした PC に Microsoft Office をインストールします。Microsoft Office のインストール時には、標準でインストールされる機能を「インストールしない」または「初めて実行するときにインストール」に変更しないでください。

なお、The 2007 Microsoft(R) Office system の場合、PDF ファイルの発行を実行するには、Microsoft PDF 保存アドインのインストールが必要な場合があります。次の URL からダウンロードしてインストールしてください。

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyId=4D951911-3E7E-4AE6-B059-A2E79ED87041&displayLang=ja>

URL は 2012 年 12 月現在のものです。

インストール完了後に、変換元ファイルを扱う Office のアプリケーションを起動し、手作業で PDF ファイルの発行を実行して、問題なく動作することを確認してください。

2.4 環境変数の設定

この節では、レンディション変換用 PC の環境変数の設定について説明します。

レンダリングオプションを使用するには、次に示す環境変数を設定する必要があります。

- EDMCLASSDEFPATH
- EDMRCDOCSPACE
- TEMP
- TMP

これらの環境変数は、次のどちらかの方法で設定します。

- Windows のコマンドプロンプトから SET コマンドを使用して設定する
- Windows のコントロールパネルから「システムのプロパティ」を開き、詳細タブの「環境変数」で設定する

ここでは、コントロールパネルから設定する方法について説明します。

環境変数 EDMCLASSDEFPATH の設定

設定手順を次に示します。

< 操作 >

1. インストールディレクトリの下位に任意のディレクトリを作成してクラス定義情報ファイル（文書空間識別子 .ini）を格納します。
例えば、「info」というディレクトリを作成した場合、格納先は<インストールディレクトリ> \info\となります。
2. 「コントロールパネル」 - 「システムのプロパティ」の詳細タブの「環境変数」で、環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に、クラス定義情報ファイルの格納先を設定します。

設定方法を次に示します。

変数：EDMCLASSDEFPATH

値：<インストールディレクトリ> \任意のディレクトリ

値には必ずフルパスを指定し、任意のディレクトリの後に「\」は記述しないでください。

例えば、クラス情報定義ファイルを<インストールディレクトリ> \info\に格納した場合、指定する値は<インストールディレクトリ> \info\となります。

また、文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定している場合は、環境変数

EDMCLASSDEFPATH に指定するパスの文字列が、印刷可能な ASCII コードだけで構成されている必要があります。

注

クラス定義情報ファイルは、DocumentBroker サーバに定義されている DMA オブジェクトのクラス、そのサブクラスのクラス、およびプロパティから、GUID、データ型などの情報を記述したファイルです。DocumentBroker サーバのクラス定義情報ファイル作成コマンド

(EDMCrtSimMeta) で作成します。情報の内容に変更があった場合は、クラス定義情報ファイルを作成し直し、再度格納してください。クラス定義情報ファイルの作成方法については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

環境変数 EDMRCDOCSPACE の設定

設定手順を次に示します。

< 操作 >

1. 「コントロールパネル」 - 「システムのプロパティ」の詳細タブの「環境変数」で、環境変数

2. 実行環境の設定

「EDMRCDOCSPACE」に、DocumentBroker サーバの文書空間識別子を指定します。

環境変数 TEMP および TMP の設定

環境変数 TEMP および TMP が設定されているかどうかを次に示す手順で確認してください。

<操作>

1. 「コントロールパネル」 - 「システムのプロパティ」の詳細タブの「環境変数」で、環境変数「TEMP」および「TMP」の設定値を確認します。

Windows のインストール時に設定された値を特に変更する必要はありません。環境変数 TEMP および TMP に値が設定されていない場合は、値を設定してください。

また、文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定している場合は、環境変数 TEMP および TMP に指定するパスの文字列が、印刷可能な ASCII コードだけで構成されている必要があります。環境変数 TEMP および TMP の設定値を確認し、必要に応じて設定値を変更してください。

2.5 ユーザ情報の作成

この節では、ユーザ情報の作成について説明します。

レンダリングオプションが DocumentBroker サーバを利用するためには、DocumentBroker サーバにログインするときのユーザ情報を作成しておく必要があります。なお、変換対象文書には、レンダリングオプションが使用するユーザ ID に対する参照権およびプロパティ更新権を設定することが必要です。

ユーザ情報の作成方法の詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

2.6 ユーザ定義プラグインの作成

この節では、ユーザ定義プラグインの作成について概要を説明します。

レンダリングオプションが標準提供している PDF 変換プラグインで、標準のレンディション変換をする場合、ユーザ定義プラグインの作成は不要です。次のような場合に、ユーザ定義プラグインを作成してください。

- 標準の変換元レンディションタイプから PDF 形式以外のレンディションタイプに変換したい場合
例えば、Excel 形式から CSV 形式に変換する場合など
- 標準の変換元レンディションタイプ以外のレンディションタイプから PDF 形式に変換したい場合
例えば、wmf (Windows メタファイル) 形式から PDF 形式に変換する場合など
- 標準の変換元レンディションタイプ以外の形式から PDF 形式以外のレンディションタイプに変換したい場合
例えば、XML 形式から HTML 形式に変換する場合など

ユーザ定義プラグインは、Win32 実行形式ファイル (*.exe) として作成します。

次のディレクトリに、Visual Basic 5.0 および Visual C++ 5.0 で作成したユーザ定義プラグインのサンプルプログラム（変換処理部分を除く基本的な処理を記述したソースファイル、コンパイルに必要なプロジェクトファイルなど）が格納されています。

Visual Basic 5.0 用

<インストールディレクトリ> \sample\plugin\vb5\

Visual C++ 5.0 用

<インストールディレクトリ> \sample\plugin\vc5\

変換処理部分については、変換元ファイルと変換先ファイルを扱うアプリケーションプログラムに依存するため記述されていません。Visual Basic 5.0 または Visual C++ 5.0 を使用して変換処理部分を記述してコンパイルし、実行ファイルを作成してください。

このプログラムは、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でも使用できます。Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 を使用する場合は、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でプロジェクトファイルを開き、コンパイルしてください。

ユーザ定義プラグインの作成方法の詳細については、「付録 D ユーザ定義プラグインの設計と作成方法」を参照してください。

2.7 UOC の作成

UOC を利用することによって、レンディション変換プラグインの機能の一部を変更することができます。なお、UOC はレンディション変換に PDFstaff を使用している場合にだけ利用できます。

この節では、PDFstaff に対応した UOC の作成について概要を説明します。

変換元ファイルをそのまま PDF 形式に変換する場合、UOC の作成は不要です。変換元ファイルに表紙や注釈、プロパティ情報などの追加をおこなう場合に UOC を作成してください。

なお、文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、UOC を使用したレンディション変換はできません。

UOC での変換に使用する変換元ファイルは一時ファイルであるため、プロパティ情報などを追加しても、DocumentBroker サーバに登録されている文書ファイルには影響ありません。

UOC は、Win32 実行形式ファイル (*.exe) として作成します。

なお、次のディレクトリに、Visual Basic 5.0 および Visual C++ 5.0 で作成した UOC のサンプルプログラム（基本的な処理を記述したソースファイル、コンパイルに必要なプロジェクトファイルなど）が格納されています。このサンプルプログラムを使用することで、複数の UOC を連続して呼び出し、変換元ファイルを変換することができます。サンプルプログラムは、Visual Basic 5.0 または Visual C++ 5.0 を使用して適宜処理を記述してコンパイルし、実行ファイルを作成してください。

このプログラムは、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でも使用できます。Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 を使用する場合は、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でプロジェクトファイルを開き、コンパイルしてください。

Visual Basic 5.0 用

<インストールディレクトリ> %sample%\uoc%\vb5%\Sample2\

Visual C++ 5.0 用

<インストールディレクトリ> %sample%\uoc%\vc5%\Sample2\

UOC の作成方法の詳細については、「付録 E UOC の設計と作成方法」を参照してください。

2.8 環境設定ファイルの設定

この節では、レンダリングオプションの環境設定ファイルの設定について説明します。

レンダリングオプションの環境設定ファイルには、次に示す二つのファイルがあります。

レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)

レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini)

これらのファイルを運用に応じて編集する必要があります。なお、新規インストール時のレンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) は、PDFStaff を使用する場合の内容で提供されます。Microsoft Office を使用する場合、<インストールディレクトリ> ¥sample¥config ディレクトリに格納されているレンディション変換プラグイン設定ファイルのサンプル (EDMRDRPlugins.ini.msosf) を必要に応じて編集して使用してください。

環境設定ファイルの詳細については、「6.1 環境設定ファイル」を参照してください。

3

運用例

この章では、レンダリングオプションの実行環境の設定からレンディション変換要求までの作業内容と手順を説明します。説明には、Word形式のマスタレンディション、PDF形式のサブレンディションを管理するバージョンなし文書で、レンディション変換を実行するという運用モデルを例に使用します。

本格的な運用に入る前に、レンダリングオプションの運用に必要な一連の作業の内容および手順の理解にお役立てください。

3.1 運用モデル

3.2 運用モデルでのレンダリングオプションの導入から使用開始まで

3.1 運用モデル

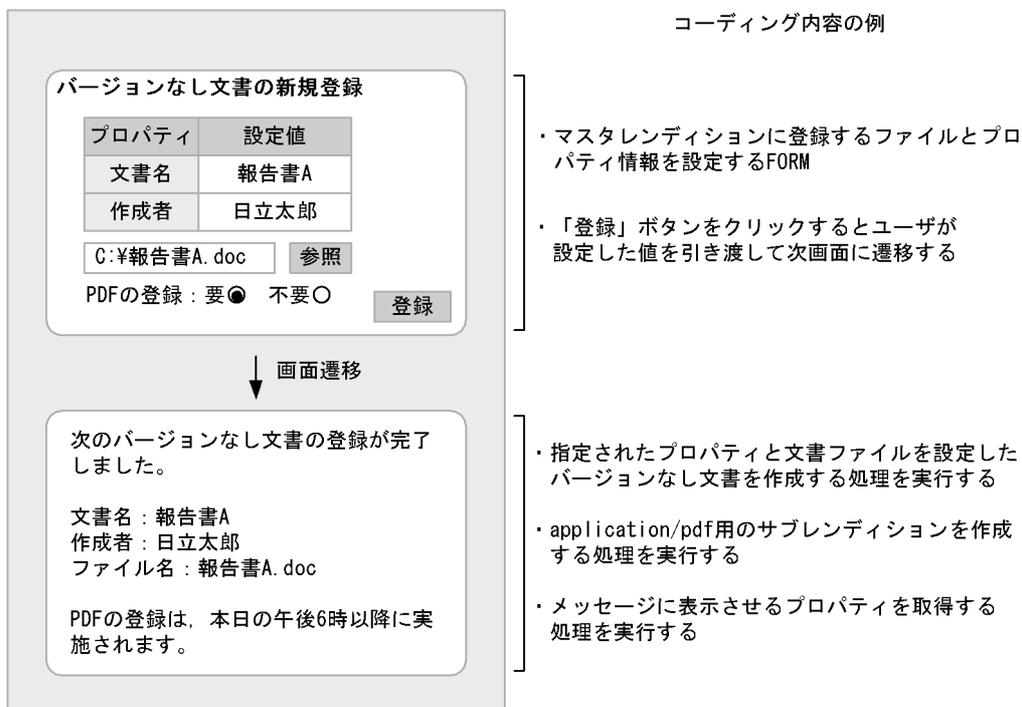
この節では、「3.2 運用モデルでのレンダリングオプションの導入から使用開始まで」の説明の前提となる運用モデル（以降、単に運用モデルと表記します）について説明します。

運用モデルでは、レンディション変換プラグインに PDFStaff を使用して、マスタレンディションのレンディションタイプが Word 形式（application/msword）、サブレンディションのレンディションタイプが PDF 形式（application/pdf）のバージョンなし文書を管理することを前提とします。運用モデルの詳細を次に示します。

DocumentBroker クライアント

DocumentBroker クライアントとして DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime の Java クラスライブラリで開発した GUI を利用していることを前提とします。Java クラスライブラリで開発した GUI の文書登録画面の例を次に示します。

図 3-1 文書登録画面の例



各レンディションに登録済みの文書ファイルを参照するためには、文書のレンディション一覧を取得する画面、指定したレンディションタイプの文書ファイルをダウンロードする画面なども必要です。Java クラスライブラリについては、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」およびマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java リファレンス」を参照してください。

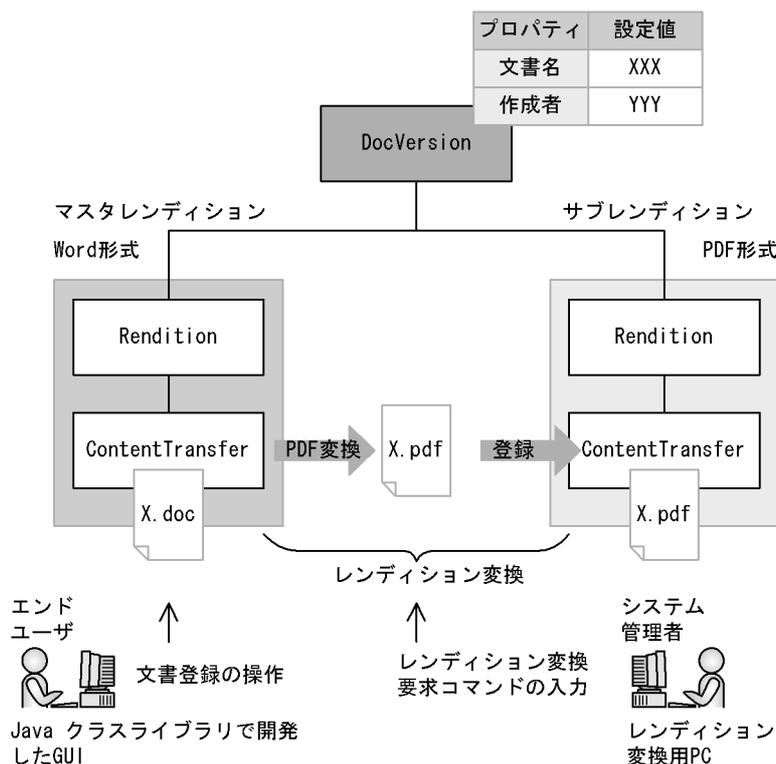
文書管理モデル

エンドユーザは、業務時間内に Word 形式で文書ファイルを作成し、Java クラスライブラリで開発した GUI から文書登録の操作をします。図 3-1 に示した文書登録画面を操作すると、バージョンなし文書の新規作成（文書のプロパティの設定および Word 形式の文書ファイルの登録）および PDF 形式のレンディションの追加（文書ファイルが未登録の PDF 形式のレンディションの追加）が完了します。

システム管理者は、業務時間終了時に、レンディション変換用 PC の Windows のコマンドプロンプトから、レンディション変換要求コマンド（EDMRDRReq コマンド）を入力してレンディション変換のバッチ処理を要求します。レンダリングオプションは、業務時間内に新規作成されたすべてのバージョンなし文書に対してレンディション変換を実行し、PDF 形式のサブレンディションに文書ファイルを登録します。

翌日にはエンドユーザが前日に登録した文書の PDF 形式の文書ファイルを参照できることとします。文書管理モデルの概念図を次に示します。

図 3-2 文書管理モデルの概念図



使用する文書クラス

バージョンなし文書（C++ クラスライブラリの CdbrDocument クラス）

使用する DMA クラスの文書クラス

dwcClass_VerDoc_dv クラス

このクラスは Java クラスライブラリの dmaClass_DocVersion クラスのサブクラスのサンプルクラスです。使用する DocumentBroker サーバでこのクラスが定義済みで、DocumentBroker サーバが使用できる状態に設定されていることを前提とします。

3.2 運用モデルでのレンダリングオプションの導入から使用開始まで

この節では、「3.1 運用モデル」で説明した運用モデルでのレンダリングオプションの実行環境の設定方法、レンディション変換の準備およびレンディション変換要求までの作業内容を順に説明します。

(1) レンダリングオプションをインストールします

Windows の PC を 1 台用意して、レンダリングオプションをインストールします。インストールの手順については、「2.2.1 インストール」を参照してください。

(2) レンディション変換用 PC に前提プログラムをインストールします

レンダリングオプションをインストールしたレンディション変換用 PC に、前提プログラムをインストールします。運用モデルのレンディション変換用 PC に必要なアプリケーションプログラムは、次のとおりです。

DocumentBroker Runtime

TPBroker

PDFstaff Runtime

Adobe LiveCycle PDF Generator

Office

PostScript プリンタドライバ

上記アプリケーションプログラムのインストールが完了したら、次の設定をしてください。

DocumentBroker Runtime (ファイル転送機能) の設定

運用モデルでは、DocumentBroker サーバとは別の Windows の PC をレンディション変換用 PC としたので、ファイル転送機能の設定をしておく必要があります。ファイル転送機能の設定時には静的モードを指定してください。ファイル転送機能の設定については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

PDFstaff Runtime, および Adobe LiveCycle PDF Generator の設定

PDFstaff Runtime, および Adobe LiveCycle PDF Generator の実行環境を設定してください。設定方法の詳細については、各製品のマニュアルを参照してください。

PDFstaff Runtime が PDF への変換時に使用する Office と PostScript プリンタドライバの設定については、PDFstaff Runtime のマニュアルを参照してください。

(3) 環境変数を設定します

レンディション変換用 PC で、環境変数 EDMCLASSDEFPATH および EDMRCDOSPACE を設定します。環境変数の設定については、「2.4 環境変数の設定」を参照してください。なお、運用モデルでは、環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定するクラス定義情報ファイルに dwcClass_VerDoc_dv クラスが定義されていることが前提です。

(4) DocumentBroker サーバでユーザ情報を作成します

DocumentBroker サーバで、レンダリングオプションが DocumentBroker サーバにアクセスするときのユーザ情報を作成します。なお、変換対象文書には、レンダリングオプションが使用するユーザ ID に対

する参照権およびプロパティ更新権を設定することが必要です。

詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

(5) レンダリングオプションの環境設定ファイルを作成します

次の環境設定ファイルを作成します。

(a) レン디션変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)

DocumentBroker にログインするためのユーザ ID とパスワードおよび DocumentBroker の文書空間識別子について、使用環境に合わせて設定します。

<インストールディレクトリ> ¥config¥ に格納されている EDMRDRSetup.ini をテキストエディタで開きます。次の内容が表示されます。

```
[docspace]
userid=
password=
docspaceid=
prop_consistent=
[render]
req_count_limit=100
doc_count_limit=10000
[network]
reconnect_interval=180000
reconnect_count=3
[log]
req_log_size=5
req_log_generation=1
conv_log_size=5
conv_log_generation=1
result_log_size=5
result_log_generation=1
errfile_backup_size=0
```

docspace セクションのエントリの値を利用環境に合わせて指定してください。

- userid= 「(4) DocumentBroker サーバでユーザ情報を作成します」で設定したユーザのユーザ ID
- password=userid エントリに指定したユーザ ID のパスワード
- docspaceid= 使用する文書空間の文書空間識別子 (36 バイト)

この運用モデルでは、docspace セクション以外を編集する必要はありません。

docspace セクションの設定が終わったら、ファイルを保存して閉じてください。

(b) レン디션変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini)

運用モデルに合わせて、Word 形式から PDF 形式へ変換するための記述に修正します。

<インストールディレクトリ> ¥config¥ に格納されている EDMRDRPlugins.ini をテキストエディタで開きます。次の内容が表示されます。

```
[plugin1]
plugin=<インストールディレクトリ>¥bin¥EDMRDRPFPGPDF.DLL
to=application/pdf
from1=application/msword
from2=application/vnd.ms-excel
from3=application/vnd.ms-powerpoint
```

3. 運用例

```
from4=application/vnd.visio
from5=application/rtf
from6=application/jxw
from7=text/plain
from8=image/tiff
from9=image/jpeg
from10=image/gif
from11=image/png
from12=application/postscript
from13=message/rfc822
from14=application/vnd.ms-word.document.macroEnabled.12
from15=application/vnd.openxmlformats-officedocument.wordprocessingml.document
from16=application/vnd.ms-excel.sheet.binary.macroEnabled.12
from17=application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12
from18=application/vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheet
from19=application/vnd.ms-powerpoint.presentation.macroEnabled.12
from20=application/
vnd.openxmlformats-officedocument.presentationml.presentation
opt_endpoint= http://servername:port/pdfg-ws/services/PdfGenInterface
opt_useproxy=false
opt_proxyservername=
opt_proxyserverport=
opt_proxyusrname=
opt_proxyusrpassword=
opt_maxpsfilesize=
opt_timeout=
opt_converttopsttime=
opt_pollinginterval=
opt_printer=Acrobat Distiller J
opt_joboptionsettingname=
opt_securitysettingname=
opt_filetypesettingname=
opt_bookmarkautocreate=false
opt_pptfittopage=true
opt_messagelocale=ja_JP
opt_pdfgenerator=7
opt_webserviceuser=
opt_webservicepass=
```

この運用モデルでは、Word 形式から PDF 形式への変換を利用します。したがって、PDF 変換に関する記述を修正します。

1. [plugin1] セクションの from1 エントリ (from1=application/msword) だけを残して、from2 エントリ ~ from20 エントリを削除します。
2. Adobe LiveCycle PDF Generator への以下の接続情報を設定します。
 - opt_endpoint= Adobe LiveCycle PDF Generator のエンドポイントの URL
 - opt_useproxy= プロキシ経由でアクセスする場合 true, プロキシを使用しない場合は false
 - opt_proxyservername= プロキシサーバ名 ¹
 - opt_proxyserverport= プロキシサーバのポート番号 ¹
 - opt_proxyusrname= プロキシの認証に必要なユーザ名 ¹
 - opt_proxyusrpassword= プロキシの認証に必要なユーザのパスワード ¹
 - opt_pdfgenerator= 使用する PDF Generator のバージョン
Adobe LiveCycle PDF Generator for PostScript 7.0, および 7.2 を使用する場合 7, Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 を使用する場合は ES
 - opt_webserviceuser=Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 サーバの Web サービスを利用する際の認証ユーザ名 ²
 - opt_webservicepass=Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 サーバの Web サービスを利用する際の認証パスワード ²

注 1 必要な場合だけ指定してください。

注 2 Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 を使用する場合で、Web サービスのセキュリティが有

効なときに設定してください。

- PDFstaff Runtime が PDF 変換に使用する PostScript プリントドライバの名称を `opt_printer` に設定します。

修正したファイルが次の内容であることを確認してください。ただし、プロキシについては、使用しない場合を示しています。

```
[plugin1]
plugin=<インストールディレクトリ>%bin%EDMRDRPFGPDF.DLL
to=application/pdf
from1=application/msword
opt_endpoint= < Adobe LiveCycle PDF GeneratorのエンドポイントのURL >
opt_useproxy=false
opt_proxyservername=
opt_proxyserverport=
opt_proxyusrname=
opt_proxyusrpassword=
opt_maxpsfilesize=
opt_timeout=
opt_converttopsttimeout=
opt_pollinginterval=
opt_printer=Acrobat Distiller J
opt_joboptionsettingname=
opt_securitysettingname=
opt_filetypesettingname=
opt_bookmarkautocreate=false
opt_pptfittopage=true
opt_messagelocale=ja_JP
```

修正が終わったら、ファイルを保存して閉じてください。

(6) レンディション変換の準備をします

作業手順を示します。

- Word で文書ファイルを幾つか作成します。
- Java クラスライブラリで開発した GUI で、作成した Word 形式の文書ファイルを指定してバージョンなし文書を新規に登録します。
この際、「3.1 運用モデル」で説明した文書登録画面を使用して、PDF 形式の空のレンディションの追加も完了したものとします。
なお、ここで、新規に登録するバージョンなし文書には、「(4) DocumentBroker サーバでユーザ情報を作成します」で設定したユーザに対する参照権およびプロパティ更新権を設定することが必要です。

(7) 変換対象文書クラス一覧ファイルを作成します

テキストエディタで次の内容を記述して任意の場所に任意の名称で保存してください。

```
dwcClass_VerDoc_dv
```

(8) ファイル転送サービスを開始します

運用モデルでは、DocumentBroker サーバとは別の Windows の PC をレンディション変換用 PC としたので、ファイル転送サービスを開始します。ファイル転送サービスを開始するためには、あらかじめファイル転送機能の設定をしておく必要があります。ファイル転送機能の設定時には静的モードを指定してください。ファイル転送機能の設定およびファイル転送サービスの開始方法については、マニュアル

3. 運用例

「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

(9) レンディション変換要求コマンドを入力します

レンディション変換用 PC の Windows のコマンドプロンプトで、次のようにレンディション変換要求コマンドを入力します。 は半角の空白です。

```
EDMRDRReq -r "application/pdf" -c "C:¥class.txt"
```

このコマンド入力例は、変換対象文書クラス一覧ファイルが C:¥class.txt の場合の例です。

(10) レンディション変換の実行結果を確認します

入力したレンディション変換要求コマンドによるレンディション変換要求がレンダリングオプションに受け付けられたかどうかは、変換要求受け付けログ (EDMRDRReq.log) で確認できます。また、レンディション変換の結果は、レンダリングオプションの変換結果ログ (EDMRDRRes.log) で確認できます。次に示す例のように変換結果ログで変換に失敗した文書数が 0 (全件の変換が正常) であることを確認してください。

< 変換結果ログ (EDMRDRRes.log) >

[2007/01/28 09:57:17.19 + 0900(190:189)] 4 CNVSTART MIME::application/pdf			
[2007/01/28 09:58:23.42 + 0900(135:176)] 4 CNVEND MIME::application/pdf	10	10	0

↑ 対象文書数

↓ 変換に成功した文書数

↓ 変換に失敗した文書数

変換要求受け付けログおよび変換結果ログが保存される先は、< インストールディレクトリ > ¥logs¥ です。

4

運用方法

この章では、レンダリングオプションの起動方法や停止方法、レンディション変換をするために必要な操作など、レンダリングオプションの運用方法について説明します。

4.1 起動方法と停止方法

4.2 DocumentBroker クライアントでのレンディション変換の準備

4.1 起動方法と停止方法

この節では、レンダリングオプションの起動方法および停止方法について説明します。

4.1.1 起動方法

レンダリングオプションは、レンディション変換要求コマンド (EDMRDRReq) を実行した際に起動します。レンディション変換要求コマンドの詳細については、「5. コマンドリファレンス」を参照してください。

4.1.2 停止方法

レンダリングオプションは、すべてのレンディション変換処理が終了した時点で停止します。処理中のレンダリングオプションを停止する場合は、レンディション変換強制停止コマンド (EDMRDRStop) を実行します。レンディション変換強制停止コマンドを実行すると、処理待ちとなっているレンディション変換要求もすべて取り消されます。レンディション変換強制停止コマンドの詳細については、「5. コマンドリファレンス」を参照してください。

4.2 DocumentBroker クライアントでのレンディション変換の準備

この節では、レンディション変換の前に必要な DocumentBroker クライアントでの操作内容について説明します。

レンディション変換は、DocumentBroker に登録されている文書のうち、dbrProp_RenditionStatus プロパティの変換フラグに「変換要」が設定されているサブレンディションを持つ文書に対して実行されます。このため、レンダリングオプションでレンディション変換を実行する前に、DocumentBroker クライアントで変換先レンディションの変換フラグに「変換要」を設定する必要があります。

注

C++ クラスライブラリと Java クラスライブラリでは、「変換要」を示す文字列定数が次のように異なります。

C++ クラスライブラリ

```
DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED
```

Java クラスライブラリ

```
DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED
```

変換先レンディションの変換フラグに「変換要」を設定する操作は、変換対象となる文書の状況に応じて次のように異なります。

- 新規にレンディション変換をする場合
- レンディション変換後、マスタレンディションを更新して再びレンディション変換する場合
- レンディション変換でエラーになった文書を再びレンディション変換する場合

各状況に応じた DocumentBroker クライアントでの操作内容について説明します。

4.2.1 新規にレンディション変換をする場合

ここでは、新規にレンディション変換をする場合の DocumentBroker クライアントでの操作内容について説明します。

新規にレンディション変換をする場合、DocumentBroker クライアントで、変換先レンディションタイプの空のレンディションを追加してください。このとき、追加するレンディションの変換フラグは「変換要」の状態になるように指定します。すでにサブレンディションが存在する場合でも、レンディションタイプが異なる別の空のレンディションを追加できます。

DocumentBroker の文書に対して、変換フラグが「変換要」の空のレンディションを追加する方法を次に示します。なお、オブジェクト操作ツールを利用してレンディションを追加することもできます。

(1) C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグが「変換要」の空のレンディションを追加する方法

CdbrDocument クラスまたは CdbrVersionableDocument クラスの AddRendition メソッドを利用します。その際、引数 IConvertType に DBR_CONVERT_TYPE_BATCH を指定してください。詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」を参照してください。

(2) Java クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグが「変換要」の空のレンディションを追加する方法

DbjObj クラスの addRendition メソッドを利用します。詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」およびマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java リファレンス」を参照してください。

(3) オブジェクト操作ツールで変換フラグが「変換要」の空のレンディションを追加する方法

文書のレンディションを操作する dbrnrdoc コマンドを利用します。

このコマンドの実行ファイル (dbrnrdoc.exe) は < DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のインストールディレクトリ > %tools% に格納されています。レンディション変換用 PC にオブジェクト操作ツールの実行環境を設定すると、Windows のコマンドプロンプトで dbrnrdoc コマンドを使用できるようになります。

OIID が dma:///07a17522...00000051 のバージョンなし文書に PDF 形式の空のレンディションを追加するコマンドの入力例を次に示します。 は半角の空白です。

```
dbrnrdoc -x ADD -M MIME::application/pdf -t BATCH dma:///07a17522...  
00000051
```

オブジェクト操作ツールの実行環境の設定および dbrnrdoc コマンドの使用方法の詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール」を参照してください。

4.2.2 マスタレンディションを更新して再びレンディション変換する場合

ここでは、レンディション変換済み文書のマスタレンディションを更新して、レンディション変換を再実行する場合の DocumentBroker クライアントでの操作内容について説明します。

レンディション変換済みの文書のサブレンディションの変換フラグには、レンダリングオプションによって「変換不要」が設定されます。一度「変換不要」が設定されると、ユーザが DocumentBroker クライアントで「変換要」を設定する操作をしないかぎり、変換フラグは「変換不要」のまま遷移しません。したがって、再度レンディション変換を実行させたい場合には、レンディション変換実行前に、DocumentBroker クライアントで、変換先レンディションの変換フラグに「変換要」を設定する操作が必要になります。

レンディション変換済みの文書のサブレンディションの変換フラグに「変換要」を設定する方法を次に示します。

！ 注意事項

サブレンディションの変換フラグに「変換要」を設定しても、サブレンディションの状態フラグが「サブ空」または「マスタ/サブ不一致」の状態でなければ、再変換の対象になりません。サブレンディションの状態フラグが「サブ空」または「マスタ/サブ不一致」以外の状態の場合は、マスタレンディションをいったん更新して、「マスタ/サブ不一致」状態に変更する操作が必要になります。

(1) C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグに「変換要」を設定する方法

CdbrDocument クラスまたは CdbrVersionableDocument クラスの PutRenditionPropertyValues メソッドを利用します。

使用例を次に示します。

```
pSession->Begin();
CdbrDocument Doc;
SDBR_PROP Props;
SDBR_PROPLIST Proplist;
DmaInteger32 lRenditionStatus;

//値としてDBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIREDを設定するための
//プロパティ構造体およびプロパティリスト構造体を作成します。
lRenditionStatus = DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED;
Props.PropId = dbrProp_RenditionStatus;
Props.lType = DMA_DATATYPE_INTEGER32;
Props.lCardinality = DMA_CARDINALITY_SINGLE;
Props.uniValue.plInteger32 = &lRenditionStatus;
Props.lCount = 1;
Proplist.lCount = 1;
Proplist.pItem = &Props;

//文書に接続します。
Doc.SetOIID(pOiid);
//サブレンディションの
//dbrProp_RenditionStatusプロパティに、
//DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIREDを設定します。
Doc.PutRenditionPropertyValues("MIME::application/pdf",&PropList);
pSession->Commit();
```

//の行はコメントです。

詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」およびマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ リファレンス 基本機能編」を参照してください。

(2) Java クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグに「変換要」を設定する方法

DbjObj クラスの writeRenditionProperties メソッドを利用します。

使用例を次に示します。

```

:
:
// ファクトリから空プロパティ値集合を取得
DbjPropSet propset = DbjFactory0200.getFactory().createPropSet();

// dbrProp_RenditionStatusプロパティにRENDSTATUS_CONVERT_REQUIREDを設定する
propset.setPropVal("dbrProp_RenditionStatus",
DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED);

// 文書に接続します。
// なお、docspaceはすでに文書空間に接続しているオブジェクト。
DbjObj obj = docspace.createObjConnection( oid )

// dbrProp_RenditionStatusプロパティを更新します。
obj.writeRenditionProperties( "MIME://application/pdf", propset );
:
:
```

//の行はコメントです。

詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」およびマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java リファレンス」を参照してください。

4.2.3 レン디션変換でエラーになった文書を再びレン디션変換する場合

ここでは、レン디션変換でエラーになった文書に対して再びレン디션変換する場合の対処方法について説明します。

エラーになった状況によって対処方法が異なります。エラーになった状況ごとの対処方法を次に示します。

(1) レン디션変換処理前にエラーになった場合

レン디션変換処理前にエラーになった場合、変換先レン디션の変換フラグは「変換要」のままです。したがって、エラー内容を確認し、エラー内容に対処した後、再度レン디션変換要求コマンドを入力してください。レン디션変換要求コマンドを再入力する前に、DocumentBroker クライアントで変換フラグを「変換要」に設定する操作は不要です。エラー内容の確認方法および対処方法については、「7. 障害対策」を参照してください。

(2) レン디션変換処理でエラーになった場合

レン디션変換処理中に、メッセージ KMBX12104-E または KMBX12106-E が出力されてエラーになった場合、エラーになった変換先レン디션の変換フラグは「変換要」から「変換エラー」に遷移して、変換対象から外されます。

この場合の対処手順を次に示します。

(a) C++ クラスライブラリまたは Java クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションでの対処手順

1. <インストールディレクトリ> \logs\errfile\ の下に保存されているエラーとなった変換元ファイルを手動で変換してみるなどして、エラーの原因を究明します。
2. エラーの要因に対処します。変換元ファイルの内容にエラーがある場合は、変換元ファイルのエラー要因を取り除いて、マスタレンディションを更新します。
3. 「4.2.2 マスタレンディションを更新して再びレン디션変換する場合」と同様の方法で、変換先レン디션の変換フラグに「変換要」を設定します。
4. 再度レン디션変換要求コマンドを入力します。

(b) オブジェクト操作ツールを利用した対処手順

オブジェクト操作ツールを利用した対処の流れを次に示します。

1. エラーとなった変換先レン디션の OIID の取得
2. エラーとなった変換先レン디션の削除
3. 変換先レン디션の追加

それぞれの対処手順を次に示します。

エラーとなった変換先レン디션の OIID の取得

1. 変換処理ログ (<インストールディレクトリ>\logs\EDMRDRConv.log) を Excel で開きます。
「テキストファイルウィザード -1/3」ダイアログが表示されます。
2. 「元のデータ形式」の「カンマやタブなどの区切り文字によってフィールドごとに区切られたデータ」にチェックマークを付けて、「次へ」ボタンをクリックします。
「テキストファイルウィザード -2/3」ダイアログが表示されます。

3. 「区切り文字」の「タブ」にチェックマークを付けて、「完了」ボタンをクリックします。
変換エラーとなった文書の3列目には「CNVERR」が表示されます。
4. 変換エラーとなった文書の4列目に表示されている値(OIID)を取得します。

エラーとなった変換先レンディションの削除

dbrnrdrdoc コマンドを実行して、変換先レンディションを削除します。

dbrnrdrdoc コマンドの入力例を次に示します。 は半角の空白です。

```
dbrnrdrdoc -x DELETE -M MIME::application/pdf 文書のOIID
```

なお、dbrnrdrdoc コマンドの詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール」を参照してください。

変換先レンディションの追加

dbrnrdrdoc コマンドを実行して、変換先レンディションを再作成します。これによって、変換フラグに「変換要」が設定されます。

dbrnrdrdoc コマンドの入力例を次に示します。 は半角の空白です。

```
dbrnrdrdoc -x ADD -M MIME::application/pdf -t BATCH 文書のOIID
```

なお、dbrnrdrdoc コマンドの詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール」を参照してください。

5

コマンドリファレンス

この章では、レンダリングオプションで使用するコマンドについて説明します。

5.1 実行コマンド一覧

5.2 コマンドの形式

5.3 コマンドの文法

5.1 実行コマンド一覧

レンダリングオプションが提供するコマンドを次の表に示します。

表 5-1 レンダリングオプションが提供するコマンドの一覧

コマンド名	説明
EDMRDRReq	レンディション変換を要求するコマンドです。
EDMRDRStop	レンディション変換処理を強制的に停止するコマンドです。

5.2 コマンドの形式

この節では、レンダリングオプションで使用するコマンドの形式について説明します。

(1) 入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名 [オプション...]

(a) コマンド名

コマンド名は、実行するコマンドのファイル名です。

(b) オプション

オプションの入力形式の規則を次に示します。なお、説明文で使用する「\$」はコマンドプロンプト、「cmd」はコマンド名を表します。

オプションの形式

オプションは半角のハイフン (-) で始まる文字列で、次に示すように、引数を持たないか、または1個の引数を持ちます。

形式 1 : - オプションフラグ

形式 2 : - オプションフラグ < 空白またはタブ > 引数

(凡例)

オプションフラグ : 1 文字の英数字で、大文字・小文字は区別されず

引数 : オプションフラグに対する引数です

オプションの指定規則

- オプションフラグと引数の間には空白またはタブが必要です。
誤った指定例 : \$ cmd -afile
正しい指定例 : \$ cmd -a file
- 引数を持たないオプションフラグは、一つのハイフン (-) のあとにまとめて指定できません。
誤った指定例 : \$ cmd -abc
正しい指定例 : \$ cmd -a -b -c
- 引数を持つオプションフラグの引数は省略できません。
- 同じオプションフラグを 2 回以上指定した場合、後に指定したオプションフラグが有効になります。
例えば、「\$ cmd -a 1 -a 2」と入力した場合は、「-a 2」が有効になります。
- ハイフン (-) だけのオプションは入力できません。例えば、「\$ cmd -」と入力すると「-」はコマンド引数とみなされます。

(2) 入出力

コマンドの入出力について説明します。

(a) 入力

すべてのオプションおよび引数が入力されます。

(b) 出力

コマンド処理が正常に終了したときの結果は、すべて戻り値として標準出力に出力されます。

(3) コマンドの実行ファイルに対するアクセス権

コマンドの実行ファイルにアクセスしてコマンドを実行できるユーザは、次に示すシステム管理者以上の権限を持つユーザだけです。

PowerUsers グループに所属するユーザ

Administrators グループに所属するユーザ

5.3 コマンドの文法

この節では、コマンドの文法について説明します。

EDMRDRReq (レン디션変換要求コマンド)

機能

文書のレン디션変換を要求するコマンドです。

形式

```
EDMRDRReq -r "変換先レン디션タイプ"
           [ -m "変換元レン디션タイプ一覧ファイル" ]
           [ -c "変換対象文書クラス一覧ファイル" ]
           [ -o "変換オプションファイル" ]
```

(凡例)

: 1 個以上の半角の空白またはタブ

オプション

-r "変換先レン디션タイプ"

変換先レン디션タイプを MIME 形式の先頭の "MIME::" を除く文字列で指定します。指定できる文字列の長さは 249 バイト以内です。249 バイトを超える値を指定した場合はエラーになります。

このオプションは省略できません。

このオプションで指定された変換先レン디션タイプは、そのまま変換対象レンディションを特定するための検索文字列として利用されます。dbrProp_RenditionType プロパティと比較する場合、大文字・小文字の違いを含めて完全に一致するかどうか比較されるため、大文字・小文字を区別して記述してください。

レン디션変換プラグイン設定ファイルに定義されているレン디션変換プラグインが処理できない変換先レン디션タイプを指定した場合は、コマンド入力時にエラーになります。

レン디션タイプの指定の詳細については、「6.5 レン디션タイプの指定方法」を参照してください。

(例)

```
application/pdf
MIME::application/pdf
```

-m "変換元レン디션タイプ一覧ファイル"

変換元レン디션タイプの一覧を定義したファイルのファイルパスをフルパスで指定します。

変換元レン디션タイプを絞り込んでレン디션変換を実行したい場合に指定してください。省略した場合は、レン디션変換プラグイン設定ファイルでの定義が有効になります。

次の場合はコマンド入力時にエラーになります。

- レン디션変換プラグイン設定ファイルに定義されているレン디션変換プラグインが処理できない変換元レン디션タイプを指定した場合
- ファイルの形式が誤っている場合
- 指定したファイルが存在しない場合

変換元レン디션タイプ一覧ファイルの記述方法については、「6.2 変換元レン디션タイプ一覧ファイル」を参照してください。

-c "変換対象文書クラス一覧ファイル"

変換対象にする DMA クラスの文書クラスの一覧を定義したファイルのファイルパスをフルパスで指

定します。このオプションは省略できません。

次の場合はコマンド入力時にエラーになります。

- レン디션変換の対象にできないクラスを指定した場合
- 指定したクラスが存在しない場合
- ファイルの形式が誤っている場合
- 指定したファイルが存在しない場合

変換対象文書クラス一覧ファイルの記述方法については、「6.3 変換対象文書クラス一覧ファイル」を参照してください。

-o "変換オプションファイル"

レン디션変換プラグインに引き渡す変換オプションを記述したファイルのファイルパスをフルパスで指定します。

変換オプションファイルには、レン디션変換プラグイン設定ファイルに指定できる変換オプションを記述できます。このオプションで変換オプションファイルを指定した場合、レン디션変換プラグイン設定ファイルに記述されている変換オプションはすべて無視され、指定した変換オプションファイルに記述されている変換オプションが有効になります。ユーザ定義プラグインの場合は、このオプションで指定した変換オプションファイルの内容がパラメタファイルに格納されてユーザ定義プラグインに引き渡されます。

次の場合はコマンド入力時にエラーになります。

- ファイルの形式が誤っている場合
- 指定したファイルが存在しない場合

変換オプションファイルに記述されているオプションのエントリ名が誤っている場合、またはレン디션変換プラグインが処理できないエントリ名の場合、そのエントリの指定は無視されます。オプションの値の指定内容が誤っている場合、レン디션変換が実行されるときにエラーになり、変換処理はエラー終了します（レンダリングオプションの処理は続行されます）。

レン디션変換プラグイン設定ファイルに指定できる変換オプションおよび変換オプションファイルの記述方法については、「6.4 変換オプションファイル」を参照してください。

コマンド指定例

コマンドの指定例を次に示します。この指定例では、Java クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションのデータベースに格納されたすべての文書を PDF 形式に変換します。

コマンドの指定：EDMRDRReq -r "application/pdf" -c "C:¥class.txt"
class.txtの内容：dwcClass_VerDoc_dv

戻り値

戻り値の一覧を次の表に示します。

表 5-2 レン디션変換要求コマンドの戻り値一覧

戻り値	意味
0	レン디션変換要求を正常に受け付けました。
2	異常終了しました。

注意事項

レン디션変換要求コマンドで実行した変換要求は、前のレン디션変換要求の処理が終了していない場合は、いったんスプールに入れられて待ち状態になり、要求を受け付けた順番に一つずつ処理していきます。スプールには、最大 100 個のレン디션変換要求を記憶できます。スプールに記憶しているレン디션変換要求が 100 個を超えるとエラーになります。

EDMRDRStop (レン디션変換強制停止コマンド)

機能

処理中のレン디션変換処理を強制的に停止するコマンドです。レン디션変換強制停止コマンドを実行すると、処理待ちとなっているレン디션変換要求もすべて取り消されます。

形式

EDMRDRStop [-a]

(凡例)

: 1 個以上の半角の空白またはタブ

オプション

-a

レンダリングオプションに強制停止要求をしたあと、レンダリングオプションの停止を待たずに、ユーザに制御を戻したい場合に指定してください。このオプションを省略した場合、レンダリングオプションが停止するまでユーザに制御は戻りません。

コマンド指定例

コマンドの指定 : EDMRDRStop または EDMRDRStop -a

戻り値

戻り値の一覧を次の表に示します。

表 5-3 レン디션変換強制停止コマンドの戻り値一覧

戻り値	意味
0	レン디션変換停止を正常に受け付けました。
1	レン디션変換処理はすでに停止しています。
2	異常終了しました。

注意事項

レン디션変換強制停止コマンドが正常終了しても、レンダリングオプションのプロセスはその時点で終了していない場合があります。

6

レンディション変換で使用するファイル

この章では、レンディション変換で使用するファイルの詳細について説明します。

6.1 環境設定ファイル

6.2 変換元レンディションタイプ一覧ファイル

6.3 変換対象文書クラス一覧ファイル

6.4 変換オプションファイル

6.5 レンディションタイプの指定方法

6.1 環境設定ファイル

この節では、レンダリングオプションの環境設定ファイルについて説明します。

レンダリングオプションの環境設定ファイルは、次の二つです。

レンダリングオプションの動作を定義するレンディション変換環境設定ファイル

レンディション変換プラグインの動作を定義するレンディション変換プラグイン設定ファイル

これらのファイルは、インストール時に<インストールディレクトリ> ¥config¥ に格納されます。必要に応じて編集してください。なお、レンディション変換プラグイン設定ファイルは、PDFstaffを使用する場合の内容で格納されています。Microsoft Officeを使用する場合は、<インストールディレクトリ> ¥sample¥config¥ に格納されている設定ファイルのサンプル (EDMRDRPlugins.ini.msosf) をコピーして使用してください。

使用するレンディション変換プラグインを変更する場合、レンディション変換プラグインごとに変更前の<インストールディレクトリ> ¥config¥EDMRDRPlugins.ini のバックアップを取得してください。

環境設定ファイルとして使用するファイルのファイル名と格納場所を次の表に示します。

表 6-1 環境設定ファイルの一覧

ファイル名	格納場所
レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)	<インストールディレクトリ> ¥config¥
レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini)	<インストールディレクトリ> ¥config¥

6.1.1 環境設定ファイルの記述形式

環境設定ファイルの記述形式は次のとおりです。

```
[ セクション名 ]
  エントリ名 = 値
  :
[セクション名]
  エントリ名 = 値
  :
```

環境設定ファイルの記述規則は次のとおりです。

- には 0 個以上の半角の空白を指定します。
- 行の先頭にセミコロン (;) を指定すると、その行はコメント行として扱われます。
- 値には数値または文字列を指定できます。
- 値に数値を指定する場合は、0 以上の整数を指定します。0 未満の値を指定した場合、符号なし 4 バイト整数に変換された値で処理されます。例えば、-1 を指定した場合、レンダリングオプションは 4294967295 が指定されたものとして動作します。
- 値に文字列を指定する場合、前後を引用符 (") で囲みます。
- 文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、印刷可能な ASCII コードで記述してください。

6.1.2 レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)

レンダリングオプションを動作させるためには、レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini) を設定する必要があります。

レンディション変換環境設定ファイルの設定例を次に示します。

```
[docspace]
userid=edms1
password=edms1
docspaceid=673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d
prop_consistent=edmProp_ModifyTime,dbrProp_RetrievalName
[render]
req_count_limit=100
doc_count_limit=10000
[network]
reconnect_interval=180000
reconnect_count=3
[log]
req_log_size=5
req_log_generation=2
conv_log_size=5
conv_log_generation=2
result_log_size=5
result_log_generation=2
errfile_backup_size=0
```

レンディション変換環境設定ファイルに設定できるセクションおよびエントリを次の表に示します。

表 6-2 レンディション変換環境設定ファイルに設定できるセクションおよびエントリ

セクション名	エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
docspace	userid	変換対象文書への更新権限を持つ DocumentBroker のユーザ ID を指定します。省略はできません。	必須	空値
	password	userid エントリで指定したユーザ ID のパスワードを指定します。省略はできません。	必須	空値
	docspaceid	利用する DocumentBroker の文書空間識別子を 36 バイトで指定します。省略はできません。	必須	空値

6. レンディション変換で使用するファイル

セクション名	エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
	prop_consistent	<p>レンディション変換結果の登録処理時のレンダリングオプションの動作を指定します。指定できる値は、空値または次に示すプロパティのどれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 処理対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) に存在する、String 型、Integer32 型、または Boolean 型のユーザプロパティ • 処理対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) のマスタレンディションの dbrProp_RetrievalName プロパティ • dbrProp_RenditionStatus プロパティの変換フラグに「変換要」が設定されているサブレンディションの rdrProp_OnConvertStatus プロパティ <p>プロパティは複数個指定することもできます。その場合、プロパティ名を「,」で区切って指定します。「,」を含めて 1,023 バイト以内で指定してください。</p> <p>省略または空値を指定した場合 dbrProp_RenditionStatus プロパティの変換フラグに「変換要」が設定されているサブレンディションに変換結果を登録します。</p> <p>プロパティ名を指定した場合 指定したプロパティの値がレンディション変換処理前後で同一であった場合だけ、dbrProp_RenditionStatus プロパティの変換フラグに「変換要」が設定されているサブレンディションに変換結果を登録します。</p>	空値	空値
render	req_count_limit	<p>レンディション変換要求を格納するスプールのエントリ数の上限を指定します。指定できる値の範囲は 10 ~ 1000 です。</p> <p>req_count_limit エントリの指定値を変更する場合は、<インストールディレクトリ> ¥queue¥ に下記のファイルが存在するかどうか確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • edmrdrqr.lst <p>存在する場合はレンダリングオプション停止後、このファイルを削除してください。削除しないで req_count_limit エントリの指定値を変更しても、変更前の値が有効となります。</p>	100	100

セクション名	エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
	doc_count_limit	1回のレンディション変換要求で処理できる文書数の上限を指定します。 指定できる値の範囲は100～100000です。 このエントリの指定値を変更する場合は、<インストールディレクトリ> %queue% に下記の2ファイルが存在するかどうかを確認してください。 • edmrdrqd_i.lst • edmrdrqd_d.lst 存在する場合はレンダリングオプション停止後、これらのファイルを削除してください。削除しないで doc_count_limit エントリの指定値を変更しても、変更前の値が有効となります。 DocumentBroker に登録されている変換対象文書の数 が doc_count_limit エントリの指定値を超えている場合は、指定値を超える分の文書の変換を行いません。残りの文書を変換するためには、レンディション変換要求コマンドでレンディション変換要求を再度実行してください。	10000	10000
network	master_port	レンダリングオプションが制御用に使用するポート番号を指定します。	22500	なし
	conv_port	レンダリングオプションがレンディション変換処理用に使用するポート番号を指定します。	22501	なし
	timeout	データ送受信のタイムアウト値をミリ秒単位で指定します。 指定できる値の範囲は600000～4294967295または0です。 0を指定すると、タイムアウト値は無限となります。 範囲外の値が指定された場合は、600000を仮定します。	600000	なし
	reconnect_interval	データ通信の再接続を試みる間隔をミリ秒単位で指定します。 指定できる値の範囲は60000～3600000です。 範囲外の値を指定した場合はエラーになります。	180000	180000
	reconnect_count	データ通信の再接続を試みる回数を指定します。 指定できる値の範囲は0～1000です。 範囲外の値を指定した場合はエラーになります。	3	3
log	req_log_size	変換要求受け付けログのファイルサイズの上限をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、ファイルは作成されません。	5	5
	req_log_generation	変換要求受け付けログのバックアップ世代数を指定します。 指定できる値の範囲は0～256です。 0を指定すると、バックアップは作成されません。	1	1
	conv_log_size	変換処理ログのファイルサイズの上限をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、ファイルは作成されません。	5	5
	conv_log_generation	変換処理ログのバックアップ世代数を指定します。 指定できる値の範囲は0～256です。 0を指定すると、バックアップは作成されません。	1	1

6. レンディション変換で使用するファイル

セクション名	エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
	result_log_size	変換結果ログのファイルサイズの上限をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、ファイルは作成されません。	5	5
	result_log_generation	変換結果ログのバックアップ世代数を指定します。 指定できる値の範囲は0～256です。 0を指定すると、バックアップは作成されません。	1	1
	debug_trace_size	トレースファイルのファイルサイズの上限をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、ファイルは作成されません。	2	2
	debug_trace_generation	トレースファイルのバックアップ世代数を指定します。 指定できる値の範囲は0～256です。 0を指定すると、バックアップは作成されません。	1	1
	errfile_backup_size	レンディション変換プラグインで変換できなかった文書ファイルの保存容量をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、文書ファイルは保存されません。 保存先は<インストールディレクトリ>¥logs¥errfile¥です。	0	0
	error_log_size	エラーログのファイルサイズの上限をメガバイト単位で指定します。 指定できる値の範囲は0～1024です。 0を指定すると、ファイルは作成されません。	5	5
	error_log_generation	エラーログのバックアップ世代数を指定します。 指定できる値の範囲は0～256です。 0を指定すると、バックアップは作成されません。	1	1

注

DocumentBroker クライアントのバージョンが 03-12 以降の場合に、レンダリングオプション内部でだけ使用できるプロパティです。
レンディション変換処理中にレンダリングオプション以外のクライアントがマスタレンディションの文書ファイルを更新すると値が変化します。

6.1.3 レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini)

レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) は、レンディション変換で使用するレンディション変換プラグインの設定を行うファイルです。

レンディション変換プラグイン設定ファイルの設定例を次に示します。

< PDFstaff を使用する場合 >

```
[plugin1]
plugin=<インストールディレクトリ>¥bin¥EDMRDRPFPGPDF.DLL
to=application/pdf
from1=application/msword
from2=application/vnd.ms-excel
from3=application/vnd.ms-powerpoint
```

```

from4=application/vnd.visio
from5=application/rtf
from6=application/jxw
from7=text/plain
from8=image/tiff
from9=image/jpeg
from10=image/gif
from11=image/png
from12=application/postscript
from13=message/rfc822
from14=application/vnd.ms-word.document.macroEnabled.12
from15=application/vnd.openxmlformats-officedocument.wordprocessingml.document
from16=application/vnd.ms-excel.sheet.binary.macroEnabled.12
from17=application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12
from18=application/vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheet
from19=application/vnd.ms-powerpoint.presentation.macroEnabled.12
from20=application/
vnd.openxmlformats-officedocument.presentationml.presentation
opt_endpoint= http://servername:port/pdfg-ws/services/PdfGenInterface
opt_useproxy=false
opt_proxyservername=
opt_proxyserverport=
opt_proxyusername=
opt_proxyuserpassword=
opt_maxpsfilesize=
opt_timeout=
opt_converttopsttimeout=
opt_pollinginterval=
opt_printer=Acrobat Distiller J
opt_joboptionsettingname=
opt_securitysettingname=
opt_filetypesettingname=
opt_bookmarkautocreate=false
opt_pptfittopage=true
opt_messagelocale=ja_JP
opt_pdfgenerator=7
opt_webserviceuser=
opt_webservicepass=

```

< Microsoft Office を使用する場合 >

```

[plugin1]
plugin= <インストールディレクトリ>%bin%\EDMRDRPLWD12.DLL
to=application/pdf
from1=application/msword
from2=application/rtf
from3=application/vnd.ms-word.document.macroEnabled.12
from4=application/vnd.openxmlformats-officedocument.wordprocessingml.document
from5=text/plainplugin_timeout=

```

```

[plugin2]
plugin= <インストールディレクトリ>%bin%\EDMRDRPLXL12.DLL
to=application/pdf
from1=application/vnd.ms-excel
from2=application/vnd.ms-excel.sheet.binary.macroEnabled.12
from3=application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12
from4=application/
vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheetplugin_timeout=

```

```

[plugin3]
plugin= <インストールディレクトリ>%bin%\EDMRDRPLPP12.DLL
to=application/pdf
from1=application/vnd.ms-powerpoint
from2=application/vnd.ms-powerpoint.presentation.macroEnabled.12
from3=application/
vnd.openxmlformats-officedocument.presentationml.presentationplugin_timeout=

```

レンディション変換プラグイン設定ファイルに設定できるセクションは、plugin<n> セクションです。<n> は 1 からの順番で、plugin1 から plugin32 まで最大 32 個のセクションを指定できます。1 個のセクションが 1 個のレンディション変換プラグインの定義となります。33 個以上のセクションを指定した場合、33

6. レン디션変換で使用するファイル

個目以降のセクションは無視されます。最低 1 個のセクションを定義することが必要です。デフォルトでは < PDFstaff を使用する場合 > の plugin1 セクションが設定されています。

plugin<n> セクションに設定できるエントリについて、基本設定、PDF 変換プラグインのオプション設定、およびユーザ定義プラグインの設定に分けて説明します。

(1) レン디션変換プラグイン設定ファイルの基本設定

レン디션変換プラグイン設定ファイルの基本設定用エントリを次の表に示します。

表 6-3 レン디션変換プラグイン設定ファイルの基本設定用エントリ

エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
plugin	<p>使用するレン디션変換プラグインのファイルパスをフルパスで指定します。省略はできません。次に示すプラグインのファイルパスが指定できます。PDFstaff を使用する場合</p> <p>< インストールディレクトリ > %bin%\EDMRDRPFGPDF.DLL</p> <p>Microsoft Office を使用する場合 次のどれかを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 変換元レン디션タイプが Word のとき < インストールディレクトリ > %bin%\EDMRDRPLWD12.DLL 変換元レン디션タイプが Excel のとき < インストールディレクトリ > %bin%\EDMRDRPLXL12.DLL 変換元レン디션タイプが PowerPoint のとき < インストールディレクトリ > %bin%\EDMRDRPLPP12.DLL <p>ユーザ定義プラグイン < ユーザ定義プラグインの実行ファイル ></p>	必須	< インストールディレクトリ > %bin%\EDMRDRPFGPDF.DLL
plugin_timeout	<p>Microsoft Office を使用する場合、またはユーザ定義プラグインを使用する場合、プラグインの変換処理のタイムアウト値をミリ秒単位で指定します。</p> <p>指定できる値の範囲は 300000 ~ 4294967295 です。0 を指定すると、タイムアウト値は無限となります。</p> <p>PDFstaff を使用する場合、このエントリは指定しないでください。PDFstaff の変換処理のタイムアウト値は、opt_timeout エントリと opt_converttopstimeout エントリで指定してください。</p>	1800000	なし
to	<p>変換先レン디션タイプを指定します。省略はできません。先頭の "MIME::" を取り除いて 249 バイト以内で指定します。レン디션タイプの詳細は、「6.5 レン디션タイプの指定方法」を参照してください。</p>	必須	application/pdf

エン트리名	説明	省略時の仮 定値	インストール時の値
from<n>	<p>plugin エントリで指定したレンディション変換プラグインが受け付ける変換元レンディションタイプを指定します。省略はできません。</p> <p>エントリ名の <n> は、1 からの通番です。</p> <p>from1 から from100 まで最大 100 個のエントリを指定できます。101 個以上のエントリを指定した場合、101 個目以降のエントリは無視されます。</p> <p>各エントリのレンディションタイプは、先頭の "MIME::" を取り除いて 249 バイト以内で指定します。</p> <p>レンディションタイプの詳細は、「6.5 レンディションタイプの指定方法」を参照してください。</p>	必須（最低 1 個）	<ul style="list-style-type: none"> • application/msword • application/vnd.ms-excel • application/vnd.ms-powerpoint • application/vnd.visio • application/rtf • application/jxw • text/plain • image/tiff • image/jpeg • image/gif • image/png • application/postscript • message/rfc822 • application/vnd.ms-word.document.macroEnabled.12 • application/vnd.openxmlformats-officedocument.wordprocessingml.document • application/vnd.ms-excel.sheet.binary.macroEnabled.12 • application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12 • application/vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheet • application/vnd.ms-powerpoint.presentation.macroEnabled.12 • application/vnd.openxmlformats-officedocument.presentationml.presentation
uoc	<p>UOC を実行する場合、UOC を格納したファイルのファイルパスをフルパスで指定します。指定を省略すると、UOC は無効となります。</p> <p>このエントリは、PDFstaff を使用する場合だけ有効になります。Microsoft Office を使用する場合、およびユーザ定義プラグインを使用する場合は、このエントリの指定は無視されます。</p>	なし	なし
uoc_sql	<p>UOC でプロパティ値を利用する場合は、SQL 情報ファイルのファイルパスをフルパスで指定します。指定を省略すると、UOC のパラメタファイルにプロパティ値が格納されません。</p> <p>このエントリは、PDFstaff を使用する場合だけ有効になります。Microsoft Office を使用する場合、およびユーザ定義プラグインを使用する場合は、このエントリの指定は無視されます。</p> <p>SQL 情報ファイルの詳細は、「(4) SQL 情報ファイル」を参照してください。</p>	なし	なし

(2) PDFstaff を使用する場合のレンディション変換プラグイン設定ファイルのオプション設定

PDFStaff を使用する場合、PDF 変換のオプション設定ができます。レンディション変換プラグイン設定ファイルの PDF 変換プラグインのオプション設定用エントリを次の表に示します。

表 6-4 レンディション変換プラグイン設定ファイルの PDF 変換プラグインのオプション設定用エントリ

エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
opt_endpoint	Adobe LiveCycle PDF Generator のサービスエンドポイントを指定します。省略はできません。 Adobe LiveCycle PDF Generator のサービスエンドポイントは、通常の場合は http://servername:port/pdfg-ws/services/PdfGenInterface の形式になります。 Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 の場合は http://servername:8080/soap/services/?blob=dime の形式となります。	必須	http://servername:port/pdfg-ws/services/PdfGenInterface
opt_useproxy	Adobe LiveCycle PDF Generator に接続する場合にプロキシを使用するかどうかを指定します。 指定できる値は次のとおりです。 true: プロキシを使用します。 false: プロキシを使用しません。	false	false
opt_proxyservername	Adobe LiveCycle PDF Generator に接続する場合に使用するプロキシサーバのサーバ名を指定します。	""	なし
opt_proxyserverport	Adobe LiveCycle PDF Generator に接続する場合に使用するプロキシサーバのポート番号を指定します。	0	なし
opt_proxyusername	Adobe LiveCycle PDF Generator に接続する場合に使用するプロキシの認証ユーザ名を指定します。プロキシサーバの認証が必要なときだけ指定します。	""	なし
opt_proxyuserpassword	Adobe LiveCycle PDF Generator に接続する場合に使用するプロキシの認証ユーザのパスワードを指定します。プロキシサーバの認証が必要なときだけ指定します。	""	なし
opt_maxpsfilesize	Adobe LiveCycle PDF Generator の Web サービスに対して、PostScript を PDF へ変換処理依頼する際のファイルサイズの上限を指定します。	262,144,000 (約 250 メガバイト)	なし
opt_timeout	Adobe LiveCycle PDF Generator の Web サービスに対して、PostScript を PDF へ変換処理依頼する際のタイムアウト時間をミリ秒単位で指定します。 指定できる値の範囲は 0 ~ 2147483647 です。 0 を指定すると、タイムアウト値は無限となります。	270,000 (270 秒)	なし
opt_converttimeout	PDFstaff がファイルを PostScript へ変換する際のタイムアウト時間をミリ秒単位で指定します。 指定できる値の範囲は 0 ~ 2147483647 です。 0 を指定すると、2147483647 を指定したときと同じ動作をします。 なお、実際にタイムアウトする時間は、処理のオーバーヘッドなどによって、指定した値よりも大きくなる場合があります。	PDFstaff 仮想フォルダのセッションタイムアウト値 (IIS の設定) ¹ , または 1,200,000 (20 分) ²	なし

エン트리名	説明	省略時の仮 定値	インストール時の値
opt_polling interval	PDFstaff が Adobe LiveCycle PDF Generator の処理状況をポーリングする間隔をミリ秒単位で指定します。指定できる値の範囲は 0 ~ 2147483647 です。 Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 の場合、このエントリに値を指定しても無視されます。	5000 (5 秒)	なし
opt_printer	PDFstaff が Office 文書、HTML ページ (html)、および太郎文書を PDF に変換する過程で使用する PostScript プリントドライバのプリンタ名を指定します。 プリンタ名に指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、およびハイフン「-」です。220 バイトまで指定できます。	必須	Acrobat Distiller J
opt_joboption settingname	Adobe LiveCycle PDF Generator が PostScript を PDF に変換する際に使用する Adobe PDF 設定名を指定します。Adobe LiveCycle PDF Generator に登録されている Adobe PDF 設定名を文字列で指定します。"" (空文字) を指定すると、Adobe LiveCycle PDF Generator でデフォルトとして設定されている Adobe PDF 設定が使用されます。	""	なし
opt_security settingname	Adobe LiveCycle PDF Generator が PostScript を PDF に変換する際に使用するセキュリティ設定名を指定します。Adobe LiveCycle PDF Generator に登録されているセキュリティ設定名を文字列で指定します。"" (空文字) を指定すると、Adobe LiveCycle PDF Generator でデフォルトとして設定されているセキュリティ設定名が使用されます。	""	なし
opt_filetype settingname	Adobe LiveCycle PDF Generator が PostScript を PDF に変換する際に使用するファイルタイプ設定名を指定します。このエントリは、指定を省略するか、または空文字を設定して使用してください。"" (空文字) を指定すると、Adobe LiveCycle PDF Generator でデフォルトとして設定されているファイルタイプ設定が使用されます。	""	なし
opt_bookmark autocreate	Word 文書を PDF に変換するとき、Word の見出しから PDF のしおりを作成するかどうかを指定します。 指定できる値は次のとおりです。 true : PDF のしおりを作成します。 false : PDF のしおりを作成しません。 このエントリで true を指定した場合でも、目次のリンク、図表番号への相互参照、URL リンクなど、文書中のリンク情報は作成されません。 注意 しおりを作成すると、レンダリングオプションに非常に大きな負荷が掛かり、PC の CPU を長時間独占します。しおりの作成処理は、同じ PC 上で並列に動作しているほかの処理の処理性能に大きな影響を与えますので、使用するときは十分注意してください。 しおりの生成は次のように処理されます。 見出しの途中にある制御コード文字はスペースに変換されます。 見出しの前後の空白や制御コード文字は削除されます。見出しの前後の空白や制御コード文字が削除されたことによって文字列の長さが 0 になったときは、しおりは生成されません。 見出しレベルの低い見出しは、直前のより高いレベルの見出しの子のしおりとして、生成されます。ただし、直前より高いレベルの見出しが存在しない場合、トップレベルのしおりとして生成されます。	false	false

6. レンディション変換で使用するファイル

エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
opt_pptfittopage	PowerPoint 文書を PostScript または PDF に変換するとき、ページを用紙サイズに合わせて作成するかどうかを指定します。指定できる値は次のとおりです。 true：用紙サイズに合わせて作成します。 false：用紙サイズに合わせて作成しません。 このエントリで true を指定した場合、PowerPoint のページ設定で指定した用紙サイズではなく、PostScript プリントドライバのデフォルト用紙設定のサイズに合わせて（内容が拡大または縮小されて）PDF が作成されます。 また、このエントリで false を指定した場合、PDF 作成時に内容が用紙からはみ出して出力されたり、中央に小さく縮小されて出力されたりすることがあります。	true	true
opt_messagelocale	Adobe LiveCycle PDF Generator が返すメッセージのロケールを文字列で指定します。 Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 の場合、このエントリに値を指定しても無視されます。	ja_JP	ja_JP
opt_pdfgenerator	使用する Adobe LiveCycle PDF Generator を指定します。指定できる値は次のとおりです。 • 7：Adobe LiveCycle PDF Generator for PostScript 7.0、または 7.2 を使用します。 • ES：Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 を使用します。	7	7
opt_webserverviceuser	Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 サーバの Web サービスを利用する際の認証ユーザ名を指定します。opt_pdfgenerator に ES を指定したときにだけ指定します。	""	なし
opt_webservervicepass	Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 サーバの Web サービスを利用する際の認証パスワードを指定します。 opt_pdfgenerator に ES を指定したときにだけ指定します。	""	なし

注 1

PDFstaff Web または PDFstaff Server がインストールされている場合

注 2

次のどちらかの場合、省略時の仮定値となります。

- PDFstaff Web または PDFstaff Server がインストールされていない場合
- PDFstaff が PDFstaff 仮想フォルダのセッションタイムアウト値の取得に失敗した場合

(3) レンディション変換プラグイン設定ファイルのユーザ定義プラグインの設定

レンディション変換プラグイン設定ファイルのユーザ定義プラグインの設定用エントリを次の表に示します。

表 6-5 レンディション変換プラグイン設定ファイルのユーザ定義プラグインの設定用エントリ

エントリ名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
user_plugin_name	ユーザ定義プラグインの名称を 63 バイト以内で指定します。 このエントリで指定した名称は、エラーログ出力時に使用されます。 plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定した場合は、必ず指定してください。 plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定していない場合、このエントリを指定しても無視されます。	なし	なし

エン트리名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
user_subprocess_name	ユーザ定義プラグインでの変換タイムアウト発生時に、ユーザ定義プラグインの強制停止と同時に停止するサブプロセスの名称を指定します。 セミコロン (;) で区切って最大 8 個のサブプロセスが指定できます。 各サブプロセスの名称は、パスを含めないで、31 バイト以内で指定します。 (例) SUB1.EXE;SUB2.EXE plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定していない場合、このエントリを指定しても無視されます。	なし	なし
user_stop_waittime	ユーザ定義プラグインを中断するときにユーザ定義プラグインの終了を待つ期間をミリ秒単位で指定します。 指定できる値の範囲は 10000 ~ 60000 です。 0 を指定すると、ユーザ定義プラグインの終了を待たずにユーザ定義プラグインのプロセスを強制終了します。 10000 ~ 60000 の値を指定した場合、イベント "EDMRDR_UserPlugin_StopEvent" をシグナル状態とした後、指定した期間、ユーザ定義プラグインの終了を待ちます。 plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定していない場合、このエントリを指定しても無視されます。	0	なし
user_input_extensions	ユーザ定義プラグインが処理できる変換元ファイルの拡張子を指定します。 セミコロン (;) で区切って複数個指定できます。セミコロンを含めて全体で 255 バイト以内で指定します。大文字・小文字は区別されません。指定を省略すると、どの拡張子のファイルでも処理できると見なされます。 (例) .CSV;.DAT plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定していない場合、このエントリを指定しても無視されます。	なし	なし
user_output_extensions	ユーザ定義プラグインが作成する変換先ファイルの拡張子を 32 バイト以内で指定します。大文字・小文字は区別されません。 (例) .CSV plugin エントリにユーザ定義プラグインを指定していない場合、このエントリを指定しても無視されます。	必須	なし

(4) SQL 情報ファイル

UOC でプロパティ値を利用するときは、プロパティ値を取得するための SQL 文を SQL 情報ファイルに設定します。

SQL 情報ファイルに設定できるセクションは、<文書クラス名>セクションです。

<文書クラス名>には、DMA クラス dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス名を指定できます。複数のクラスが対象の場合は、複数のセクションを指定できます。最大 32 個のセクションを指定できます。33 個以上のセクションを指定した場合、33 個目以降のセクションは無視されます。指定した <文書クラス名> が存在しない場合、または指定した <文書クラス名> が DMA クラス dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス名でない場合は、エラーメッセージ KMBX11311-E が出力されます。

SQL 情報ファイルに設定できるエントリを次の表に示します。

6. レンディション変換で使用するファイル

表 6-6 SQL 情報ファイルに設定できるエン트리

エン트리名	説明	省略時の仮定値	インストール時の値
sql	<p>プロパティ値を取得するための SQL 文を指定します。SQL 文の文法は、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」またはマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」を参照してください。</p> <p>また、SQL 文には、? パラメタを利用して DocVer の dmaProp_OIID と完全一致させる条件を付与する必要があります。</p> <p>sql エン 트리には、8,192 バイトまでの SQL 文が指定できます。8,192 バイトを超える SQL 文を指定した場合、8,193 バイト以降が切り捨てられます。</p> <p>エン 트リの指定、またはエン 트リの値の指定がないときは、セクションの指定が無視されます。</p>	なし	なし

sql エン 트リの記述例を次に示します。なお、sql エン 트리は 1 行で記述します。 は半角の空白です。

(例)

```
sql=select dmaProp_OIID,任意のプロパティ,... from usrClass_DocVer where
dmaProp_OIID=? and <その他の条件>
```

6.2 変換元レンディションタイプ一覧ファイル

この節では、変換元レンディションタイプ一覧ファイルについて説明します。

変換元レンディションタイプ一覧ファイルは、レンディション変換要求ごとにレンディション変換対象の変換元レンディションタイプを絞り込みたい場合に使用します。例えば、変換元レンディションタイプとして、"application/msword"、"application/vnd.ms-excel"、"application/vnd.ms-powerpoint"、"application/jxw"、"text/plain"、"image/tiff" を定義しているレンディション変換プラグインを使用するレンディション変換の場合で、「今回は "application/msword" と "application/jxw" だけを変換元レンディションタイプにしてレンディション変換を実行したい」というときに使用します。変換元レンディションタイプ一覧ファイルは、任意のファイル名で任意の場所に作成し、レンディション変換要求コマンドの `-m` オプションにファイルパスをフルパスで指定して使用します。このレンディション変換要求コマンドの `-m` オプションの指定は省略できます。省略した場合は、レンディション変換プラグイン設定ファイルの定義が有効となります。したがって、変換元レンディションタイプをレンディション変換要求ごとに絞り込む必要がないときは、変換元レンディションタイプ一覧ファイルを作成する必要はありません。

変換元レンディションタイプ一覧ファイルには、変換対象として絞り込む変換元レンディションタイプを指定します。変換元レンディションタイプ一覧ファイルの記述形式は次のとおりです。

```
レンディションタイプ 改行
#コメント 改行
:
```

変換元レンディションタイプ一覧ファイルの記述規則は次のとおりです。

- レンディションタイプがまったく指定されていない場合（例えば、すべて空行の場合）、このファイルは無効となり、レンディション変換プラグイン設定ファイルの定義が有効になります。
- 改行コードは CR+LF です。
- 最大 16 個のレンディションタイプを指定できます。
- 空行は読み飛ばして処理されます（エラーにはなりません）。
- レンディションタイプは 249 バイト以内で指定します。
- 先頭の 1 カラム目が半角の # で始まる行は、コメント行として扱われます。
- 文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- レンディションタイプの指定方法については、「6.5 レンディションタイプの指定方法」を参照してください。

6.3 変換対象文書クラス一覧ファイル

この節では、変換対象文書クラス一覧ファイルについて説明します。

変換対象文書クラス一覧ファイルは、レンダリングオプションがレンディション変換の対象文書を特定するときに、どの DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラス) に対して検索を実行するか定義するファイルです。変換対象文書クラス一覧ファイルは、任意のファイル名で任意の場所に作成し、レンディション変換要求コマンドの `-c` オプションにファイルパスをフルパスで指定して使用します。このレンディション変換要求コマンドの `-c` オプションは省略できないため、レンディション変換要求コマンドを入力する前に、必ず変換対象文書クラス一覧ファイルを作成しておいてください。

変換対象文書クラス一覧ファイルには、DocumentBroker サーバが提供する EDMCrtSimMeta コマンドで作成した、クラス定義情報ファイルに定義されている DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラス) の名称を指定します。クラス定義情報ファイルの詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

変換対象文書クラス一覧ファイルの記述形式は次のとおりです。

```
クラス名称 改行  
#コメント 改行  
:
```

変換対象文書クラス一覧ファイルの記述規則は次のとおりです。

- には 0 個以上の半角の空白またはタブを指定します。
- クラス名称は最低一つ定義する必要があります。
- 改行コードは CR+LF です。
- 最大 16 個のクラス名称を指定できます。
- 空行は読み飛ばして処理されます (エラーにはなりません)。
- クラス名称は 128 バイト以内で指定します。
- 先頭の 1 カラム目が半角の # で始まる行は、コメント行として扱われます。
- 文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、印刷可能な ASCII コードで記述してください。

6.4 変換オプションファイル

レンディション変換プラグイン設定ファイルに、変換オプションを指定してレンディション変換プラグインを定義すると、そのレンディション変換プラグインを使用するすべてのレンディション変換要求に対して、指定した変換オプションの内容が反映されます。同じレンディション変換プラグインで異なる変換オプションを指定したレンディション変換を実行したい場合は、変換オプションファイルを個別に作成してください。

変換オプションファイルとは、レンディション変換プラグインに引き渡す変換オプションを定義したファイルです。変換オプションファイルは、任意のファイル名で任意の場所に作成し、レンディション変換要求コマンドの `-o` オプションにファイルパスをフルパスで指定して使用します。変換オプションファイルを使用すると、同じレンディション変換プラグインを使用する場合でも、レンディション変換要求ごとに異なる変換オプションを指定したレンディション変換を実行できるようになります。レンディション変換要求コマンドの `-o` オプションに変換オプションファイルを指定した場合、レンディション変換プラグイン設定ファイルで指定した変換オプションはすべて無視され、指定した変換オプションファイルに定義されている変換オプションが有効になります。

変換オプションファイルの記述形式は次のとおりです。

```

    エントリ名 = 値 改行
    :
#コメント 改行

```

変換オプションファイルの記述規則は次のとおりです。

- には 0 個以上の半角の空白またはタブを指定します。
- 改行コードは CR+LF です。
- エントリ名は 32 バイト以内で指定します。
- エントリ名は、`#`、`=`、空白、タブおよび改行を除いた ASCII-7Bit の文字列で指定します。
- 値は 127 バイト以内の文字列で指定します。
- 値に空白、タブまたは引用符 (`"`) を含む文字列を指定する場合、値の前後を引用符 (`"`) で囲みます。
- 値の前後の空白およびタブは無視されます。
- 先頭の 1 カラム目が半角の `#` で始まる行はコメント行として扱われます。
- 文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- 同じエントリ名を複数回指定した場合、二つ目以降は無視されます。
- 変換オプションファイル内の記述の長さについては、次の計算式を目安にしてください。

エントリ名の長さの総計 + 値の長さの総計 + オプション数 $\times 2 + 1 < = 1,024$ バイト

この計算式の左辺が 1,024 バイトを超える変換オプションファイルをレンディション変換要求コマンドの引数に指定するとエラーになります。

6.5 レンディションタイプの指定方法

この節では、レンダリングオプションでのレンディションタイプの指定方法について説明します。

レンダリングオプションでレンディションタイプを指定する場合、DocumentBroker サーバの `dbrProp_RenditionType` プロパティに指定した値を使用します。DocumentBroker サーバでは、レンディションタイプの値の指定方法として次に示す MIME 形式にすることをお勧めしています。

```
MIME::タイプ/サブタイプ [ ; パラメタ [ ; パラメタ ] ... ] [ (コメント群) [ (コメント群) ] ... ]
```

```
パラメタ ::= 属性 "=" 値
コメント群 ::= コメント | (コメント群)
```

上記の MIME 形式の記述規則は次のとおりです。

- タイプ、サブタイプ、および属性は、`() <> @ , ; : ¥ " / [] / =` および `0x1F` 以下の値を除いた ASCII-7Bit の文字列で指定します。
- 値は、`" ¥` を除いた ASCII-7Bit の文字列を引用符 (`"`) で囲んで指定します。また、属性と同じ形式の文字列も指定できます。
- コメントは、ASCII-7Bit 文字列で指定します。ただし、`()` を記述する場合は `¥` を直前に指定する必要があります。
- RFC では、CR は直後に LF がある場合だけ指定できますが、レンダリングオプションでは指定できません。
- 値として `¥` を記述したい場合、`¥` を続けて二つ記述してください。`¥` は次の文字が構文上の区切りでないことを示すために使われます。`¥` を続けて二つ記述した場合、`¥` の次の文字 (二つ目の `¥`) をそのままデータとして扱います。
- は空白 (`0x20`) 0 個以上を示します。

レンダリングオプションでレンディションタイプを指定するときには、MIME 形式の先頭の `"MIME::"` を除く文字列を指定します。なお、レンディション変換要求コマンドのオプションでレンディションタイプを指定する場合は、MIME 形式の先頭の `"MIME::"` を除く文字列の前後を引用符 (`"`) で囲んで指定します。また、指定する文字列中に `"` および `¥` が含まれる場合は、エスケープ文字 (`¥`) を付けて指定する必要があります。

指定する文字列中に `"` および `¥` が含まれる場合の指定例を次に示します。

`¥"` の場合

`¥¥¥"` に変更して指定します。

`"` の場合

`¥"` に変更して指定します。

`¥` の場合

`¥` のままで、変更する必要はありません。

レンダリングオプションは、レンディション変換要求コマンドのオプションおよびレンディション変換プラグイン設定ファイルで指定されたレンディションタイプと、サーバ上の文書に設定されているレンディションタイプを比較して、その文書を変換対象とするかどうかを判断します。このとき、文書に設定されているレンディションタイプの先頭の `"MIME::"` を除いて比較します。

一つの文書に、レンディション変換要求コマンドで指定された変換先レンディションタイプと一致するサ

レンディションが複数存在する場合、一致するすべてのサブレンディションが変換対象となります。

例えば、レンディション変換要求コマンドのオプションで指定された変換先レンディションタイプが "application/pdf" の場合、次のどちらかのレンディションタイプを持つサブレンディションがすべて変換対象となります。

- application/pdf
- MIME::application/pdf

7

障害対策

レンダリングオプションの運用中に障害が発生した場合、その障害の原因を調べるため、ログ情報、トレース情報および変換エラーとなったファイルを確認する必要があります。

この章では、レンダリングオプションで発生した障害の原因を調査する方法や対処方法について説明します。

7.1 ログ情報の採取方法とその見方

7.2 トレース情報の採取方法

7.3 変換エラーになったファイルの採取方法

7.4 ログの出力形式

7.1 ログ情報の採取方法とその見方

この節では、レンディション変換で障害が発生した場合、どのように原因を調べればよいかについて説明します。

レンディション変換で障害が発生した場合、ログ情報を調べることによって、その原因を追及します。レンダリングオプションでは、複数のログを利用することで、ログ情報を詳細に確認でき、対処もしやすくなっています。

レンダリングオプションが出力するログの一覧を次の表に示します。

表 7-1 レンダリングオプションが出力するログの一覧

ログの名称	出力元	説明
イベントログ	レンダリングオプション	Windows のイベントログです。 レンダリングオプションで発生した障害のうち、特に重要なものが出力されます。
変換要求受け付けログ (EDMRDRReq.log)	レンディション変換要求 コマンド	レンディション変換要求コマンドからの変換要求受け付け履歴が記録されます。
変換結果ログ (EDMRDRRes.log)	レンダリングオプション	レンディション変換要求コマンド単位の実行結果が記録されます。
変換処理ログ (EDMRDRCnv.log)	レンダリングオプション	各変換対象文書に対するレンディション変換の結果が記録されます。
エラーログ (EDMRDRErr.log)	レンダリングオプション	レンダリングオプションで発生したエラーの履歴が記録されます。

レンダリングオプションのログの出力形式は、それぞれのログで決まった形式となっています。イベントログを除く各ログの形式については、「7.4 ログの出力形式」を参照してください。

ログのサイズ上限の指定およびログのバックアップ世代数の指定

レンダリングオプションの環境設定ファイルで、各ログに対して、ファイルサイズの上限、およびバックアップ世代数を指定できます。なお、トレースファイルのファイルサイズの上限およびバックアップ世代数も同様に環境設定ファイルで指定できます。環境設定ファイルの詳細については、「6.1 環境設定ファイル」を参照してください。

ログの世代管理方式は次のとおりです。

```
EDMRDRErr.log      現在出力中のログ
EDMRDRErr.log.1    1世代前のバックアップ
                  ⋮
EDMRDRErr.log.n    n世代前のバックアップ
```

環境設定ファイルで、バックアップ世代数を 0 にすると、バックアップは作成されません。

文書空間の文字コード種別に UTF-8 を使用している場合、ログ情報中のファイル名などに文字コードが UTF-8 の文字が出力される場合があります。文字コードが異なる文字が混在していると、ログ情報が正しく表示されません。そのため、参照する個所の文字コード種別に合わせて、テキストエディタの文字コード種別の設定を切り替えながら、ログ情報を参照してください。

7.1.1 イベントログの採取方法とその見方

ここでは、イベントログの採取方法とイベントログに表示される情報の見方について説明します。

イベントログとは、Windows が出力するイベントログのことです。イベントログには、レンダリングオプ

ションで発生したエラーのうち、特に重要度の高いものが出力されます。

(1) イベントログの採取方法

イベントログは、レンダリングオプションをインストールしているレンディション変換用 PC のイベントビューアから採取できます。

採取手順を次に示します。

< 操作 >

1. 「スタート」メニューから「プログラム」 - 「管理ツール」 - 「イベントビューア」を選択します。
2. ログ情報のうち、アプリケーションログ情報を表示します。
3. 「名前を付けて保存」を実行して保存します。

(2) イベントログの見方

イベントログに出力されるメッセージは、次の表に示す属性を持ちます。

表 7-2 イベントログに出力されるメッセージの属性

属性名称	属性の内容
ソース	"DocumentBroker Rendering Option V3"
分類	なし
イベント ID	メッセージ ID 中のメッセージ分類とメッセージ番号を数値化した番号です。 (例: KMBX11001-E の場合 11001)
種類	"情報": メッセージ種別が "I" のメッセージです。 "警告": メッセージ種別が "W" のメッセージです。 "エラー": メッセージ種別が "E" のメッセージです。

イベント ID に表示される内容を基にしてレンダリングオプションのメッセージ ID を調べてください。レンダリングオプションのメッセージの要因および対処については、「8.3 メッセージの詳細」を参照してください。

7.1.2 変換要求受け付けログの採取方法とその見方

ここでは、変換要求受け付けログの採取方法と変換要求受け付けログに表示される情報の見方について説明します。

(1) 変換要求受け付けログの採取方法

変換要求受け付けログ (EDMRDRReq.log) には、レンディション変換要求コマンドからのレンディション変換要求の受け付け履歴が記録されます。これらの情報について確認したい場合、変換要求受け付けログを採取します。

次に示すディレクトリに格納されている EDMRDRReq.log をコピーしてください。

< インストールディレクトリ > \logs\

(2) 変換要求受け付けログの見方

採取した変換要求受け付けログを調べて、レンディション変換要求を受け付けたかどうかを確認します。

変換要求受け付けログの出力例を次に示します。

受け付け番号

```
[2007/01/28 09:57:17.19 + 0900(190:189)] 20 ACCEPT MIME::application/pdf
[2007/01/28 09:58:23.42 + 0900(135:176)] 21 ERROR MIME::application/pdf
```

変換要求受け付けログの出力形式については、「7.4.2 変換要求受け付けログの出力形式」を参照してください。

7.1.3 変換結果ログの採取方法とその見方

ここでは、変換結果ログの採取方法と変換結果ログに表示される情報の見方について説明します。

(1) 変換結果ログの採取方法

変換結果ログ (EDMRDRRes.log) には、レンディション変換要求コマンド単位の実行結果が記録されます。この情報について確認したい場合、変換結果ログを採取します。

次に示すディレクトリに格納されている EDMRDRRes.log をコピーしてください。

<インストールディレクトリ>¥logs¥

(2) 変換結果ログの見方

採取した変換結果ログを調べて、変換処理が成功したかどうかを確認します。

変換結果ログの出力例を次に示します。

受け付け番号

```
[2007/01/28 09:57:17.19 + 0900(190:189)] 22 CNVSTART MIME::application/pdf
[2007/01/28 09:58:23.42 + 0900(135:176)] 22 CNVEND MIME::application/pdf 11 11 0
```

変換に失敗した文書数
変換に成功した文書数

対象文書数

変換結果ログの出力形式については、「7.4.3 変換結果ログの出力形式」を参照してください。

7.1.4 変換処理ログの採取方法とその見方

ここでは、変換処理ログの採取方法と変換処理ログに表示される情報の見方について説明します。

(1) 変換処理ログの採取方法

変換処理ログ (EDMRDRConv.log) には、変換対象の各文書に対するレンディション変換の結果が記録されます。この情報について確認したい場合、変換処理ログを採取します。

次に示すディレクトリに格納されている EDMRDRConv.log をコピーしてください。

<インストールディレクトリ>¥logs¥

(2) 変換処理ログの見方

採取した変換処理ログを調べて、どの文書の変換処理に失敗したかを確認します。

変換処理ログの出力例を次に示します。

受け付け番号

```
[2007/01/28 15:24:45.32 +0900 (168:214)] 22 CNVERR
dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d
/1917bd83-4a81-11d4-b7cd-00e0298721710000000000000589 報告書.doc
```

変換処理ログの出力形式については、「7.4.4 変換処理ログの出力形式」を参照してください。

7.1.5 エラーログの採取方法とその見方

ここでは、エラーログの採取方法とエラーログに表示される情報の見方について説明します。

(1) エラーログの採取方法

エラーログ (EDMRDRErr.log) には、レンダリングオプションで発生したエラーの履歴が記録されます。この情報について確認したい場合、エラーログを採取します。

次に示すディレクトリに格納されている EDMRDRErr.log をコピーしてください。

<インストールディレクトリ>\logs¥

(2) エラーログの見方

採取したエラーログを調べて、エラーが発生したかどうかを確認します。エラーログに出力されたメッセージを調べて対処することになります。

エラーログの出力例を次に示します。

```
[2007/01/28 15:24:44.53 +0900 (168:214)] KMBX12104-E プラグイン (PDF変換プラグイン)
の変換処理でエラーが発生しました。変換元ファイル=報告書.doc, 変換先ファイル=報告書.pdf
エラーコード=32, 詳細=パスワードが正しくありません。 , wCode=0, Source=Microsoft Word
```

エラーログの出力形式については、「7.4.5 エラーログの出力形式」を参照してください。エラーログに出力される各メッセージの要因および対処については、「8.3 メッセージの詳細」を参照してください。

7.2 トレース情報の採取方法

この節では、トレース情報の採取方法について説明します。

レンダリングオプションに関する障害が発生した場合、その原因を調査するのに有効なものの一つにトレースファイルがあります。レンダリングオプションに関する障害への対策として有効なトレースファイルには、次に示すものがあります。

レンダリングオプションのトレースファイル

DocumentBroker サーバのトレースファイル

DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイル

このマニュアルでは、レンダリングオプションに関係するトレースファイルのうち、レンダリングオプションのトレースファイルと DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイルの採取方法について説明します。DocumentBroker サーバのトレースファイルの採取方法については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

7.2.1 レンダリングオプションのトレースファイルの採取方法

ここでは、レンダリングオプションのトレースファイルの採取方法について説明します。

レンダリングオプションの場合、インストール直後の状態では、トレースファイルが作成される設定になっています。次に示すトレースファイルをコピーしてトレース情報を確認してください。

<インストールディレクトリ>%logs%EDMRDRTrc.log

トレースファイルサイズの容量不足によってトレースがラップアラウンドした場合は、次に示す手順でトレースファイルサイズを拡張し、トレースファイルを採取します。

<操作>

1. レン디션変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini) の設定内容を次に示すように修正します。

[log]

debug_trace_size=10 ; トレースファイルのサイズをメガバイト単位で指定

debug_trace_generation=1 ; トレースファイルのバックアップ世代数を指定

;以降はコメントです。

2. レン디션変換要求コマンドを実行します。
3. 現象が再現した場合、レン디션変換強制停止コマンドでレンダリングオプションを停止します。
4. 次に示すファイルをコピーします。

<インストールディレクトリ>%logs%EDMRDRTrc.log

7.2.2 DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイルの採取方法

ここでは、DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイルの採取方法について説明します。DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime の

トレース情報を採取するための設定方法については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 システム導入・運用ガイド」を参照してください。

DocumentBroker Development Kit または DocumentBroker Runtime のトレースファイルは、呼び出し元のプロセス ID で特定できるようになっています。レンダリングオプションのプロセス ID を調査することによって、レンダリングオプションのトレースファイルを特定することができます。

レンダリングオプションのプロセス ID を求める手順を次に示します。

< 操作 >

1. レンダリングオプションのエラーログを開き、KMBX12051-I (プラグインが利用できます) メッセージを探します。
2. 該当する行の左のヘッダ部分中のプロセス ID を参照します。

```
[2000/05/05 12:18:12.00 +0900 (001:001)] KMBX12051-I ....
```

下線部分がプロセス ID です。

7.3 変換エラーになったファイルの採取方法

この節では、レンディション変換を実行したときに変換エラーになった文書ファイルの採取方法について説明します。

レンダリングオプションでは、変換エラーになった文書ファイルがあった場合、そのファイルを採取してエラーになった原因を追及できます。エラーになった文書ファイルを採取する方法には、オブジェクト操作ツールを利用する方法とレンダリングオプションの機能を利用する方法があります。

それぞれの利用方法について説明します。

(1) オブジェクト操作ツールを利用する方法

オブジェクト操作ツールを利用して、変換エラーになった文書ファイルを採取する手順を次に示します。

< 操作 >

1. レンダリングオプションの変換処理ログ (EDMRDRConv.log) から、変換結果が「CNVERR (レンディション変換プラグインによる変換に失敗)」の文書の OIID を求めます。
2. オブジェクト操作ツールの dbrdowndoc コマンドを利用して、ファイルをダウンロードします。

オブジェクト操作ツールの詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 オブジェクト操作ツール」を参照してください。

(2) レンダリングオプションの機能を利用する方法

レンダリングオプションの機能を利用して、変換エラーになった文書ファイルを採取する手順を次に示します。

< 操作 >

1. レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini) に次に示す設定を追加します。

[log]

errfile_backup_size=10 ;採取するファイルの上限をメガバイト単位で指定

;以降はコメントです。

2. レンディション変換要求コマンドを実行します。
3. 現象が再現した場合、必要に応じてレンディション変換強制停止コマンドでレンダリングオプションを停止します。
4. エラーログを開き、現象再現時に出力された KMBX12105-E のメッセージを探します。
5. KMBX12105-E のメッセージ中に示されたファイルを採取します。
6. 変換エラーになった文書ファイルをすべて採取する場合、次に示すディレクトリ中のファイルをすべてコピーします。

< インストールディレクトリ > %logs%\errfile%

変換エラーになった文書ファイルのファイルサイズの総計が、レンディション変換環境設定ファイルの error_backup_size エントリで指定したサイズを超えた場合、古いファイルから削除され、ファイルサイズの総計が error_backup_size を超えないように調整されます。

変換エラーになった文書ファイルが error_backup_size エントリで指定したファイルサイズよりも大きい場合でもファイルは保存されます。このとき、保存されたファイルの総計は一時的に error_backup_size エントリで指定したサイズを超えます。

7.4 ログの出力形式

この節では、次に示すログの出力形式について説明します。

変換要求受け付けログ (EDMRDRReq.log)

変換結果ログ (EDMRDRRes.log)

変換処理ログ (EDMRDRConv.log)

エラーログ (EDMRDRErr.log)

以降、それぞれのログに共通する基本的な出力形式とそれぞれのログが独自に持つ出力形式について説明します。

7.4.1 基本的な出力形式

変換要求受け付けログ、変換結果ログ、変換処理ログおよびエラーログに共通する基本的な出力形式は次のとおりです。

[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)] ログ本文

基本的な出力形式に含まれる各項目について説明します。

yyyy/mm/dd

出力日付を示しています。

hh:mm:ss.nn

出力時刻 (nn はミリ秒) を示しています。

dddd

タイムゾーン (日本の場合、+0900) を示しています。

pid

ログ出力元のプロセス ID (右詰め、先頭ゼロ削除) を示しています。

tid

ログ出力元のスレッド ID (右詰め、先頭ゼロ削除) を示しています。

ログ本文

ログの種類によって異なります。

7.4.2 変換要求受け付けログの出力形式

変換要求受け付けログの出力形式は次のとおりです。

[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]<tab>受け付け番号<tab>処理コード<tab>可変項目

変換要求受け付けログの出力形式に含まれる各項目について説明します。

[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]

「7.4.1 基本的な出力形式」を参照してください。

<tab>

タブコードを示しています。

受け付け番号

受け付けたレンディション変換要求ごとに採番されるユニークな番号を示しています。値は 1 ~ 2147483647 の範囲で設定されます。

処理コードが REJECT の場合は、0 が設定されます。

処理コード

処理コードの種類を次に示します。

ACCEPT

レンディション変換要求を受け付けたことを示しています。

REJECT

レンディション変換要求を拒否したことを示しています。

REQUEST

レンディション変換要求を実行したことを示しています。

ERROR

何らかのエラーによって、レンディション変換要求を取り消したことを示しています。

可変項目

可変項目の詳細は次のとおりです。

処理コードが ACCEPT, REJECT, ERROR の場合

- 変換先レンディションタイプ
コマンドで指定された変換先レンディションタイプです。

処理コードが REQUEST の場合

なし

7.4.3 変換結果ログの出力形式

変換結果ログの出力形式は次のとおりです。

```
[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]<tab>受け付け番号<tab>処理コード<tab>可変項目  
:
```

変換結果ログの出力形式に含まれる各項目について説明します。

```
[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]
```

「7.4.1 基本的な出力形式」を参照してください。

<tab>

タブコードを示しています。

受け付け番号

受け付けたレンディション変換要求ごとに採番されるユニークな番号を示しています。値は 1 ~ 2147483647 の範囲で設定されます。

処理コード

処理コードの種類を次に示します。

CNVSTART

変換処理を開始したことを示しています。

SEARCHERR

変換対象文書の検索に失敗し、レンディション変換要求を削除したことを示しています。

CNVSTOP

変換処理を中断したことを示しています。

CNVEND

変換処理を終了したことを示しています。

可変項目

処理コードごとに異なる部分です。可変項目の詳細は次のとおりです。

処理コードが CNVSTART または SEARCHERR の場合

変換先レンディションタイプ

上記の項目について説明します。

- 変換先レンディションタイプ
レンディション変換要求コマンドで指定された変換先レンディションタイプです。

処理コードが CNVSTOP または CNVEND の場合

変換先レンディションタイプ <tab> 対象文書数 <tab> 成功文書数 <tab> 失敗文書数

上記の項目について説明します。

- 変換先レンディションタイプ
レンディション変換要求コマンドで指定された変換先レンディションタイプです。
- 対象文書数
変換対象となった文書数（レンディション変換要求コマンドでの変換指示に合致した文書の数）です。
- 成功文書数
変換に成功した文書数です。
- 失敗文書数
変換に失敗した文書数です。

7.4.4 変換処理ログの出力形式

変換処理ログの出力形式は次のとおりです。

```
[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]<tab>受け付け番号<tab>変換結果<tab>文書の  
OIID<tab>"変換元ファイル名"<tab>"変換先ファイル名"  
:
```

変換処理ログの出力形式に含まれる各項目について説明します。

[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]

「7.4.1 基本的な出力形式」を参照してください。

<tab>

タブコードを示しています。

受け付け番号

レンディション変換要求コマンドの変換要求受け付け時に採番されるユニークな番号を示しています。

値は 1 ~ 2147483647 の範囲で設定されます。

変換結果

変換結果を次に示します。

OK

変換に成功したことを示しています。

BADEXT

変換元ファイルの拡張子の変換できない拡張子であったことを示しています。

DLERR

変換元ファイルの取り出しに失敗したことを示しています。

CNVERR

レンディション変換プラグインによる変換処理に失敗したことを示しています。

ULERR

変換先レンディションへの変換先ファイルの登録に失敗したことを示しています。

CHANGED

変換処理中に変換元ファイルが更新されたことを検出したため、レンディション変換を取りやめたことを示しています。

次の場合に、変換元ファイルが更新されたと判断します。

- マスタレンディションのレンディションタイプが変化した場合
- 変換先レンディションの変換フラグの値が「変換要」でなくなった場合
- レンディション変換環境設定ファイルの prop_consistent エントリで指定したプロパティの値が変化した場合

文書の OIID

変換した文書 (DocVersion オブジェクト) の OIID を示しています。

変換元ファイル名

変換元ファイルのファイル名です。パスは含みません。

変換先ファイル名

変換先ファイルのファイル名です。パスは含みません。

7.4.5 エラーログの出力形式

エラーログの出力形式は次のとおりです。

```
[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)] メッセージID メッセージテキスト  
:
```

エラーログの出力形式に含まれる各項目について説明します。

[yyyy/mm/dd hh:mm:ss.nn dddd (pid:tid)]

「7.4.1 基本的な出力形式」を参照してください。

メッセージ ID メッセージテキスト

詳細については、「8. メッセージ」を参照してください。

8

メッセージ

この章では、レンダリングオプションが出力するメッセージについて説明します。

8.1 メッセージの出力先

8.2 メッセージの形式

8.3 メッセージの詳細

8.1 メッセージの出力先

この節では、メッセージの出力先について説明します。

メッセージの出力先を次に示します。

標準エラー出力

レンディション変換要求コマンドの場合、コマンド入力後に標準エラー出力として Windows のコマンドプロンプトにメッセージが表示されます。

各種ログ

すべてのメッセージは各種ログに出力されます。障害発生時の各種ログの確認方法については、「7.1 ログ情報の採取方法とその見方」を参照してください。また、各種ログの出力形式については、「7.4 ログの出力形式」を参照してください。

なお、メッセージのうち、特に重要で、ユーザの運用に支障をきたすものについては Windows のイベントログに出力されます。イベントログの確認方法については、「7.1.1 イベントログの採取方法とその見方」を参照してください。

8. メッセージ

i

メッセージの種類を表します。

I

システムの動作をユーザに通知する種類のメッセージです。

W

処理は続行されますが、障害が発生したので警告する種類のメッセージです。

E

障害が発生したので、処理が中断される種類のメッセージです。

<Y>

メッセージの出力先を表します。

C

Windows のコマンドプロンプトに出力されます。

E

イベントログに出力されます。

L

エラーログに出力されます。

注意

メッセージの出力先は、マニュアル内で使用している付加情報です。したがって、メッセージの出力先は、レンダリングオプションから出力されるメッセージには表示されません。

メッセージテキスト

レンダリングオプションから出力されるメッセージテキストを示します。メッセージテキストに表示される %n (n は挿入句の順番) は、メッセージが出力される状況によって変わる値です。

補足説明

メッセージテキストに対する補足説明を示します。メッセージによっては記述しないものもあります。

(S)

レンダリングオプションの動作または処理を示します。

(O)

ユーザが実施する対策を示します。

8.3 メッセージの詳細

この節では、レンダリングオプションが出力する各メッセージについて説明します。

KMBX10001-E <C>

予期しないエラー (%1) が発生しました。

予期しないエラーが発生しました。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX10002-E <C>

メモリ不足です。

処理に必要なメモリが不足しています。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX10003-E <C>

システムコールでエラーが発生しました。関数名=%1, エラーコード=%2

システムコールでエラーが発生しました。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX10101-E <C>

必須な引数 (%1) が指定されていません。

省略できない引数 (%1) が指定されていません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

引数 (%1) を指定してください。

KMBX10102-E <C>

引数 (%1) の指定に誤りがあります。

8. メッセージ

指定された引数 (%1) の指定に誤りがあります。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

(%1) で示される引数の指定を見直してください。

KMBX10103-E <C>

引数 (%1) は無効です。

指定された引数 (%1) は指定できません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

(%1) で示される引数の指定を見直してください。

KMBX10104-I <C>

レンディション変換要求が受け付けられました。変換要求受付番号=%1

レンディション変換要求が受け付けられました。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

-

KMBX10105-E <C>

データ通信の接続に失敗しました。

データ通信の接続に失敗しました。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

エラーログを参照して原因を調査してください。

KMBX10106-E <C>

レンディション変換要求が受け付けられませんでした。理由コード=%1

レンディションの変換要求がレンダリングオプションに受け付けられませんでした。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

理由コードごとの対処方法は次のとおりです。

理由コード	対処方法
1	スプールされているレンダリング処理要求がシステムの上限を超えました。しばらく時間を置いてから、再度レンダリング処理要求を行ってください。
2	指定された変換元レンディションタイプから変換先レンディションタイプへの変換はできません。該当するプラグインがレンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) に設定されているか確認してください。
3	何らかの要因で要求を受け付けられない状態です。レンダリングオプションのログを参照してください。

KMBX10107-E <C>

変換元レンディションタイプ一覧ファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3 (%1) で示す変換元レンディションタイプ一覧ファイルのアクセスに失敗しました。

次の要因が考えられます。

1. ファイルがありません。
2. ファイルに対するアクセス権がありません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

(%1) で示すファイルがあるかどうか確認してください。

要因 2 の場合

(%1) で示すファイルへのアクセス権があるか確認してください。

KMBX10108-E <C>

変換元レンディションタイプ一覧ファイル (%1) の形式に誤りがあります。

(%1) で示す変換元レンディションタイプ一覧ファイルの形式に誤りがあります。

次の要因が考えられます。

- 変換元レンディションタイプの長さが上限を超えています。
- 変換元レンディションタイプの定義数が上限を超えています。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

変換元レンディションタイプ一覧ファイルの内容を見直してください。

KMBX10109-E <C>

変換対象文書クラス一覧ファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3

(%1) で示す変換対象文書クラス一覧ファイルのアクセスに失敗しました。

次の要因が考えられます。

1. ファイルがありません。
2. ファイルに対するアクセス権がありません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

(%1) で示すファイルがあるかどうか確認してください。

要因 2 の場合

(%1) で示すファイルへのアクセス権があるか確認してください。

KMBX10110-E <C>

変換対象文書クラス一覧ファイル (%1) の形式に誤りがあります。

(%1) で示す変換対象文書クラス一覧ファイルの形式に誤りがあります。

次の要因が考えられます。

- 文書クラス名が一つも指定されていません。
- 文書クラス名の長さが上限を超えています。
- 文書クラス名の定義数が上限を超えています。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

変換元レンディションタイプ一覧ファイルの内容を見直してください。

KMBX10111-E <C>

文書クラス (%1) は存在しません。

変換対象文書クラス一覧ファイルで指定された文書クラス (%1) がありません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

変換対象文書クラス一覧ファイルの指定を見直してください。

KMBX10112-E <C>

文書クラス (%1) は変換対象にできないクラスです。

変換対象文書クラス一覧ファイルで指定された文書クラス (%1) は、このプログラムで処理できない文書クラスです。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

DMA クラスの文書クラス名 (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラスの名称) を指定してください。

KMBX10114-E <C>

環境変数 (%1) が定義されていません。

(%1) で示す環境変数が定義されていないため、レンディション変換要求コマンドを実行できません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

環境変数名ごとの対処方法は次のとおりです。

環境変数名	対処方法
EDMCLASSDEFPATH	環境変数 EDMCLASSDEFPATH に、クラス定義情報ファイルが格納されたディレクトリ名を指定してください。
EDMRCDOCSPACE	環境変数 EDMRCDOCSPACE に、文書空間識別子を指定してください。

KMBX10115-E <C>

クラス定義情報ファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3

(%1) で示すクラス定義情報ファイルにアクセスできません。

次の要因が考えられます。

1. 環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスに誤りがあります。
2. 環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスにクラス定義情報ファイルが格納されていません。
3. 環境変数 EDMRCDOCSPACE に指定した文書空間識別子に誤りがあります。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

環境変数 EDMCLASSDEFPATH の指定を見直してください。

要因 2 の場合

環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスにクラス定義情報ファイルが格納されているか確認してください。

要因 3 の場合

環境変数 EDMRCDOCSPACE に指定した文書空間識別子を見直してください。

KMBX10116-E <C>

変換オプションファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3

(%1) で示す変換オプションファイルにアクセスできません。

次の要因が考えられます。

1. ファイルがありません。
2. ファイルに対するアクセス権がありません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

(%1) で示すファイルがあるかどうか確認してください。

要因 2 の場合

(%1) で示すファイルに対するアクセス権があるかどうか確認してください。

KMBX10117-E <C>

変換オプションファイル(%1)の形式に誤りがあります。

(%1) で示す変換オプションファイルの形式に誤りがあります。

次の要因が考えられます。

- 変換オプションの記述形式に誤りがあります。
- 変換オプションで指定したエントリ名と値の長さの総計が上限を超えました。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

変換オプションファイルの内容を見直してください。

KMBX10222-E <C>

レンダリングオプションが起動できませんでした。

レンディション変換要求コマンドを実行しましたが、レンダリングオプションでエラーが発生したため、起動できません。

(S)

コマンドを終了します。

(O)

エラーログを参照し、その問題を解決してください。

KMBX10230-I <C>

レンダリングオプションを停止しました。

レンディション変換強制停止コマンドによって、レンダリングオプションを停止しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

-

KMBX10231-I <C>

レンダリングオプションの停止を要求しました。

レンディション変換強制停止コマンドによって、レンダリングオプションの停止を要求しました。

このメッセージが表示されてもレンダリングオプションが完全に停止していない場合がありますので、注意してください。

(S)
処理を続行します。

(O)

-

KMBX10232-W <C>

レンダリングオプションはすでに停止しています。

レンディション変換強制停止コマンドを実行しましたが、すでにレンダリングオプションは停止していません。

(S)
処理を続行します。

(O)

-

KMBX11001-E <E , L>

予期しないエラー (%1) が発生しました。

予期しないエラーが発生しました。

(S)
レンダリングオプションを停止します。

(O)
システム管理者に連絡してください。

KMBX11002-E <E , L>

メモリ不足です。

処理に必要なメモリが不足しています。

(S)
レンダリングオプションを停止します。

(O)
システム管理者に連絡してください。

KMBX11003-E <E , L>

システムコールでエラーが発生しました。関数名=%1, エラーコード=%2

システムコールでエラーが発生しました。

(S)
レンダリングオプションを停止します。

(O)
システム管理者に連絡してください。

KMBX11006-E <E, L>

データ通信の応答でエラーが通知されました。通信種別=%1, エラーコード=%2

レンディション変換処理で異常が発生しました。
エラーが発生しているおそれがあります。

- (S) 処理を続行できない場合を除いて、処理を続行します。
- (O) エラーログを参照し、その問題を解決してください。

KMBX11007-E <E, L>

通信データエラーが発生しました。機能 ID=0x%1, 送信タイプ=0x%2, 詳細=%3

通信データの不正を検出しました。

- (S) 処理を続行できない場合を除いて、処理を続行します。
- (O) システム管理者に連絡してください。

KMBX11008-E <E, L>

通信回線の切断を検出しました。

通信回線の切断を検出しました。エラーが発生しているおそれがあります。

- (S) 処理を続行できない場合を除いて、処理を続行します。
- (O) エラーログを参照し、その問題を解決してください。

KMBX11009-E <E, L>

通信のタイムアウトを検出しました。

通信のタイムアウトを検出しました。エラーが発生しているおそれがあります。

- (S) 処理を続行できない場合を除いて、処理を続行します。
- (O) エラーログを参照し、その問題を解決してください。

KMBX11102-E <L>

環境設定ファイル(%1)の指定に誤りがあります。セクション=%2, エントリ=%3

- (%1) で示す環境設定ファイルの指定に形式上の誤りがあります。
- %2, %3 で示される個所の指定に誤りがあります。

- (S) レンダリングオプションを停止します。

(O)

環境設定ファイルの指定を見直してください。

KMBX11103-E <L>

環境設定ファイル(%1)の必須項目が指定されていません。セクション=%2, エントリ=%3

(%1)で示す環境設定ファイルの指定に誤りがあります。

%2, %3で示される個所が指定されていません。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

環境設定ファイルの指定を見直してください。

KMBX11111-E <L>

スプールの変換要求数が上限に達しているため、変換要求を受け付けることができません。

スプールの変換要求数が上限に達しているため、変換要求を受け付けることができません。

(S)

処理を続行します。

(O)

しばらく時間を置いてから、再度変換要求を行ってください。

KMBX11112-I <L>

レンディション変換要求コマンドを受付けました。変換要求受付番号=%1, スプールの残エントリ数=%2

レンディション変換要求コマンドからの変換要求を受け付けました。

(S)

処理を続行します。

(O)

変換要求の詳細については、変換要求受け付けログを参照してください。

KMBX11113-E <L>

レンディション変換要求コマンドの受付に失敗しました。

レンディション変換要求コマンドからの変換要求を受け付けられません。

次の要因が考えられます。

1. レンディション変換要求コマンドで指定されたレンディションタイプに誤りがあります。
2. レンダリングオプションの起動でエラーが発生しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

レンディション変換要求コマンドの引数の指定を見直してください。

要因 2 の場合

このメッセージの直前に出力された、レンダリングオプションのエラーメッセージを調査してください。

KMBX11204-E <E, L>

DocumentBroker サーバでエラーが発生しました。システム管理者に連絡してください。CORBA の例外名=%1, SQLCODE=%2, SQLSTATE=%3, major_code=%4, minor_code=%5, Method=%6, DetailErrorMessage=%7

DocumentBroker サーバでエラーが発生しました。

CORBA の例外名は、major_code=2 のときだけ出力されます。

SQLCODE および SQLSTATE は、major_code=4 のときだけ出力されます。

(S)

変換処理を中断します。レンダリングオプションは停止しません。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX11251-I <E, L>

レンダリングオプションを起動しました。

レンダリングオプションを起動しました。

(S)

-

(O)

-

KMBX11252-I <E, L>

レンダリングオプションを停止しました。

レンダリングオプションを停止しました。

(S)

-

(O)

-

KMBX11253-E <E, L>

レンダリングオプションの起動に失敗しました。

エラーの発生によってレンダリングオプションが起動できません。

エラーの要因はこのメッセージの直前のメッセージで示されます。

(S)

-

(O)

直前に出力されたメッセージに従って対処してください。

KMBX11254-E <E, L>

レンダリングオプションを強制終了しました。

処理を続行できないエラーが発生したため、レンダリングオプションを強制終了しました。
エラーの要因はこのメッセージの直前のメッセージで示されます。

(S)

-

(O)

直前に出力されたメッセージに従って対処してください。

KMBX11302-E <L>

環境設定ファイル(%1)の設定に誤りがあります。セクション=%2, エントリ=%3

(%1)で示す環境設定ファイルの設定に形式上の誤りがあります。

%2, %3で示される個所の設定に誤りがあります。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

環境設定ファイルの設定を見直してください。

KMBX11303-E <L>

環境設定ファイル(%1)の必須項目が指定されていません。セクション=%2, エントリ=%3

(%1)で示す環境設定ファイルの設定に誤りがあります。

%2, %3で示される個所の設定がされていません。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

環境設定ファイルの設定を見直してください。

KMBX11304-E <L>

文書空間識別子(%1)が不正です。

環境設定ファイルで指定された文書空間識別子の形式が不正です。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

文書空間識別子の指定を見直してください。

KMBX11307-E <L>

一時ファイル(%1)の作成に失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3

一時ファイルの作成に失敗しました。

次の要因が考えられます。

8. メッセージ

1. ディスク容量が不足しています。
2. 一時ファイルを作成するキューファイル格納ディレクトリに対するアクセス権がありません。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

ディスク容量が不足していないか確認してください。

要因 2 の場合

キューファイル格納ディレクトリに対するアクセス権があるか確認してください。

KMBX11308-E <L>

一時ファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数=%2, エラーコード=%3

一時ファイルのアクセスに失敗しました。

次の要因が考えられます。

1. ディスク容量が不足しています。
2. 一時ファイルが破損しています。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

ディスク容量が不足していないか確認してください。

要因 2 の場合

キューファイル格納ディレクトリに (%1) の一時ファイルが存在する場合は, (%1) の一時ファイルを削除してください。そのあと, 再度レンディション変換要求を行ってください。

KMBX11309-W <L>

変換対象文書数が処理の上限を超えました。変換対象文書 (%1) 件のうち, (%2) 件を変換対象とします。

変換対象文書数が処理の上限を超えたため, すべての変換対象文書を変換対象にすることができません。

(%2) 件だけを変換対象とします。

(S)

処理を続行します。

(O)

残りの変換対象文書を変換するためには, 再度同じ条件で変換要求を行ってください。

KMBX11310-E <L>

一時ファイル (%1) の形式が不正です。詳細=%2

(%1) で示す一時ファイルの形式の不正を検出しました。一時ファイルが破損しています。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

(%1) で示す一時ファイルを削除したあと、再度変換要求を行ってください。

KMBX11311-E <L>

SQL 情報ファイル (%1) の設定に誤りがあります。セクション =%2, 詳細 =%3

(%1) で示す環境設定ファイルの %2 で示される個所に誤りがあります。

%3 に詳細が表示されます。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

詳細ごとの対処方法は次のとおりです。

詳細	対処
文書クラスが存在しません	文書クラスには、存在する文書クラスを指定してください。
処理できない文書クラスです	文書クラスには、DMA クラスの文書クラス名 (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラスの名称) を指定してください。

KMBX11312-E <L>

環境変数 (%1) が定義されていません。

(%1) で示す環境変数が定義されていません。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

環境変数名ごとの対処方法は次のとおりです。

環境変数名	対処方法
EDMCLASSDEFPATH	環境変数 EDMCLASSDEFPATH に、クラス定義情報ファイルが格納されたディレクトリ名を指定してください。
EDMRCDOSPACE	環境変数 EDMRCDOSPACE に、文書空間識別子を指定してください。

KMBX11313-E <L>

クラス定義情報ファイル (%1) のアクセスに失敗しました。関数 =%2, エラーコード =%3

(%1) で示すクラス定義情報ファイルにアクセスできません。

次の要因が考えられます。

1. 環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスに誤りがあります。
2. 環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスにクラス定義情報ファイルが格納されていません。
3. 環境変数 EDMRCDOSPACE に指定した文書空間識別子に誤りがあります。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

環境変数 EDMCLASSDEFPATH の指定を見直してください。

要因 2 の場合

環境変数 EDMCLASSDEFPATH に指定したパスにクラス定義情報ファイルが格納されているか確認してください。

要因 3 の場合

環境変数 EDMRCDOCSPACE に指定した文書空間識別子を見直してください。

KMBX12001-E <E , L>

プラグイン (%1) で予期しないエラー (%2) が発生しました。

レンディション変換プラグインで予期しないエラーが発生しました。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX12002-E <E , L>

メモリ不足です。

レンディション変換プラグインの処理に必要なメモリが不足しています。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX12003-E <E , L>

システムコールでエラーが発生しました。関数名=%1, エラーコード=%2

プラグインの処理中に, システムコールでエラーが発生しました。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX12051-I <L>

プラグイン (%1) が利用可能です。

(%1) で示すレンディション変換プラグインのロードが成功し, 利用できる状態となりました。

(S)

-

(O)

KMBX12101-E <E, L>

プラグイン (%1) の初期化に失敗しました。エラーコード=%2, 詳細=%3
(%1) で示すレンディション変換プラグインの初期化に失敗しました。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

エラーコードごとの対処方法は次のとおりです。

エラーコード	対処方法
10	レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) 中の変換オプションの指定に誤りがあります。%3 の内容に基づいて環境を見直してください。
11	レンディション変換プラグインの実行環境が不正のため、初期化できません。%3 の内容に基づいて環境を見直してください。

KMBX12104-E <L>

プラグイン (%1) の変換処理でエラーが発生しました。変換元ファイル=%2, 変換先ファイル=%3, エラーコード=%4, 詳細=%5

(%1) で示すプラグインの変換処理でエラーが発生しました。

次の要因が考えられます。

1. レンディション変換プラグインの動作に必要なアプリケーションプログラムがインストールされていません。
2. PDF 変換プラグインを使用している場合、PDF 変換プラグインで制限されている文書を変換しようとした。
3. PDF 変換プラグインで障害が発生しました。

(S)

この文書の変換処理を取りやめ、次の文書の変換処理を実行します。
処理を続行できないエラーの場合、レンダリングオプションを停止します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

前提プログラムが正しくインストールされているか確認してください。

要因 2 の場合

1. 変換元の文書ファイルを見直して、制限事項に該当しないように修正してください。
2. 再度、該当文書を変換する場合は、「4.2.3 レンディション変換でエラーになった文書を再びレンディション変換する場合」に従って「レンディション変換エラー」状態を解除したあと、レンディション変換要求コマンドを実行してください。

要因 3 の場合

%5 に PDFstaff のエラーメッセージが出力されます。PDFstaff のマニュアルを参照してエラーの原因を調査し、必要な対処をしてください。

KMBX12105-E <L>

プラグイン (%1) の変換処理でエラーとなったファイルを保存しました。ファイル=%2
変換処理でエラーとなった変換元ファイルを %2 で示すファイルに保存しました。
このメッセージは、エラー KMBX12104-E に続けて出力されます。

(S)

この文書の変換処理を取りやめ、次の文書の変換処理を実行します。

(O)

保存したファイルが、この製品でサポートされている形式が確認してください。

KMBX12106-E <L>

プラグイン (%1) はこの拡張子を処理できません。変換元ファイル=%2
%2 で示すファイルの拡張子が、レンディション変換プラグイン (%1) のサポートするファイルの拡張子
と異なるおそれがあります。

(S)

この文書の変換処理を取りやめ、次の文書の変換処理を実行します。

(O)

ファイルの拡張子が正しいか確認してください。

再度、該当文書を変換する場合は、「4.2.3 レンディション変換でエラーになった文書を再びレン
ディション変換する場合」に従って「レンディション変換エラー」状態を解除したあと、レンディ
ション変換要求コマンドを実行してください。

KMBX12107-E <L>

プラグイン (%1) はこの変換オプションを処理できません。詳細=%2
%2 で示す変換オプションの指定に誤りがあります。

(S)

変換処理を中断します。レンダリングオプションは停止しません。

(O)

%2 の内容に基づいて、レンディション変換要求コマンドで指定した変換オプションを見直してくだ
さい。

KMBX12201-E <L>

プラグイン (%1) の UOC の実行に失敗しました。詳細=%2
%2 で示す理由によって UOC を実行できません。

次の要因が考えられます。

1. UOC の実行ファイルへのアクセス権がありません。
2. ディスク容量が不足しています。
3. UOC の実行ファイルがありません。
4. UOC が正しい情報を返していません。

(S)

レンダリングオプションを停止します。

(O)

要因に応じて次のとおりに対処してください。

要因 1 の場合

(%1) で示すレンディション変換プラグインで定義した UOC の実行ファイルへのアクセス権があるかどうか確認してください。

要因 2 の場合

ディスク容量が不足していないかどうか確認してください。

要因 3 の場合

(%1) で示すレンディション変換プラグインで定義した UOC の実行ファイルが存在するかどうか確認してください。

要因 4 の場合

UOC の動作が正しく定義されているかどうか、UOC の処理内容を見直してください。

KMBX12202-E <L>

プラグイン (%1) の UOC でエラーが発生しました。UOC のリターンコード=%2, 詳細=%3

(%1) で示すレンディション変換プラグインの UOC でエラーが発生しました。

(S)

この文書の変換処理を取りやめ、次の文書の変換処理を実行します。

UOC のリターンコードが処理を続行できない内容の場合、レンダリングオプションを停止します。

(O)

%3 で示す詳細情報メッセージに従って対処してください。

KMBX19001-E <C, E, L>

メッセージテキストの組み立てに失敗しました。メッセージ ID=KMBX%1, 詳細=%2

メッセージテキストの組み立てに失敗しました。組み立てようとしたメッセージの番号は %1 です。

(S)

処理を続行します。

(O)

システム管理者に連絡してください。

KMBX19002-E <C, E, L>

動作環境が不正です。詳細=%1

動作環境が不正なため、処理が続行できません。

(S)

処理を終了します。

(O)

要因と対処方法は次のとおりです。

要因	対処方法
インストールディレクトリ 取得失敗	レジストリ情報の取得に失敗しました。正しくインストールされていないおそれがあります。 この製品を再度インストールしてください。

付録

付録 A レン디션変換前後の変換フラグおよび状態フラグの遷移

付録 B JP1/AJS2 を使用してレン디션変換を自動化するための環境設定

付録 C 複数の文書空間が存在するシステムでのレン디션変換

付録 D ユーザ定義プラグインの設計と作成方法

付録 E UOC の設計と作成方法

付録 F 用語解説

付録 A レンディション変換前後の変換フラグおよび状態フラグの遷移

ここでは、レンディション変換の処理前後の変換先レンディションの変換フラグおよび状態フラグの値の遷移について説明します。

変換先レンディションの変換フラグ（dbrProp_RenditionStatus プロパティの上位 2 バイト）および状態フラグ（dbrProp_RenditionStatus プロパティの下位 2 バイト）の値は、レンディション変換の実行結果によって遷移します。変換フラグおよび状態フラグの遷移を次の表に示します。

表 A-1 変換フラグおよび状態フラグの遷移

変換前の値	変換結果ごとの値		
	変換成功	変換制御失敗 ¹	変換処理失敗 ²
0x00010001 (変換要 サブ空)	0x00000002 (変換不要 マスタ / サブ一致)	0x00010001 (変換要 サブ空)	0x00020001 (変換エラー サブ空)
0x00010004 (変換要 マスタ / サブ不一致)	0x00000002 (変換不要 マスタ / サブ一致)	0x00010004 (変換要 マスタ / サブ不一致)	0x00020004 (変換エラー マスタ / サブ不一致)

(凡例)

変換要：変換フラグの DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED (Java クラスライブラリの場合)、レンダリングオプションのレンディション変換対象となることを示す値です。

変換不要：変換フラグの DBR_RENDSTATUS_CONVERT_NOTREQUIRED (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_NOTREQUIRED (Java クラスライブラリの場合)、レンダリングオプションのレンディション変換対象とならないことを示す値です。

変換エラー：変換フラグの DBR_RENDSTATUS_CONVERT_ERROR (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_ERROR (Java クラスライブラリの場合)、レンディション変換要求がエラーで処理されなかったことを示す値です。レンダリングオプションのレンディション変換対象から外されます。

サブ空：状態フラグの DBR_RENDSTATUS_NO_SUBREND (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_NO_SUBREND (Java クラスライブラリの場合)、変換先レンディションの文書ファイルが未登録の状態であることを示す値です。

マスタ / サブ不一致：状態フラグの DBR_RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE (Java クラスライブラリの場合)、マスタレンディションの文書ファイルが更新され、変換先レンディションの文書ファイルの内容がマスタレンディションの文書ファイルの内容と不一致になっている状態を示す値です。

マスタ / サブ一致：状態フラグの DBR_RENDSTATUS_SUBREND_EXIST (C++ クラスライブラリの場合) または DbjDef.RENDSTATUS_SUBREND_EXIST (Java クラスライブラリの場合)、マスタレンディションの文書ファイルと変換先レンディションの文書ファイルの内容が一致している状態を示す値です。

注 1

レンダリングオプションに制御が至る前に失敗した場合です。

注 2

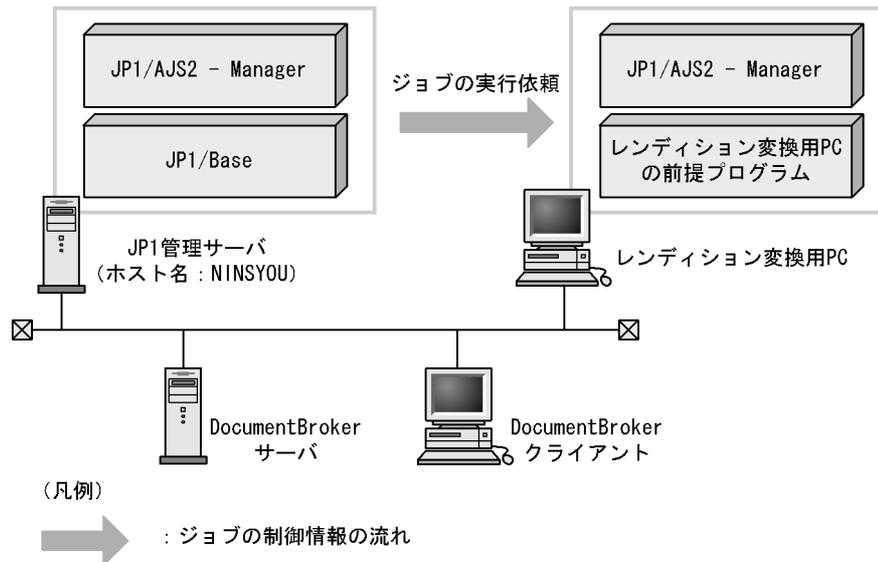
レンダリングオプションで、レンディション変換プラグインによる変換処理に失敗した場合です。

付録 B JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化するための環境設定

ここでは、JP1/AJS2 を使用して、レンディション変換を自動化するために必要な環境設定について説明します。

ここでは、次に示すシステム構成で JP1/AJS2 と連携することを前提に説明します。

図 B-1 JP1/AJS2 と連携する場合のシステム構成例



環境設定の流れを次に示します。

1. OS ユーザの登録
2. 「JP1/AJS2 サービス」のアカウントの設定
3. JP1/AJS2 の環境設定
4. ジョブネットの定義

JP1/AJS2 の環境設定の詳細については、マニュアル「JP1 Version 6 JP1/Automatic Job Management System 2 運用・操作編」を参照してください。

注意事項

- JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化できるのは、PDF 変換プラグインによる変換を実行する場合です。
- レンディション変換実行中のレンディション変換用 PC をログオフしないようにしてください。

付録 B.1 OS ユーザの登録

JP1 管理サーバおよびレンディション変換用 PC に、Administrators 権限を持つ次のユーザを登録します。

JP1 用プライマリユーザ

OS ユーザ名: Administrator
パスワード: hitachi

JP1 用セカンダリユーザ

OS ユーザ名 : hitachi

パスワード : hitachi

上記のユーザを登録したら、それぞれのユーザに次の権限が与えられているかどうか確認してください。

- レンディション変換で使用するアプリケーションプログラムがすべて実行できる権限
- レンディション変換に使用する PostScript プリンタで印刷できる権限

付録 B.2 「JP1/AJS2 サービス」のアカウントの設定

レンディション変換用 PC で、「JP1/AJS2 サービス」のアカウントを次のとおり設定します。

スタートアップの種類

手動

ログオン

「アカウント」: hitachi

「パスワード」: hitachi

付録 B.3 JP1/AJS2 の環境設定

JP1/AJS2 の環境設定の流れを次に示します。

1. 認証サーバの指定
2. JP1 ユーザの登録
3. JP1 資源グループおよび JP1 権限レベルの設定
4. ユーザマッピングの設定

注 レンディション変換用 PC では設定不要です。

(1) 認証サーバの指定

JP1/Base のユーザ認証機能を使用するために、認証サーバを指定します。

認証サーバの指定手順を次に示します。

1. 「スタート」メニューから「プログラム」 - 「JP1_Base」 - 「環境設定」を選択します。
「JP1/Base 環境設定」ダイアログが表示されます。
2. 「認証サーバ」タブをクリックします。
3. 「認証サーバの検索順序」の「追加」ボタンをクリックします。
「認証サーバ」ダイアログが表示されます。
4. 「認証サーバ名」に、JP1 管理サーバのホスト名「NINSYOU」を入力し、「OK」ボタンをクリックします。
指定した認証サーバは、「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「認証サーバ名」フィールドに表示されます。
• 「認証サーバ名」ダイアログでは、「認証サーバを閉塞状態に設定する」にチェックマークを付ける必要はありません。

(2) JP1 ユーザの登録

JP1 ユーザの登録は、自ホストを認証サーバに指定した場合だけ必要になります。したがって、レンディション変換用 PC では、JP1 ユーザの登録は不要です。

JP1 ユーザの登録手順を次に示します。

1. 「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「認証サーバ」タブをクリックします。
2. 「JP1 ユーザ」の「追加」ボタンをクリックします。
「JP1 ユーザ」ダイアログが表示されます。
3. 「JP1 ユーザ名」および「パスワード」を入力します。
「JP1 ユーザ名」および「パスワード」には、「jp1admin」を入力してください。
4. 「OK」ボタンをクリックします。
登録したユーザ名が、「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「JP1 ユーザ」フィールドに表示されます。

(3) JP1 資源グループおよび JP1 権限レベルの設定

登録した JP1 ユーザに対して、JP1/AJS2 で処理を定義・実行するための権限レベルを設定します。権限レベルを設定するには、JP1 ユーザに対して「JP1 資源グループ」および「JP1 権限レベル」を定義します。なお、レンディション変換用 PC では、JP1 資源グループおよび JP1 権限レベルの設定は不要です。

JP1 資源グループおよび JP1 権限レベルの設定手順を次に示します。

1. 「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「認証サーバ」タブをクリックします。
2. 「JP1 ユーザ」フィールドで、権限を設定する JP1 ユーザ名「jp1admin」を選択します。
3. 「JP1 資源グループ別権限レベル」の「追加」ボタンをクリックします。
「JP1 資源グループ詳細」ダイアログが表示されます。
4. 「JP1 資源グループ」に「*」を入力します。
 - 「*」(アスタリスク) は半角で入力してください。
5. 「所有しない権限」で、すべての権限レベル名を選択し、「<- 追加」ボタンをクリックします。
すべての権限レベル名が「所有する権限」フィールドに表示されます。
6. 「OK」ボタンをクリックします。
設定した JP1 資源グループ名と権限レベル名が、「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「JP1 資源グループ別権限レベル」フィールドに表示されます。

(4) ユーザマッピングの設定

登録した JP1 ユーザに対して、OS ユーザをマッピングします。

ユーザマッピングの設定手順を次に示します。

1. 「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「ユーザマッピング」タブをクリックします。
2. 「パスワード管理」の「設定」ボタンをクリックします。
「パスワード管理」ダイアログが表示されます。
3. 「新規登録」ボタンをクリックします。
「新規登録」ダイアログが表示されます。
4. 「OS ユーザ名」および「パスワード」を入力して、「OK」ボタンをクリックします。

OS ユーザ情報が設定され、「パスワード管理」ダイアログに戻ります。登録した OS ユーザ名が「登録ユーザ名」フィールドに表示されます。

- JP1 用プライマリユーザおよび JP1 用セカンダリユーザを登録してください。それぞれのユーザの OS ユーザ名およびパスワードについては、「付録 B.1 OS ユーザの登録」を参照してください。
5. 「終了」ボタンをクリックします。
「パスワード管理」ダイアログが閉じ、「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「ユーザマッピング」タブに戻ります。
 6. 「JP1 ユーザ」の「追加」ボタンをクリックします。
「JP1 ユーザ」ダイアログが表示されます。
 7. 「JP1 ユーザ名」および「サーバホスト名」を入力します。
 - 「JP1 ユーザ名」には、「jp1admin」を入力してください。
 - 「サーバホスト名」には、「*」を入力してください。なお、「*」(アスタリスク)は半角で入力してください。
 8. 「OK」ボタンをクリックします。
「マッピング OS ユーザー詳細」ダイアログが表示されます。
 9. 「マッピングしない OS ユーザー」フィールドに表示されている OS ユーザ「Administrator」を選択して、「<- 追加」ボタンをクリックします。
選択した OS ユーザ「Administrator」が、「マッピングする OS ユーザ」フィールドに表示されます。
 10. 「OK」ボタンをクリックします。
JP1 ユーザ名「jp1admin」とマッピングした OS ユーザ名「Administrator」が、「JP1/Base 環境設定」ダイアログの「マッピング OS ユーザー一覧」フィールドに表示されます。

付録 B.4 ジョブネットの定義

JP1/AJS2 では、複数ジョブの実行順序をジョブネットとして定義して、ジョブを自動実行します。ジョブネットとは、実行順序を関連づけたジョブの集まりです。

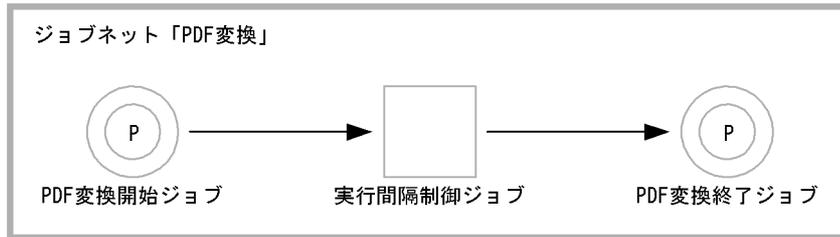
レンディション変換を自動化するためのジョブネットの定義について説明します。

通常、レンディション変換のために、次の順序でコマンドを実行します。

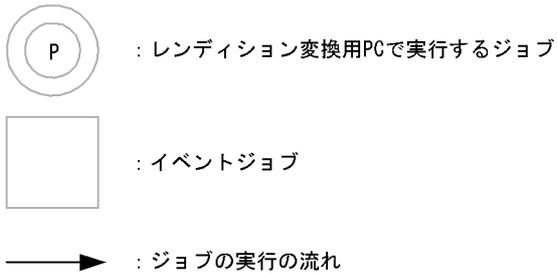
1. PDF 形式へのレンディション変換要求コマンド (EDMRDRReq) を実行する
2. レンディション変換強制停止コマンド (EDMRDRStop) を実行する

これらの操作を定義したジョブネットの概要を次の図に示します。なお、ジョブネットでは、複数の文書ファイルを変換できるように、レンダリングオプションを起動してから 4 時間後に、レンダリングオプションを停止するように定義しています。この間、レンディション変換要求に応じて、レンディション変換が実行されます。

図 B-2 レンディション変換の操作を定義したジョブネットの概要



(凡例)



ジョブネットの各ジョブには、次の属性を定義します。

- PDF 変換開始ジョブ
RendStart.bat¹ を実行するように定義します。
- 実行間隔制御ジョブ
4 時間の待ち時間を定義します。
- PDF 変換終了ジョブ
RendStop.bat² を実行するように定義します。

注 1 RendStart.bat には、レンディション変換要求コマンド (EDMRDRReq) を実行するように定義します。

注 2 RendStop.bat には、レンディション変換強制停止コマンド (EDMRDRStop) を実行するように定義します。

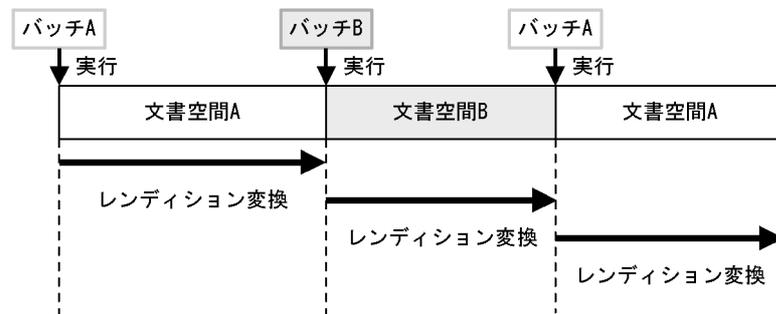
なお、ジョブネットは、JP1/AJS2 - View またはコマンドを使って定義します。ジョブネットの定義の詳細については、マニュアル「JP1 Version 6 JP1/Automatic Job Management System 2 運用・操作編」を参照してください。

付録 C 複数の文書空間が存在するシステムでのレンディション変換

複数の文書空間が存在するシステムでレンディション変換する場合、文書空間ごとに実行する必要があります。そのため、複数の文書空間が存在するシステムでは、レンディション変換用 PC の設定を変更して文書空間を切り替えながら、レンディション変換を実行します。

レンディション変換する文書空間は、環境変数 EDMRCDOCSPACE の設定とレンディション変換環境設定ファイルの設定を変更して切り替えます。この処理は、レンダリングオプションが提供するコマンドを組み合わせたバッチファイルで実行します。例えば、文書空間 A と文書空間 B が存在するシステムの場合、次の図に示すようにバッチファイルを実行することで、レンディション変換する文書空間を切り替えます。

図 C-1 バッチファイルを使用したレンディション変換の実行例



文書空間 A でレンディション変換したあと、文書空間 B でレンディション変換する場合は、バッチファイル B を実行して、レンディション変換する文書空間を文書空間 B に切り替えます。

(1) バッチファイルの構成例

レンディション変換する文書空間を、文書空間 A から文書空間 B に切り替える場合のバッチファイル (バッチファイル B) の構成を次に示します。

```
<レンディション変換強制停止コマンド (EDMRDRStop) >
set EDMRCDOCSPACE=<文書空間Bの文書空間識別子>
copy <文書空間Bの文書空間識別子が記述されたレンディション変換環境設定ファイル> <RenderingOptionのインストールディレクトリ>¥config¥EDMRDRSetup.ini
<レンディション変換要求コマンド (EDMRDRReq) >
```

<処理の流れ>

1. 現在実行中のレンディション変換処理を強制的に停止します。
2. レンディション変換用 PC の設定を変更して文書空間を切り替えます。
 - ・環境変数 EDMRCDOCSPACE の設定を変更します。
 - ・文書空間 B の文書空間識別子を記述したレンディション変換環境設定ファイルを、<RenderingOption のインストールディレクトリ> ¥config¥EDMRDRSetup.ini に上書きします。
3. レンディション変換処理を開始します。

レンディション変換環境設定ファイルの記述形式については、「6.1.2 レンディション変換環境設定ファイル (EDMRDRSetup.ini)」を参照してください。

レンディション変換強制停止コマンド、およびレンディション変換要求コマンドの詳細については、「5.3 コマンドの文法」を参照してください。

(2) 注意事項

複数の文書空間が存在するシステムでレンディション変換するときは、次のことに注意してください。

- 環境変数 EDMCLASSDEFPATH で指定したディレクトリに、すべての文書空間のクラス定義情報ファイル（文書空間識別子 .ini）があることを確認してください。環境変数 EDMCLASSDEFPATH で指定するディレクトリについては、「2.4 環境変数の設定」を参照してください。
- バッチファイルおよびレンディション変換環境設定ファイルは、レンディション変換する文書空間ごとに作成してください。
- バッチファイルは、レンディション変換が完了するのに十分な間隔を空けて実行してください。

付録 D ユーザ定義プラグインの設計と作成方法

ここでは、ユーザ定義プラグインの設計と作成方法について説明します。

PDF 変換プラグインによる標準のレンディション変換以外のレンディション変換を実現したい場合は、ユーザ定義プラグインを作成してください。

付録 D.1 ユーザ定義プラグインの処理概要

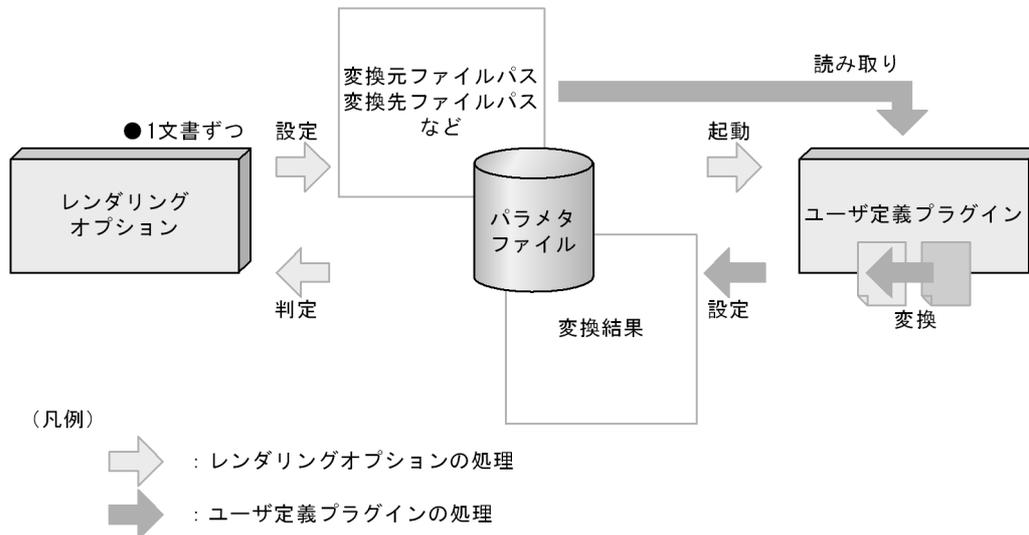
ユーザ定義プラグインは、レンダリングオプションから一文書のレンディション変換要求ごとに呼び出されます。作成するユーザ定義プラグインのプログラムに組み込む必要のある処理の流れは、次のとおりです。

1. 変換元ファイルを読み込んで変換先ファイルへの変換処理を行う
2. 変換結果をパラメタファイル（Windows 初期設定ファイル形式）に書き込む
3. プログラムを終了する

レンダリングオプションとのインターフェースは次のとおりです。

1. 変換元ファイルパスや変換先ファイルパスなどの情報をレンダリングオプションからパラメタファイルとして受け取って起動する
2. パラメタファイルの設定内容に基づいて変換元ファイルを変換先ファイルに変換する
3. 変換結果をパラメタファイルに書き込む
4. レンダリングオプションはパラメタファイルに書き込まれた情報で変換結果を判定し、エラーメッセージをログファイルに出力するか、レンディション変換の処理を続行するか判断する

図 D-1 ユーザ定義プラグインの処理の流れ



付録 D.2 ユーザ定義プラグインの作成に使用できる言語

ユーザ定義プラグインのプログラムの作成に使用できる言語は次の 2 種類です。

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0

これらどちらかの言語でコーディングしてコンパイルし、Win32 実行形式ファイル（*.exe）として作成し

てください。

次のディレクトリに、各言語で作成したユーザ定義プラグインのサンプルプログラム（変換処理部分を除く基本的な処理を記述したソースファイル、コンパイルに必要なプロジェクトファイルなど）が格納されています。

Visual Basic 5.0 用

<インストールディレクトリ> %sample%plugin%vb5%

Visual C++ 5.0 用

<インストールディレクトリ> %sample%plugin%vc5%

このサンプルプログラムには次の処理が記述されています。

- ユーザ定義プラグインの引数のチェック
- パラメタファイルの内容の読み取り
- 変換処理の前準備
- パラメタファイルへの処理結果の書き込み

変換元ファイルから変換先ファイルへの変換処理の部分を設計して、このサンプルプログラムに組み込んでください。

Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 を使用する場合は、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でプロジェクトファイルを開き、コンパイルしてください。

付録 D.3 ユーザ定義プラグインのインターフェースの詳細

ここでは、ユーザ定義プラグインのインターフェースの詳細について説明します。

(1) 入力情報

レンダリングオプションは、ユーザ定義プラグインを起動する際に、引数にパラメタファイルのファイルパスをフルパスで設定してユーザ定義プラグインに渡します。レンダリングオプションが設定するパラメタファイルの内容は次のとおりです。

```
[UserPlugin]
infile=変換元ファイルパス
outfile=変換先ファイルパス
plugindefffile=レンディション変換プラグイン設定ファイルパス
plugindefsection=ユーザ定義プラグイン定義のセクション名
[Options]
変換オプション
```

ユーザ定義プラグインは、infile エントリに設定された変換元ファイルを読み込み、outfile エントリに設定された変換先ファイルを作成する必要があります。

各エントリに設定される値は次のとおりです。

- infile エントリには、変換元ファイルのファイルパスがフルパスで設定されます。
- outfile エントリには、変換先ファイルのファイルパスがフルパスで設定されます。
- plugindefffile エントリには、レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) のファイルパスがフルパスで設定されます。
- plugindefsection エントリには、plugindefffile エントリで設定されたレンディション変換プラグイン設定ファイルのユーザ定義プラグインを定義しているセクションのセクション名が設定されます。
- Options セクションには、レンディション変換要求コマンドの -o オプションで指定した変換オプション

が設定されます。レンディション変換要求コマンドで `-o` オプションを指定しなかった場合、このセクションは設定されません。

(2) 出力情報

変換処理を完了したあと、ユーザ定義プラグインがパラメタファイルに書き込む内容は、次のとおりにしてください。

```
[UserPlugin]
outfile=変換先ファイルパス
errorcode=変換結果コード
errmsg=エラーメッセージ
```

各エントリに設定する必要がある値は、次のとおりです。

- `outfile` エントリには、変換処理で作成した変換先ファイルのファイルパスをフルパスで設定してください。
- `errorcode` エントリには、結果に応じて変換結果コードを設定し、エラーの場合は `errmsg` エントリにエラーメッセージを設定してください。
`errorcode` エントリに設定できる変換結果コードを次の表に示します。

表 D-1 ユーザ定義プラグインの変換結果コード

変換結果コード	意味	レンダリングオプションの動作と変換フラグの状態
0	正常終了	変換先レンディションに変換先ファイルを登録します。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換不要」に遷移します。
1	変換処理を続行できるエラー	ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、次の文書の変換処理に移ります。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
2		ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、次の文書の変換処理に移ります。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。
3	変換処理を続行できないエラー	ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、処理中のレンディション変換要求を中断します。次のレンディション変換要求コマンドがある場合は、次のレンディション変換要求を続けて処理します。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
4		ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、処理中のレンディション変換要求を中断します。次のレンディション変換要求コマンドがある場合は、次のレンディション変換要求を続けて処理します。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。
5	レンダリングオプションが処理を続行できないエラー	ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、レンダリングオプションを終了します。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
6		ユーザ定義プラグインが <code>errmsg</code> エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、レンダリングオプションを終了します。変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。

0 ~ 6 以外の値が設定されると、レンダリングオプションは 5 が設定されたものと仮定して動作します。

ユーザ定義プラグインが設定する変換結果コードは、次のルールに従って指定することを推奨します。

- 変換に成功した場合、0 を設定します。
- 変換に失敗しても、再実行すると変換に成功する見込みがある場合、1, 3 または 5 を設定します。
- 変換元ファイルの内容に問題があり、再実行しても変換が成功する見込みのない場合、2, 4 または 6 を設定します。
- 変換オプションの指定に誤りがあり、レンディション変換要求を処理できない場合、3 または 4 を設定します。
- メモリ不足、ハードディスク容量不足、動作環境不正など、処理の続行が困難な場合、5 または 6 を設定します。

付録 D.4 ユーザ定義プラグインの設計時の注意事項

設計時の注意事項を次に示します。

(1) 変換処理中のメッセージ画面の表示についての注意事項

レンディション変換処理を停止させないために、問い合わせメッセージなどを画面に表示させないようにしてください。

(2) ユーザ定義プラグインの中断についての注意事項

レンダリングオプションは、次の事象が発生したとき、ユーザ定義プラグインの処理を中断しますので注意してください。

レンダリングオプション自体が停止した場合

この場合に、レンダリングオプションがユーザ定義プラグインを中断する手順は次のとおりです。

レンディション変換プラグイン設定ファイルの `user_stop_waittime` エントリで指定された期間内にユーザ定義プラグインの処理が完了しなかった場合に、ユーザ定義プラグインの処理を強制終了します。

この場合、レンディション変換プラグイン設定ファイルの `user_subprocess_name` でサブプロセス名称が指定されているときは、システム上で起動しているすべてのプロセスのうち、`user_subprocess_name` エントリで指定されたプロセス名称を持つプロセスを強制終了します。

ユーザ定義プラグインによる変換処理が、レンディション変換プラグイン設定ファイルで指定された期間内に完了しなかった場合

この場合に、レンダリングオプションがユーザ定義プラグインを中断する手順は次のとおりです。

レンディション変換プラグイン設定ファイルの `user_stop_waittime` エントリで指定された期間内にユーザ定義プラグインの処理が完了しなかった場合に、ユーザ定義プラグインの処理を強制終了して、変換先レンディションの変換フラグを「変換エラー」に変更します。

この場合、レンディション変換プラグイン設定ファイルの `user_subprocess_name` でサブプロセス名称が指定されているときは、システム上で起動しているすべてのプロセスのうち、`user_subprocess_name` エントリで指定されたプロセス名称を持つプロセスを強制終了します。

付録 E UOC の設計と作成方法

UOC を利用することによって、レンディション変換プラグインの機能の一部を変更できます。ここでは、PDFstaff を使用するレンディション変換プラグインに対応した UOC の設計と作成方法について説明します。なお、Microsoft Office を使用するレンディション変換プラグインの場合は、UOC を利用できません。

変換元ファイルに表紙やプロパティ情報などを追加して PDF 変換する場合は、UOC を作成してください。

なお、文書空間で使用する文字コード種別が UTF-8 の場合、UOC を使用したレンディション変換はできません。

付録 E.1 UOC の処理概要

UOC は、PDF 変換の要求がある場合に、PDF 変換プラグインから呼び出されます。

作成する UOC のプログラムに組み込む必要のある処理の流れは、次のとおりです。

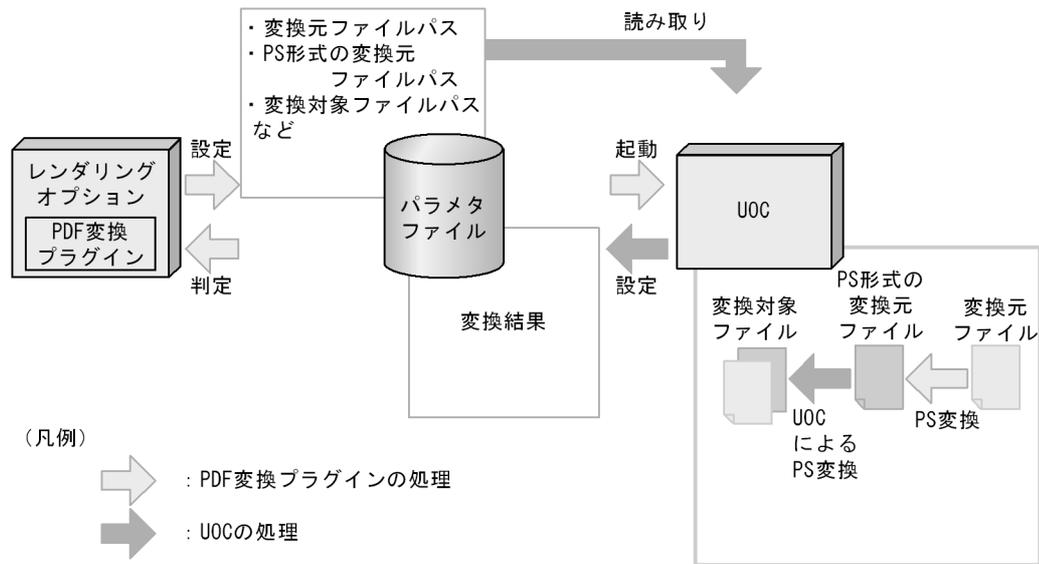
1. 変換元ファイルを PostScript 形式のファイルに変換する
2. 変換結果をパラメタファイル (Windows 初期設定ファイル形式) に書き込む
3. プログラムを終了する

PDF 変換プラグインとのインターフェースは次のとおりです。

1. 変換元ファイルパスや PostScript 形式の変換元ファイルパスなどの情報を PDF 変換プラグインからパラメタファイルとして受け取って起動する
2. パラメタファイルの設定内容を基に、PDF 変換の入力ファイルとなる PostScript 形式のファイルを作成する
3. 変換結果をパラメタファイルに書き込む
4. PDF 変換プラグインはパラメタファイルに書き込まれた情報で変換結果を判定し、エラーメッセージをログファイルに出力するか、レンディション変換の処理を続行するか判断する

このマニュアルでは、PDF 変換の入力ファイルとなる PostScript 形式のファイルを変換対象ファイルと呼びます。

図 E-1 UOC の処理の流れ



一つの文書ファイルに対して、複数の UOC を実行することもできます。先に実行された UOC が正常終了した場合だけ、次の UOC が実行されます。

サンプルプログラムでは、UOC と同じディレクトリにある Uoc.ini に複数の UOC の実行順序を定義します。Uoc.ini の定義に従って、UOC が順に実行されます。

付録 E.2 UOC の作成に使用できる言語

UOC のプログラムの作成には、次の言語を使用できます。

Visual Basic 5.0 または Visual Basic 6.0

Visual C++ 5.0 または Visual C++ 6.0

これらどちらかの言語でコーディングしてコンパイルし、Win32 実行形式ファイル (*.exe) として作成してください。

次のディレクトリに、Visual Basic 5.0 および Visual C++ 5.0 で作成した UOC のサンプルプログラム (基本的な処理を記述したソースファイル、コンパイルに必要なプロジェクトファイルなど) が格納されています。

Visual Basic 5.0 用

<インストールディレクトリ> \sample\%uoc%\vb5\Sample2\

Visual C++ 5.0 用

<インストールディレクトリ> \sample\%uoc%\vc5\Sample2\

このサンプルプログラムには次の処理が記述されています。

- UOC の引数のチェック
- パラメタファイルの内容の読み取り
- 変換処理の前準備
- 変換対象ファイルの作成
- パラメタファイルへの処理結果の書き込み

変換元ファイルから変換対象ファイルへの変換処理の部分を実装して、このサンプルプログラムに組み込んでください。

Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 を使用する場合は、Visual Basic 6.0 または Visual C++ 6.0 でプロジェクトファイルを開き、コンパイルしてください。

付録 E.3 UOC のインターフェースの詳細

(1) 入力情報

レンダリングオプションは、UOC を起動する際に、引数にパラメタファイルのファイルパスをフルパスで設定して UOC に渡します。レンダリングオプションが設定するパラメタファイルの内容は次のとおりです。

```
[UserParam]
infile=変換元ファイルパス
infile2=PostScript形式の変換元ファイルパス
outfile=変換対象ファイルパス
renditiontype=レンディションタイプ
retrievalname=リトリバルネーム
[RecordInfo]
classname=変換対象のDMAクラスの文書クラス名 ( dmaClass_DocVersion またはそのサブクラスの名称 )
recordnum=取得したレコード数
propnum=取得したプロパティ数
[Record<n>]
prop<n>=プロパティ値
```

UOC のパラメタファイルに設定されるセクションおよびエントリについて、次に示す表で説明します。

表 E-1 UOC のパラメタファイルに設定されるセクションおよびエントリ

セクション名	エントリ名	説明
UserParam	infile	変換元ファイルのファイルパスがフルパスで設定されます。
	infile2	変換元ファイルを印刷処理によって変換した PostScript 形式のファイルのファイルパスがフルパスで設定されます。
	outfile	PDF 変換の入力ファイルとなる変換対象ファイルのファイルパスがフルパスで設定されます。
	renditiontype	変換元ファイルのレンディションタイプが設定されます。
	retrievalname	変換元ファイルのリトリバルネームが設定されます。
RecordInfo ¹	classname	変換対象の DMA クラスの文書クラス名 (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラスの名称) が設定されます。
	recordnum	SQL 情報ファイルに記述されている SQL を実行して取得した、処理対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) のレコード数が設定されます。設定されるレコード数の上限は 32 です。33 個以上のレコードを取得した場合は、32 が設定されます。
	propnum	SQL 情報ファイルに記述されている SQL を実行して取得した、処理対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) の各レコードを構成するプロパティの数が設定されます。設定されるプロパティの数の上限は 32 です。33 個以上のプロパティを取得した場合は、32 が設定されます。

セクション名	エントリ名	説明
Record<n> 1 2	prop<n>	<p>SQL 情報ファイルに記述されている SQL を実行して取得した、処理対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) のレコードを構成するプロパティの値が設定されます。prop<n> エントリは取得したプロパティの数だけ設定されます (<n> は 1 からの通番)。</p> <p>なお、SQL 文の実行によって取得できるのは、Integer32 型および String 型のプロパティだけです。prop<n> エントリの設定例を次に示します。</p> <p>Integer32 型のプロパティの場合 ダブルクォート (") で囲まれた符号付き整数が設定されます。プロパティの値が NULL の場合、"0" が設定されます。 (例) prop1="12345" prop2="-12" prop3="0"</p> <p>String 型のプロパティの場合 ダブルクォート (") で囲まれた文字列が設定されます。プロパティの値が、0 バイトの文字列または NULL の場合、空文字列 ("") が設定されます。 (例) prop1="manual" prop2=""</p>

注 1

レンディション変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) で指定した SQL 情報ファイルに、変換対象クラスが定義されている場合だけ設定されます。

注 2

Record<n> セクションは、SQL 情報ファイルに記述されている SQL を実行して取得したレコードの数だけ設定されます (<n> は 1 からの通番)。

UOC は変換対象ファイルを次の流れで作成する必要があります。

1. infile エントリに設定された変換元ファイル、infile2 エントリに設定された PostScript 形式の変換元ファイル、およびパラメタファイルに設定されている各種情報を取得する
2. 取得した各種情報を利用して、outfile エントリに設定された変換対象ファイルを作成する

(2) 出力情報

処理を完了したあと、UOC がパラメタファイルに書き込む内容は、次のとおりにしてください。

```
[UserParam]
outfile=変換対象ファイルパス
errorcode=変換結果コード
errmsg=エラーメッセージ
```

各エントリに設定する必要がある値は、次のとおりです。

- outfile エントリには、変換対象ファイルのファイルパスをフルパスで設定してください。UOC 呼び出し時に outfile エントリに設定されていたファイルパスで変換対象ファイルを作成した場合は、outfile エントリの値を変更する必要はありません。PostScript 形式の変換元ファイルを変換の入力ファイルとして利用する場合は、outfile エントリに infile2 エントリの値を設定するようにしてください。
- errorcode エントリには、結果に応じて UOC の変換結果コードを設定し、エラーの場合は errmsg エントリにエラーメッセージを設定してください。
errorcode エントリに設定できる UOC の変換結果コードを次の表に示します。

表 E-2 UOC の変換結果コード

変換結果コード	意味	レンダリングオプションの動作と変換フラグの状態
0	正常終了	UOC での変換によって出力された PostScript 形式のファイルを使って、PDF 変換処理を継続します。
1	変換処理を続行できるエラー	UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、次の文書の変換処理に移ります。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
2		UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、次の文書の変換処理に移ります。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。
3	変換処理を続行できないエラー	UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、処理中のレンディション変換要求を中断します。次のレンディション変換要求コマンドがある場合は、次のレンディション変換要求を続けて処理します。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
4		UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、処理中のレンディション変換要求を中断します。次のレンディション変換要求コマンドがある場合は、次のレンディション変換要求を続けて処理します。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。
5	レンダリングオプションが処理を続行できないエラー	UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、レンダリングオプションは終了します。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」のまま遷移しません。
6		UOC が errormsg エントリに設定したエラーメッセージをエラーログに出力したあと、レンダリングオプションは終了します。 変換先レンディションの変換フラグは、「変換要」から「変換エラー」に遷移します。

0 ~ 6 以外の値が設定されると、PDF 変換プラグインは 5 が設定されたものと仮定して動作します。UOC が設定する変換結果コードは、次のルールに従って指定することを推奨します。

- 処理に成功した場合、0 を設定します。
- 処理に失敗しても、再実行すると成功する見込みがある場合、1、3 または 5 を設定します。
- 変換元ファイルの内容に問題があり、再実行しても成功する見込みのない場合、2、4 または 6 を設定します。
- UOC の環境設定などに誤りがあり、レンディション変換要求を処理できない場合、3 または 4 を設定します。
- メモリ不足、ハードディスク容量不足、動作環境不正など、処理の続行が困難な場合、5 または 6 を設定します。

付録 E.4 UOC の設計時の注意事項

UOC の設計時には、変換処理中のメッセージ画面の表示について次のことを注意してください。

- レンディション変換処理を停止させないために、問い合わせメッセージなどを画面に表示させないようにしてください。

付録 E.5 UOC の環境設定

UOC を実行する場合に必要な環境設定を次に示します。

- レン디션変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) の設定
- SQL 情報ファイルの作成

(1) レン디션変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) の設定

UOC を実行する場合、レン디션変換プラグイン設定ファイル (EDMRDRPlugins.ini) にエントリを指定します。UOC の実行に関するエントリを次に示します。

- uoc エントリ
- uoc_sql エントリ

UOC を実行する場合に必要なエントリの設定の詳細については、「6.1.3(1) レン디션変換プラグイン設定ファイルの基本設定」を参照してください。

(2) SQL 情報ファイルの作成

変換対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) のプロパティ情報を追加して変換対象ファイルを作成する場合は、SQL 情報ファイルを作成する必要があります。

SQL 情報ファイルには、変換対象の DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) のプロパティを取得するための SQL 文を記述します。SQL 情報ファイルの格納場所は任意です。

SQL 情報ファイルの内容は次のとおりです。

[変換対象のDMAクラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) の名称]
sql=UOCで使用するプロパティを取得するためのSQL文

SQL 情報ファイルには、UOC で利用するプロパティ情報を DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) ごとに定義します。対象とするクラスの数だけセクションを定義します。ただし、指定できるセクションの数は、32 個までです。32 個を超えるセクションを指定すると、33 個目以降のセクションは無視されます。

SQL 情報ファイルに指定するセクションおよびエントリは次のとおりです。

- セクション名には、DMA クラスの文書クラス名 (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラスの名称) を指定します。なお、指定した文書クラスが存在しない場合、または指定した文書クラスが DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) でない場合、レンダリングオプションは KMBX11311-E のメッセージを出力して、処理を停止します。
- sql エントリには、プロパティ情報を取得するための SQL 文を記述します。SQL 文の文法の詳細については、マニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ C++ 解説」またはマニュアル「DocumentBroker Version 3 クラスライブラリ Java 解説」を参照してください。
なお、sql エントリには、? パラメタを使用して DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion またはそのサブクラス) の dmaProp_OIID プロパティと完全一致させる条件を記述する必要があります。sql エントリには、8,192 バイトまでの SQL 文を指定できます。8,192 バイトを超える SQL 文を指定すると、8,193 バイト目以降は無視されます。sql エントリの記述例を次に示します。なお、sql エントリは 1 行で記述します。 は半角スペースです。

```
sql=select dmaProp_OIID,任意のプロパティ名,... from usrClass_DocVer where
dmaProp_OIID=? and <その他の条件>
```

付録 F 用語解説

レンダリングオプションで使用する用語について説明します。

(英字)

CdbrDocument クラス

DocumentBroker で扱う文書を表すクラスライブラリのクラスです。バージョンなし文書クラスに相当します。

CdbrVersionableDocument クラス

DocumentBroker で扱う文書を表すクラスライブラリのクラスです。このクラスによって表される文書は、バージョン管理できます。バージョン付き文書クラスに相当します。

CORBA

OMG が提唱するオブジェクト間の通信メカニズムを提供する ORB の標準アーキテクチャです。

DMA

文書管理インターフェースの標準化を図る団体 AIIM によって定義される共通インターフェースです。

dmaClass_DocVersion クラス

文書を表す最上位の DMA クラスです。バージョンなし文書のプロパティおよびバージョン付き文書のバージョン固有プロパティの定義基となる DMA クラスのスーパークラスです。レンディション変換の対象文書クラスとして指定する DMA クラスの文書クラスのスーパークラスです。

DMA クラス

DMA のオブジェクトモデルに基づいたクラス、DocumentBroker で定義しているクラスおよびそのサブクラスを指します。レンダリングオプションでは、レンディション変換の対象文書クラスの指定時に、DMA クラスの文書クラス (dmaClass_DocVersion クラスまたはそのサブクラス) を指定します。DMA クラスを基に作成・管理されるオブジェクトを DMA オブジェクトといいます。

MIME 形式

MIME::application/pdf, MIME::image/tiff など、文書ファイルのレンディションタイプを表す形式です。

OIID

文書空間での永続オブジェクトの存在や格納位置などを明確にするために使用する識別子です。OIID は DMA URL として定義されます。

UOC

ユーザによって作成されたプログラムのことです。UOC を利用することで、レンディション変換プラグインの機能の一部を変更することができます。

(ア行)

アクセス権

オブジェクトを作成したり、すでに作成されているオブジェクトにアクセスしたりする権利です。

オブジェクト操作ツール

DocumentBroker が提供するクラスライブラリを使用したクライアントアプリケーションです。クラスライブラリを使用してユーザがクライアントアプリケーションを開発する場合に、必要であると思われる機能をコマンド群として提供します。

レンダリングオプションでは、オブジェクト操作ツールの文書のレンディションを操作するためのコマンドをバンドル

しています。

(カ行)

クラス定義情報ファイル

DocumentBroker サーバで定義されている DMA オブジェクトのクラスまたはそのサブクラスのクラス名またはプロパティ名から GUID, データ型, プロパティの基本単位などの情報を取得するために使用するファイルです。EDMCrtSimMeta コマンドでも作成できます。

クラスライブラリ

複数の DMA オブジェクトを機能ごとにまとめて操作するために DocumentBroker Development Kit で提供しているインターフェースです。

コンテンツ (文書ファイル)

文書のデータ部分を指します。DMA で規定されているコンテンツ管理モデルに従ってアクセスされるオブジェクトの実体 (例えば, report.doc, document.pdf など) です。

(サ行)

サブクラス

あるクラスから派生するクラスのことです。または, それ自身がサブクラスとして参照されているクラスのことです。

サブレンディション

マルチレンディション文書に, 追加登録されたレンディションのことです。マスタレンディション以外のレンディションを指します。なお, サブレンディションは, 登録後にマスタレンディションに変更できます。

システム管理者

レンダリングオプションの運用管理者です。

状態フラグ

マルチレンディション文書の, マスタレンディションに対するサブレンディションのコンテンツの状態を表すフラグです。マスタレンディションとサブレンディションのコンテンツの状態が一致している, マスタレンディションのコンテンツが更新されたのに対してサブレンディションのコンテンツが更新されていない, またはサブレンディションのコンテンツが存在しない, という 3 種類の状態が表されます。dbrProp_RenditionStatus プロパティの下位 2 バイトに設定されます。

スーパークラス

あるクラスのクラス定義に使用されたクラスを, 派生したクラスのスーパークラスといいます。

(タ行)

チェックアウト (check-out)

文書またはコンテナにバージョンを追加するために, 次バージョンの追加を予約して, 最新バージョンのコピーを要求することです。

DMA オブジェクトでは, VersionSeries オブジェクトに新規 DocVersion オブジェクト (文書) を作成するための権利を予約して, 新規 DocVersion オブジェクトの追加対象となる VersionSeries オブジェクトで管理している最新の DocVersion オブジェクトのコピーを要求することです。

トレース情報

レンダリングオプションの起動から終了までの履歴情報です。

(八行)

バージョン付き文書

C++ クラスライブラリの `CdbrVersionableDocument` オブジェクトに相当します。バージョン管理できる文書の複数のバージョンをまとめて管理するオブジェクトです。

バージョンなし文書

C++ クラスライブラリの `CdbrDocument` オブジェクトに相当します。バージョン管理しない文書を表すオブジェクトです。

標準提供プラグイン

レンダリングオプションが標準提供するレンディション変換プラグインです。PDF 変換プラグインは、Word 形式、一太郎形式、プレーンテキスト形式、TIFF 形式などのファイルを PDF 形式に変換できます。

文書空間

DMA オブジェクトモデルを実装するリポジトリです。また、文書空間を識別する ID のことを文書空間識別子といいます。

変換対象文書クラス一覧ファイル

レンディション変換の変換対象文書を特定するときの検索対象クラスを指定するファイルです。レンディション変換要求コマンドでファイルパスを指定して使用します。

変換フラグ

マルチレンディション文書の、サブレンディションの文書ファイルを、レンディション変換の対象にするかどうかを表すフラグです。また、レンディション変換でエラーが発生した場合には、エラーを示すフラグとしても使われます。`dbrProp_RenditionStatus` プロパティの上位 2 バイトに設定されます。

変換元レンディションタイプ一覧ファイル

レンディション変換の変換対象文書をマスタレンディションのレンディションタイプで絞り込みたい場合に、変換対象としたいマスタレンディションのレンディションタイプの一覧を記述するファイルです。レンディション変換要求コマンドでファイルパスを指定して使用します。

(マ行)

マスタレンディション

マルチレンディション文書に、最初に登録されたレンディションのことです。マルチレンディション文書を参照・更新するときには、レンディション形式を指定しますが、レンディション形式を指定しない場合は、マスタレンディションが対象になります。なお、マスタレンディションとして扱うレンディションは、登録後に変更できます。

マルチレンディション機能

一つの文書に、同一内容の複数の異なる形式のコンテンツを登録する機能です。

マルチレンディション文書

複数のレンディションを登録している文書のことです。一つの同じ内容を表す複数の形式のコンテンツを保持する文書です。`CdbrDocument` クラスまたは `CdbrVersionableDocument` クラスを使用して操作します。

(ヤ行)

ユーザ情報

`DocumentBroker` のログインユーザのユーザ識別子、所属グループ、特権およびユーザ権限を表す情報です。ログイン時にユーザごとに生成され、アクセス権判定に使用されます。

ユーザ定義プラグイン

ユーザが作成・定義するレンディション変換プラグインです。

(ラ行)

レンディション

文書のコンテンツの形式およびそのコンテンツを合わせてレンディションと呼びます。DMA オブジェクトの Rendition オブジェクトおよび ContentTransfer オブジェクトに相当します。

レンディションタイプ

登録した文書のコンテンツのファイル形式を表す文字列です。レンディションごとに設定できます。DocumentBroker では、レンディションタイプとして、MIME 名を指定することを推奨しています。

レンダリングオプションでは、変換元レンディションと変換先レンディション指定するときなどに使用します。変換元レンディションのレンディションタイプを変換元レンディションタイプ、変換先レンディションのレンディションタイプを変換先レンディションタイプといいます。

レンディション変換

マルチレンディション文書の、マスタレンディションのコンテンツの文書形式を変換して、サブレンディションのコンテンツを作成、登録することです。

レンディション変換環境設定ファイル

レンダリングオプションの動作を定義する環境設定ファイルです。

レンディション変換プラグイン

レンディション変換の文書ファイルの変換処理にプラグインするプログラムです。レンダリングオプションでは、PDF 変換プラグインを標準提供しています。また、ユーザ定義プラグインを作成・定義して使用することもできます。

レンディション変換プラグイン設定ファイル

レンダリングオプションで使用するレンディション変換プラグインの動作を定義する環境設定ファイルです。

レンディション変換要求コマンド

レンディション変換の要求内容を指定して、レンダリングオプションに対して、レンディション変換を要求するコマンドです。Windows のコマンドプロンプトから入力します。

ログ情報

レンダリングオプションの処理結果に関する情報およびエラー情報です。変換要求受け付けログ、変換結果ログ、変換処理ログ、およびエラーログがあります。特に重要なログ情報は Windows のイベントログに出力されます。

索引

記号

-a 57

-c 55

-m 55

-o 56

-r 55

A

ACCEPT 88

AddRendition メソッド 45

addRendition メソッド 46

application/jxw 5

application/msword 4

application/pdf 6

application/postscript 6

application/rtf 6

application/vnd.micrografx.igx 6

application/vnd.ms-excel 4

application/vnd.ms-

 excel.sheet.binary.macroEnabled.12 5

application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12 5

application/vnd.ms-powerpoint 5

application/vnd.ms-

 powerpoint.presentation.macroEnabled.12 5

application/vnd.ms-

 word.document.macroEnabled.12 4

application/vnd.openxmlformats-

 officedocument.presentationml.presentation 5

application/vnd.openxmlformats-

 officedocument.spreadsheetml.sheet 5

application/vnd.openxmlformats-

 officedocument.wordprocessingml.document 4

application/vnd.visio 5

application/x-js-taro 5

B

BADEXT 90

BMP 形式 6

C

C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグが「変換要」の空のレンディションを追加する方法 45

C++ クラスライブラリで開発したクライアントアプリケーションで変換フラグに「変換要」を設定する方法 47

CdbrDocument クラス 11, 132

CdbrVersionableDocument クラス 11, 132

CHANGED 90

classname 128

CNVEND 89

CNVERR 90

CNVSTART 88

CNVSTOP 89

conv_log_generation 63

conv_log_size 63

CONVERT_REQUIRED|MASTERREND_UPDATE E 15

CONVERT_REQUIRED|NO_SUBREND 15

CORBA 132

D

DbjDef.RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED 45

DBR_CONVERT_TYPE_BATCH 45

DBR_RENDSTATUS_CONVERT_ERROR 114

DBR_RENDSTATUS_CONVERT_NOTREQUIRED 114

DBR_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED 45, 114

DBR_RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE 114

DBR_RENDSTATUS_NO_SUBREND 114

DBR_RENDSTATUS_SUBREND_EXIST 114

dbrProp_RenditionStatus プロパティ 15, 45, 114

dbrrndrdoc.exe 46

dbrrndrdoc コマンド 46

DBU_RENDSTATUS_CONVERT_ERROR 114

DBU_RENDSTATUS_CONVERT_NOTREQUIRED 114

DBU_RENDSTATUS_CONVERT_REQUIRED 114

DBU_RENDSTATUS_MASTERREND_UPDATE 114

DBU_RENDSTATUS_NO_SUBREND 114

DBU_RENDSTATUS_SUBREND_EXIST 114

debug_trace_generation 64

debug_trace_size 64

DLERR 90

DMA 132

dmaClass_DocVersion クラス 11, 74, 132

DMA クラス 74, 132
 docspace 61
 docspaceid 61
 DocumentBroker Development Kit 7
 DocumentBroker Development Kit または
 DocumentBroker Runtime のトレースファイルの
 採取方法 84
 DocumentBroker Runtime 7
 DocumentBroker クライアントでのレンディション
 変換の準備 45
 DocumentBroker クライアントの設定 28

E

EDMCLASSDEFPATH 29
 EDMCrtSimMeta コマンド 74
 EDMRCDOCSPACE 29
 EDMRCVConvert.log 15
 EDMRCVError.log 15
 EDMRCVResult.log 15
 EDMRDRCnv.log 80
 EDMRDRErr.log 80
 EDMRDRPCTUSR.DLL 24
 EDMRDRPFGPDF.DLL 24
 EDMRDRPLPP12.DLL 24
 EDMRDRPlugins.ini 14, 24, 60
 EDMRDRPlugins.ini.msosf 26
 EDMRDRPlugins.ini.pdfs 26
 EDMRDRPLWD12.DLL 24
 EDMRDRPLXL12.DLL 24
 EDMRDRReq 52, 55
 EDMRDRREQ.EXE 24
 EDMRDRReq.log 15, 80
 EDMRDRRes.log 80
 EDMRDRSetup.ini 14, 24, 60
 EDMRDRStop 52, 57
 EDMRDRSTOP.EXE 24
 EDMRDRTrc.log 14
 EPS 形式 6
 errfile_backup_size 64
 ERROR 88
 error_log_generation 64
 error_log_size 64
 errorcode 124, 129
 errmsg 124, 129
 Excel 形式 4

F

from<n> 67

G

GIF 形式 5

I

iGrafX ファイル形式 6
 image/bmp 6
 image/gif 5
 image/jpeg 5
 image/png 6
 image/tiff 5
 infile 123, 128
 infile2 128

J

Java クラスライブラリで開発したクライアントアプ
 リケーションで変換フラグが「変換要」の空のレン
 ディションを追加する方法 46
 Java クラスライブラリで開発したクライアントアプ
 リケーションで変換フラグに「変換要」を設定する
 方法 47
 JP1/AJS2 サービス 116
 JP1/AJS2 と連携する場合のシステム構成例 115
 JP1/AJS2 の環境設定 116
 JP1/AJS2 を使用してレンディション変換を自動化す
 るための環境設定 115
 JP1 権限レベル 117
 JP1 資源グループ 117
 JP1 ユーザの登録 117
 JPEG 形式 5

K

KMBX 93

L

lConvertType 45
 log 63

M

message/rfc822 6
 Microsoft Office 8
 MIME 形式 76, 132

O

Office 8
 OIID 90, 132
 OK 90

opt_bookmarkautocreate 69
 opt_converttopsttimeout 68
 opt_endpoint 68
 opt_filetypesettingname 69
 opt_joboptionsettingname 69
 opt_maxpsfilesizews 68
 opt_messagelocale 70
 opt_pdfgenerator 70
 opt_pollinginterval 69
 opt_pptfittopage 70
 opt_printer 69
 opt_proxyservername 68
 opt_proxyserverport 68
 opt_proxyusername 68
 opt_proxyusrpassword 68
 opt_securitysettingname 69
 opt_timeout 68
 opt_useproxy 68
 opt_webservicepass 70
 opt_webserviceuser 70
 Options 123
 OS ユーザの登録 115
 outfile 123, 124, 128, 129

P

password 61
 PDFstaff 8
 PDFstaff の設定 28
 PDF 形式 6
 PDF 変換プラグイン 8
 plugin 65, 66
 plugin_timeout 66
 plugininfile 123
 plugininfilesection 123
 PNG 形式 6
 PowerPoint 形式 5
 prop<n> 129
 prop_consistent 62
 propnum 128

R

readme.txt 23
 Record<n> 129
 RecordInfo 128
 recordnum 128
 REJECT 88
 renditiontype 128
 REQUEST 88
 result_log_generation 64

result_log_size 64
 retrievalname 128

S

Sample2.bas 25
 Sample2.c 26
 Sample2.dsp 26
 Sample2.dsw 26
 Sample2.h 26
 Sample2.vbp 25
 SEARCHERR 89
 sql 72, 131
 sql エントリの記述例 131
 SQL 情報ファイル 71, 131

T

TEMP 29
 text/plain 5
 TIFF 形式 5
 TMP 29
 to 66
 TPBroker 8

U

ULERR 90
 UOC 132
 uoc 67
 Uoc.ini 26
 uoc_sql 67
 UOC のインターフェースの詳細 128
 UOC の環境設定 130
 UOC の作成 33
 UOC の作成に使用できる言語 127
 UOC の処理概要 126
 UOC の設計時の注意事項 130
 UOC の設計と作成方法 126
 UOC のパラメタファイルに設定されるセクションおよびエントリ 128
 UOC の変換結果コード 130
 userid 61
 UserParam 128
 UserPlugin.bas 25
 UserPlugin.c 25
 UserPlugin.dsp 25
 UserPlugin.dsw 25
 UserPlugin.h 25
 UserPlugin.vbp 25

V

Visio 形式 5
Visual Basic 5.0 122, 127
Visual Basic 6.0 122, 127
Visual C++ 5.0 122, 127
Visual C++ 6.0 122, 127

W

Web アーカイブファイル形式 6
Word 形式 4

あ

アクセス権 132
アンインストール 26

い

一太郎 8
一太郎形式 5
イベントログ 14, 80, 81
イベントログの採取方法 81
イベントログの採取方法とその見方 80
イベントログの見方 81
インストール 21
インストールディレクトリ 22

う

受け付け番号 88, 89
運用 43
運用モデル 36
運用例 35

え

エラーログ 15, 80
エラーログの採取方法 83
エラーログの採取方法とその見方 83
エラーログの出力形式 90
エラーログの見方 83

お

オブジェクト操作ツール 132
オブジェクト操作ツールで変換フラグが「変換要」の
空のレンディションを追加する方法 46

か

概要 1
環境設定ファイル 34, 60

環境設定ファイルの記述形式 60
環境設定ファイルの設定 34
環境変数 EDMCLASSDEFPATH の設定 29
環境変数 EDMRCDOCSPACE の設定 29
環境変数 TEMP の設定 30
環境変数 TMP の設定 30
環境変数の設定 29

き

起動方法 44

く

クラス定義情報ファイル 29, 74, 133
クラスライブラリ 133

こ

コマンド一覧 52
コマンドの形式 53
コマンドの実行ファイルに対するアクセス権 54
コマンドの文法 55
コマンドリファレンス 51
コンテンツ（文書ファイル）133

さ

サブ空 114
サブクラス 133
サブレンディション 2, 133
サンプルプログラム 32, 33

し

システム管理者 133
システム構成 7
システム構成例 7
実行環境設定の流れ 20
実行環境の設定 19
障害対策 79
状態フラグ 15, 114, 133
ジョブネット 118
ジョブネットの定義 118
処理コード 88
新規にレンディション変換をする 45

す

スーパークラス 133

ち

チェックアウト 12, 133

て

停止方法 44

ディレクトリ構成の確認 22

と

トレース情報 14, 133

トレース情報の採取方法 84

トレースファイル 84

に

認証サーバの指定 116

は

バージョン付き文書 134

バージョン付き文書クラス 11

バージョンなし文書 134

バージョンなし文書クラス 11

パラメタファイル 122, 126

ひ

標準エラー出力 92

標準提供のプラグイン機能での変換先レンディシ
ョンタイプ 6

標準提供のプラグイン機能での変換元レンディシ
ョンタイプ 4

標準提供プラグイン 9, 134

標準のレンディション変換 6

ふ

複数の文書空間が存在するシステムでのレンディシ
ョン変換 120

プレーンテキスト形式 5

プログラムフォルダ 21

文書空間 134

文書空間識別子 30

へ

変換エラー 48, 114

変換エラー | サブ空 114

変換エラー | マスタ / サブ不一致 114

変換エラーになったファイルの採取方法 86

変換オプションファイル 56, 75

変換結果ログ 13, 15, 80

変換結果ログの採取方法 82

変換結果ログの採取方法とその見方 82

変換結果ログの出力形式 88

変換結果ログの見方 82

変換先ファイル 4

変換先レンディション 4

変換先レンディションタイプ 11, 55

変換処理ログ 15, 80

変換処理ログの採取方法 82

変換処理ログの採取方法とその見方 82

変換処理ログの出力形式 89

変換処理ログの見方 82

変換対象の文書クラス 11

変換対象ファイル 126

変換対象文書クラス一覧ファイル 11, 55, 74, 134

変換対象文書の特定 15

変換不要 46, 114

変換不要 | マスタ / サブ一致 114

変換フラグ 15, 45, 114, 134

変換元ファイル 4

変換元レンディション 4

変換元レンディションタイプ 13

変換元レンディションタイプ一覧ファイル 13, 55,
73, 134

変換要 15, 45, 48, 114

変換要 | サブ空 15, 114

変換要 | マスタ / サブ不一致 15, 114

変換要求受け付けログ 13, 15, 80

変換要求受け付けログの採取方法 81

変換要求受け付けログの採取方法とその見方 81

変換要求受け付けログの出力形式 87

変換要求受け付けログの見方 81

ほ

ポストスクリプト形式 6

ま

マスタ / サブ一致 114

マスタ / サブ不一致 114

マスタレンディション 2, 134

マスタレンディションを更新して再びレンディシ
ョン変換する 46

マルチレンディション機能 2, 134

マルチレンディション文書 134

め

メッセージ 91

メッセージテキスト 94

メッセージの記述形式 93
 メッセージの出力形式 93
 メッセージの出力先 92
 メッセージの詳細 95

ゆ

ユーザ情報 134
 ユーザ情報の作成 31
 ユーザ定義プラグイン 9, 135
 ユーザ定義プラグインのインターフェースの詳細
 123
 ユーザ定義プラグインの作成 32
 ユーザ定義プラグインの作成に使用できる言語 122
 ユーザ定義プラグインの処理概要 122
 ユーザ定義プラグインの設計時の注意事項 125
 ユーザ定義プラグインの設計と作成方法 122
 ユーザ定義プラグインの変換結果コード 124
 ユーザマッピングの設定 117

り

リッチテキスト形式 6
 リモートインストールの場合のインストール先 22

れ

レンダリングオプション 2
 レンダリングオプションで使用できる文字コード種別
 18
 レンダリングオプションとは 2
 レンダリングオプションの構成 8
 レンダリングオプションの処理概要 10
 レンダリングオプションの処理の流れ 13
 レンダリングオプションのディレクトリ構成 23
 レンダリングオプションのトレースファイルの採取方
 法 84
 レンダリングオプションのプロセス ID 85
 レン디션 2, 135
 レン디션タイプ 135
 レン디션タイプの指定方法 76
 レン디션の変換要求 10
 レン디션変換 135
 レン디션変換環境設定ファイル 14, 60, 135
 レン디션変換環境設定ファイル
 (EDMRDRSetup.ini) 60
 レン디션変換環境設定ファイルに設定できるセ
 クションおよびエントリ 61
 レン디션変換機能 3
 レン디션変換強制停止コマンド 57

レン디션変換前後の変換フラグおよび状態フラ
 グの遷移 114
 レン디션変換でエラーになった文書を再びレン
 ディション変換する 48
 レン디션変換で使用するファイル 59
 レン디션変換の実行 13
 レン디션変換プラグイン 8, 14, 135
 レン디션変換プラグイン設定ファイル 14,
 60, 135
 レン디션変換プラグイン設定ファイル
 (EDMRDRPlugins.ini) 64
 レン디션変換用 PC 7
 レン디션変換用 PC の前提プログラムの構成 7
 レン디션変換用 PC の前提プログラムの設定
 28
 レン디션変換要求コマンド 8, 10, 55, 135

ろ

ログ情報 135
 ログ情報の採取方法とその見方 80
 ログの一覧 80
 ログのサイズ上限の指定 80
 ログの出力形式 87
 ログのバックアップ世代数の指定 80